一葉全集

傅文館藏版

74-56

事のついでに

一一葉全集は故一葉女史樋口夏子君の美文を大成したるものなり、この書はしめは齋藤緑雨君に請ふて嚴正なる校訂を加ふべき筈なりしも故ありて果さず、予の校正をなすに方りても、年末執筆の際、匆々校了に附し去りたれば、多少の誤謬無きを保せず、而して會たま用語の妥當ならざるものあるも、陋劣予の如き者の、猥りに故人の文に朱を用ふるの穩かならざるを知りて、多く原文のまゝ置きたり、

一本書收むる所の文章二十一種、字々句々みな金玉、緑雨君の所謂日本に文學滅びざる間は一葉女史在るものなれば、再版發兌の期を竢ちて、徐に緑雨君の校訂を請ひ得つ、併せては森鷗外、幸田露伴の兩君に本書の評論を請ふて、錦上に花を添ふることあるべし、

一本書を編輯するに方りて、先づ之を遺族に諮ひ、次に齋藤緑雨、戸川秋骨の二君

に謀る、二君本書の爲に盡力せらるゝ所多し、こゝに明記して謝す、次に一言深謝せざるべからざるものは星野天知君なり、君は文學界うらわか草の發行者にして、一葉女史とは淺からぬ交誼ある人なり、されば女史の死後、君も亦其文集を公にするの企ありしも、この全集の世に出づるに及びて、全くその企を廢し、材料を悉く本書に與へられたり、予はその高情を多謝す、其他武藏野發行者瀧川君、新文壇編輯者高瀨君の材料轉載を承諾せられたるを多謝す、

一本書表紙口繪の趣向に就きては、齋藤、星野の兩君の忠告ありたれども、匆卒の際、その高意の幾分は、再版の時にまはしつ、初版は全く予の一存にて、事を成したり、されども飽くまで、本書の品位を高からしめんが爲め、特に武内桂舟君に表紙の繪の意匠を請ひ、鈴木華村君に口繪の揮毫を囑したり、淡粧濃抹、少くも本書の光彩を添ふるに餘あらむか、

一予の一葉女史と相識れるは、さる明治廿八年の夏なり、友人半井桃水君の紹介を得て、女史を本郷丸山の寓居に訪へり、半井君は女史が最も親しき舊知己、女

史の作を始めて武藏野に出せるも君なり、改進新聞に其作を介せるも君なり、其後三宅花圃君、女史の作を都の花に介せしより、文壇亦一葉女史の名を知らざるもの無きに至りぬ、乃ち予の女史を訪ひたるは、その後の事なりき、一たび太陽に「行く雲」の一篇を請ひ得てより、にごり江、十三夜、われから等の新著、大つごもり、やみ夜、經机、たけくらべ、雪の日、琴の音、そゞろごと、わかれ霜等の、細心增補訂正せられたるもの數篇を予に寄せて、我が太陽及び文藝倶樂部に巨大なる一の光彩を添へたり、ことに通俗書簡文（日用百科全書第十一編）の一篇の如きは、女史が疾に罹るの前數月、一方ならざる經營慘澹の餘、全く稿を脫せられたるものにして、字々悲愴、句々悽婉、實に千古の名文なり、予はこの間數しば女史に面して親しく其の抱負を叩き、女子半生の經歷の幾分をも知るを得、深くその爲人に敬服し、予が妻をして、女史に就き歌道を學ばしむ、其後妻は多病、予は多事、女史と多く相見るを得ざりし、廿九年十一月廿五日疾頓に革まり、遽然として女史逝けり、享年二十六、予その訃音を得て、倉皇女史の門を叩けば、香煙靄じ、臘花色

襯せ、女史と亦相語ることを得ざりき、噫、女史令妹あり、名を國子君といふ、母に事へて孝順、誠實、女史以て瞑すべし、聊か事のついでに一言を述べて、本書編輯の始末を江湖に告ぐ

明治二十九年十二月廿八日

乙羽大橋生謹識

一葉全集總目次

三っにごり江……（明治二十八年九月作）……一
三われから……（明治二十九年五月作）……三八
二ゆく雲……（明治二十八年五月作）……八〇
一經つくゑ……（明治二十六年六月作）……九七
一やみ夜……（明治二十七年五月作）……一一一
一大つごもり……（明治廿七年十二月作）……一四八
一うもれ木……（明治廿五年十二月作）……一六六
一闇櫻……（明治二十五年三月作）……二〇〇
一玉襷……（明治二十五年四月作）……二〇九
一五月雨……（明治二十五年七月作）……二二五
一曉月夜……（明治二十六年二月作）……二四四

一わかれ霜……（明治二十五年四月作）……二七〇
二花ごもり……（明治二十七年四月作）……三一一
一琴の音……（明治廿六年十二月作）……三三五
一雪の日……（明治二十六年三月作）……三四一
そゞろごと……（明治二十八年十月作）……三四八
三〇うつせみ……（明治二十八年八月作）……三五四
二軒もる月……（明治二十八年四月作）……三七〇
三うらむらさき……（明治二十九年二月作）……三七七
三十三夜……（明治廿八年十二月作）……三八二
三たけくらべ……（明治二十九年一月作）……四〇五

以上

一葉全集

にごりえ

（一）

おい木村さん信さん寄つてお出よ、お寄りといつたら寄つても宜いではないか、又素通りで二葉やへ行く氣だらう、押かけて行つて引ずつて來るからさう思ひな、ほんとにお湯なら歸りに屹度よつてお呉れよ、嘘つ吐きだから何を言ふか知れやしないと店先に立つて馴染らしき突かけ下駄の男をとらへて小言をいふやうな物の言ひぶり、腹も立たずか言譯しながら後刻に後刻にと行過るあとを、一寸舌打しながら見送つて後にも無いもんだ來る氣もない癖に、本當に女房もちに成つては仕方がないねと店に向つて闘をまたぎながら一人言をいへば、高ちやん大分御述懐だね、何もそんなに案じるにも及ぶまい燒棒杭と何とやら、又よりの戻る事もあるよ、

心配しないで呪でもして待つが宜いさと慰さめるやうな朋輩の口振、力ちやんと違つて私しには技倆が無いからね、一人でも逃してはは殘念さ、私しのやうな運の悪るい者には呪も何も聞きはしない今夜も又木戸番か、何たら事だ面白くもないと肝癪まぎれに店前へ腰をかけて駒下駄のうしろでとん〳〵と土間を蹴るは二十の上を七つか十か引眉毛に作り生際、白粉べつたりとつけて唇は人喰ふ犬の如く、かくては紅も厭やらしき物なり、お力と呼ばれたるは中肉の背恰好すらりつとして洗ひ髪の大島田に新わらのさわやかさ、頸もと計の白粉も榮えなく見ゆる天然の色白をこれみよがしに乳のあたりまで胸くつろげて、烟草すば〳〵長烟管に立膝の無作法さも咎める人のなきこそよけれ、思ひ切つたる大形の浴衣に引かけ帶は黒繻子と何やらのまがひ物、緋の平ぐけが背の處に見えて言はずと知れし此あたりの姉さま風なり、お高といへるは洋銀の簪で天神がへしの髷の下を掻きながら思ひ出したやうに力ちやん先刻の手紙お出しかといふ、はあと氣のない返事をして、どうで來るのでは無いけれど、あれもお愛想さと笑つて居るに、大抵におしよ卷紙二尋も書いて二枚切手の大封じがお愛想で出來る物かな、そして彼の人は赤坂以來の馴染ではないか、少しやそつとの紛雜があろうとも縁切れになつて溜る物か、お前の出かた一つで何うでもなるに、ちつとは精を出して取止めるやうに心がけたら宜

かろ、あんまり冥利がよくあるまいと言へば御親切に有がたう、御異見は承り置まして私はどうも彼んな奴は虫が好かないから、無き縁とあきらめて下さいと人事のやうにいへば、あきれたものだのと笑つてお前などは其我まゝが通るから豪勢さ、此身になつては仕方がないと圖扇を取つて足元をあふぎながら、昔しは花よの言ひなし可笑しく、表を通る男を見かけて寄つてお出でと夕ぐれの店先にさはひぬ。

店は二間間口の二階作り、軒には御神燈さげて盛り鹽景氣よく、空壜か何か知らず、銘酒あまた柵の上にならべて幔塙めきたる處もみゆ、勝手元には七輪を煽く音折々に騒がしく、女主が手づから寄せ鍋茶椀むし位はなるも道理、表にかゝげし看板を見れば仔細らしく御料理とぞしたゝめける、さりとて仕出し瓶みに行たらば何とかいふらん、俄に今日品切れもをかしかるべく、女ならぬお客樣は手前店へお出かけを願ひまするとも言ふにかたからん、世は御方便や商賣がらを心得て口取り燒肴とあつらへに來る田舍ものもあらざりき、お力といふは此家の一枚看板、年は隨一若けれども客を呼ぶに妙ありて、さのみは愛想の嬉しがらせを言ふやうにもなく我まゝ至極の身の振舞、少し容貌の自慢かと思へば小面が憎くいと蔭口いふ朋輩もありけれど、交際では存の外やさしい處があつて女ながらも離れともない心持がする、あゝ心とて仕方

のないもの面ざしが何處となく呀へて見へるは彼の子の本性が現はれるのであらう、誰しも新開へ遣入るほどの者で菊の井のお力を知らぬはあるまじ、菊の井のお力か、お力の菊の井か、さても近來まれの拾ひもの、あの娘のお蔭で新開の光りが添はつた、抱へ主は神棚へさゝげて置いても宜いとて軒並びの羨やみ種になりぬ。

お高は往來の人のなきを見て、力ちやんお前の事だから何があつたからとて氣にしても居まいけれど、私は身につまされて源さんの事が思はれる、夫は今の身分に落ぶれては根つから宜いお客ではないけれども思ひ合ふたからには仕方がない、年が違をが子があろがさ、ぬ（左樣で はないか、お内儀さんがあるといつて別れられる物かね、搆ふ事はない呼出してお遣り、私しのなぞといつたら野郎が根から心替りがして顏を見てさへ逃げ出すのだから仕方がない、どうで締め物で別口へかゝるのだがお前のは夫れとは違ふ、了簡一つでは今のお内儀さんに三下り半をも遣られるのだけれど、お前は氣位が高いから源さんと一處にならうとは思ふまい、夫だもの猶の事呼ぶ分に仔細があるものか、手紙をお書き今に三河やの御用聞きが來るだろうから彼の子僧に使ひやさんを爲せるが宜い、何の人お孃樣ではあるまいし御遠慮計申てなる物かな、お前は思ひ切りが宜すぎるからいけない兎も角手紙をやつて御覽、源さんも可愛さうだわなと

言ひながらお力を見れば烟管掃除に餘念のなきは俯向たるまゝ物いはず。

やがて雁首を奇麗に拭いて一服すつてポンとはたき、又すいつけてお高に渡しながら氣をつけてお呉れ店先で言はれると人聞きが悪いではないか、菊の井のお力は土方の手傳ひを情夫に持つなどゝ勘違へをされてもならない、夫は昔しの夢がたりさ、何の今は忘れて仕舞て源とも七とも思ひ出されぬ、もう其話しは止め〳〵といひながら立あがる時袂を通る兵兒帶の一むれ、これ石川さん村岡さんお力の店をお忘れなされたかと呼べば、いや相變らず豪傑の聲がゝり、素通りもなるまいとてずつと遣入るに、忽ち廊下にばた〳〵といふ足おと、姉さんお銚子と聲をかければ、お肴は何をと答ふ、三味の音氣よく聞えて亂舞の足音これよりぞ聞え初ぬ。

（二）

さる雨の日のつれ〳〵に表を通る山高帽子の三十男、あれなりと捉らずんは此降りに客の足とまるまじとお力かけ出して袂にすがり、何うでも遣りませぬと駄々をこねれば、容貌よき身の一德、例になき仔細らしきお客を呼入れて二階の六疊に三味線なしのさめやかなる物語、年を問はれて名を問はれて其次は親もとの調べ、士族かといへば夫れは言はれませぬといふ、平民

かと問へは何うでござんしようかと答ふ、そんなら華族と笑ひながら聞くに、まあ左様おもふて居て下され、お華族の姫様が手づからのお酌、かたじけなく御受けなされとて波々とつぐに、さりとは無作法な盃つぎといふが有る物か、夫れは小笠原か、何流ぞといふに、お力流として菊の井一家の作法、疊に酒のまする流氣もあれば、大平の蓋であはらする流氣もあり、いやなお人にはお酌をせぬといふが大詰めの極りでござんすとて聽したるさまもなきに、客はいよ〳〵面白がりて履歴をはなして聞かせよ定めて凄ましい物語があるに相違なし、唯の娘あがりとは思はれぬ何うたとあるに、御覽なさりませ未だ鬢の間に角も生へませず、其やうに甲羅は經ませぬとてころ〳〵と笑ふを、左様ぬけてはいけぬ、眞實の處を話して聞かせよ、素性が言へずは目的でもいへとて責める、むづかしうござんすね、いふたら貴君びつくりなさりましよ天下を盥む大伴の黒主とは私が事とていよ〳〵笑ふに、これは何うもならぬ其やうに茶利ばかり言はで少し眞實の處を聞かしてくれ、いかに朝夕を嘘の中に送るからとてちつとは賊も交る筈、良人はあつたか、それとも親故かと眞に成つて聞かれるにお力かなしく成りて、私だとて人間でござんすにどに少しは心にしみる事もありまする、親は早くになくなつて今は眞實の手と足ばかり、此様な者なれど女房に持たうといふて下さるも無いではなけれど未だ良人をば持

ませぬ、何うで下品に育ちました身なれば此様な事して終るのでござんしよと投出したやうな詞に無量の感があふれてあだなる姿の浮氣らしきに似ず一節さむらふ様子のみゆるに、何も下品に育つたからとて良人の持てぬ事はあるまい、殊にお前のやうな別品さむではあり、一足とびに玉の輿にも乘れさうなもの、夫れとも其やうな奥様あつかひ虫が好かで矢張り傳法肌の三尺帶が氣に入るかなと問へば、どうで其處らが落でござりましよ、此方で思ふやうなは先様が嫌なり、來いといつて下さるお人の氣に入るもなし、浮氣のやうに思召ましようが其日送りでござんすといふ、いや左様は言はさぬ相手のない事はあるまい、今店先で誰れやらがよろしく言ふたと他の女が言傳たでは無いか、いづれ面白い事があらう何どだといふに、あゝ貴君もいたり穿鑿なさります、馴染はざら一面、手紙のやりとりは反古の取かへッこ、書けと仰しやれば起證でも誓紙でもお好み次第さし上ませう、女夫やくそくなどと言つても此方で破るよりは先方様の性根なし、主人もちなら主人が怕く親もちなら親の言ひなり、振向ひて見てくれねば此方も追ひかけて袖を捉らへるに及ばず、夫なら廢せとて夫れ限りに成りまする、相手はいくらもあれども一生を願む人が無いのでござんすとて寄る邊なげなる風情、もう此様な話しは廢しにして陽氣にお遊びなさりまし、私は何も沈んだ事は大嫌ひ、さわいでさわいで騒ぎぬかう

と思ひますとて手を叩いて朋輩を呼べば力ちやん大分おしめやかだねと三十女の厚化粧が來るに、おい此娘の可愛い人は何といふ名だと突然に問はれて、はあ私はまだお名前を承りませんでしたといふ、嘘をいふと盆が來るに閻魔樣へお參りが出來まいぞと笑へば、夫れたとつて貴君今日お目にかゝつたばかりでは御坐りませんか、今改めて伺ひに出やうとして居ましたといふ、夫れは何の事だ、貴君のお名をさと揚げられて、馬鹿〳〵お力が怒るぞと大景氣、無駄ばなしの取りやりに調子づいて旦那のお商賣を當て見ませうかとお高がいふ、何分願ひますと手のひらを差出せば、いゑ夫には及びませぬ人相で見まするとて如何にも落つきたる顏つき、よせ〳〵じつと眺められて棚おろしでも始まつては溜らぬ、斯う見えても僕は官員だといふ、嘘を仰しやれ日曜のほかに遊んであるく官員樣がありますか、力ちやんまあ何でいらつしやらうといふ、化物ではいらつしやらないよと鼻の先で言つて分つた人に御褒賞だと懐中から紙入れを出せば、お力笑ひながら高ちやん失禮をいつてはならない此お方は御大身の御華族樣おしのびあるきの御遊興さ、何の商賣などがおありなさらう、そんなのでは無いと言ひながら蒲團の上に乘せて畳きし紙入れを取あげて、お相方の高尾にこれをばお預けなされまし、みなの者に祝儀でも遣はしませうとて答へも聞かずずん〳〵と引出すを、客は柱に寄かゝつて眺めながら小言もいはず、諸事おまかせ申すと寛大の人なり。

お高はあきれて力ちやん大抵におしよといへども、何宜いのさ、これはお前にこれは姉さんと、大きいので帳場の拂ひを取つて殘りは一同にやつても宜いと仰しやる、お禮を申て頂いてお出でと蒔散らせば、これを此娘の十八番に馴れたる事とて左のみは遠慮もいふては居ず、旦那よろしいのでございますかと駄目を押して、有がたうございますと搔きさらつて行くうしろ姿、十九にしては更けてるねと旦那どの笑ひ出すに、人の悪るい事を仰しやるとてお力は起つて障子を明け、手摺りに寄つて頭痛をたゝくに、お前はどうする金は欲しくないかと問はれて、私は別にほしい物がございんした、此品さへ頂けば何よりと帶の間から客の名刺をとり出して頂くまねをすれば、何時の間に引出した、お取かへには寫眞をくれとねだる、此次の土曜日に來て下されば御一處にうつしませうとて歸りかゝる客を左のみは止めもせず、うしろに廻りて羽織をきせながら、今日は失禮を致しました、亦のお出を待ますといふ、おい程の宜い事をいふまいぞ、空誓文は御免だと笑ひながらさつ〳〵と立つて階子を下りるに、お力帽子を手にして後から追ひすがり、嘘か誠か九十九夜の辛棒をなさりませ、菊の井のお力は鑄型に入つた女でございませぬ、又形のかはる事もありまするといふ、旦那お歸りと聞て朋輩の女、帳場の女主もか

け出して唯今は有がたうと同音の御禮、頼んで置いた車が來しとて此處からして乘り出せば、家中表へ送り出してお出を待まするの愛想、御祝儀の餘光としられて、後には力ちやん大明神樣これにも有がたうの御禮山々。

（三）

客は結城朝之助とて、自ら道樂ものとは名のれども實躰なる處折々に見えて身は無職業妻子なし、遊ぶに屈覓なる年頃なればにや是れを初めに一週には二三度の通ひ路、お力も何處となく懷かしく思ふかして三日見えねば文をやるほどの樣子を、朋輩の女子ども岡燒ながら弄かひては、力ちやんお樂しみであらうね、男振はよし氣前はよし、今にあの方は出世をなさるに相違ない、其時はお前の事を奥樣とでもいふのであらうに今つから少し氣をつけて足を出したり湯呑であほるだけは慎めにおし人がらが悪いやねと言ふもあり、源さんが聞たら何うだらう氣違ひになるかも知れないとて冷評もあり、あゝ馬車にのつて來る時都合が悪るいから道普請から して貰いたいね、こんな溝板のがたつく樣な店先へ夫こそ人がらが悪くて横づけにもされないではないか、お前方も最う少しお行儀を直してお給仕に出られるやう心がけてお呉れとずば

〳〵といふに、エゝ憎くらしい其ものいひを少し直さずば奥樣らしく聞へまい、結城さんが來たら思ふさまいふて、小言をいはせて見せようとて朝之助の顔を見るより此樣な事を申て居まする、何うしても私共の手にのらぬやんちやなれば貴君から叱つて下され、第一湯呑みで呑むは毒でござりましよと告口するに、結城は眞面目になりてお力酒だけは少しひかへろとの嚴命あゝ貴君のやうにもないお力が無理にも商賣して居られるは此力と思し召さぬか、私に酒氣が離れたら坐敷は三昧堂のやうに成りませう、ちつと察して下されといふに成程〳〵とて結城は二言といはざりき。

或る夜の月に下座敷へは何處やらの工場の一連れ、幷たゝいて甚九かつぱれの大騒ぎに大方の女子は寄集まつて、例の二階の小坐敷には結城とお力の二人限りなり、朝之助は寢ころんで愉快らしく話しを仕かけるを、お力はうるさゝうに生返事をして何やらん考へて、居る樣子、どうかしたか、又頭痛でもはじまつたかと聞かれて、何頭痛も何もしませぬけれど頻に持病が起つたのですといふ、お前の持病は肝癪か、いゝえ、血の道か、いゝえ、夫では何だと聞かれて、何うも言ふ事は出來ませぬ、でも他の人ではなし僕ではないか何んな事でも言ふて宜さそうなもの、まあ何の病氣だといふに、病氣ではござんせぬ、唯こんな風になつて此樣な事を思ふの

ですといふ、困つた人だな種々秘密があると見える、お父さんはと聞けば言はれませぬといふ、お母さんはと問へば夫れも同じく、これまでの履歴はといふに貴君には言はれぬといふ、まあ嘘でも宜いさよしんば作り言にしろ、かういふ身の不幸だとか大底の女はいはねばならぬ、しかも一度や二度あふのではなし其位の事を發表しても仔細はなからう、よし口に出して言はなからうともお前に思ふ事がある位めくら按摩に探ぐらせても知れた事、聞かずとも知れて居るが、夫れをば聞くのだ、どつち道同じ事だから持病といふのを先きに聞きたいといふ、およしなさいまし、お聞きになつても詰らぬ事でござんすとてお力は更に取あはず。

折から下坐敷より杯盤を運びきし女の何やらお力に耳打して兎も角も下までお出よといふ、いや行き度ないからよしてお呉れ、今夜はお客が大變に醉ひましたからお目にかゝつたとてお話しも出來ませぬと斷つておくれ、あゝ困つた人だねと眉を寄せるに、お前それでも宜いのかへ、はあ宜いのさとて膝の上で撥を弄べば、女は不思議さうに立つてゆくを客は聞すまして笑ひながら御遠慮には及ばない、逢つて來たら宜からう、何にもそんなに體裁には及ばぬではないか、可愛い人を素戻しもひどからう、追ひかけて逢ふが宜い、何なら此處へでも呼び給へ、片隅へ寄つて話しの邪魔はすまいからといふに、冗談はぬきにして結城さん貴君に隠したとて仕

方がないから申ますが町内で少しは巾もあつた浦團やの源七といふ人、久しく馴染でござんしたけれど今は見るかげもなく貧乏して八百屋の裏の小さな家にまい〳〵つぶろの樣になつて居ます、女房もあり子供もあり、私がやうな者に逢ひに來る歳ではなけれど、縁があるか未だに折ふし何の彼のといつて、今も下坐敷へ來たのでござんせう、何も今さら突出すといふ譯ではないけれど逢つては色々面倒な事もあり、寄らず障らず歸した方が好いのでござんす、恨まれるは覺悟の前、鬼だとも蛇だとも思ふがようござりますとて、撥を疊に少し延びあがりて表を見おろせば、何と姿が見えるかと嬲る、あゝ最う歸つたと見えますとて茫然として居るに、持病といふのは夫れかと切込まれて、まあ其樣な處でござんせう、お醫者樣でも草津湯でもと滝淋しく笑つて居るに、御本尊を拜みたいな俳優で行つたら誰の處だといへば、見たら吃驚でござりませう、色の黑い背の高い不動さまの名代といふ、では心意氣かと問はれて、此樣な店で身上はたくほどの人、人の好いばかり取得とては皆無でござんす、面白くも可笑しくも何ともない人といふに、夫れにお前は何うして逆上せた、これは聞き處と客は起かへる、大方逆上性なのでござんせう、貴君の事をも此頃は夢に見ない夜はござんせぬ、奥樣のお出來なされた處を見たり、ぴつたりと御出のとまつた處を見たり、また〳〵一層かなしい夢を見て枕紙がび

つしよりに成つた事もござんす、高ちやんなぞは夜る寐るからとても枕を取るよりはやく鼾の聲たかく、宜い心持らしいが何んなに浦山しうござんせう、私はどんな疲れた時でも床へ這入ると目が冴へて夫は夫は色々の事を思ひます、貴君は私に思ふ事があるだらうと察して居て下さるから嬉しいけれど、よもや私が何をおもふか夫れこそはお分りに成りますまい、考へたとて仕方がない故人前ばかりの大陽氣、菊の井のお力は行ぬけの締りなしだ、苦勞といふ事はしるまいと言ふお客樣もござります、ほんに因果とでもいふものか私が身位かなしい者はあるまいと思ひますとて潸然とするに、珍らしい事陰氣のはなしを聞かせられる、慰めたいにも本末をしらぬから方がつかぬ、夢に見てくれるほど實があらば奥樣にしてくれろ位いひそうな物だに根つからお聲がゝりも無いは何ういふ物だ、古風に出るが袖ふり合ふもさ、こんな商賣を嫌だと思ふなら遠慮なく打明けばなしを爲るが宜い、僕は又お前のやうな氣では寧氣樂だとかいふ考へで浮いて渡る事かと思つたに、夫れでは何か理屈があつて止むを得ずといふ次第か、苦しからずは承りたい物だといふに、貴君には聞いて頂かうと此間から思ひました、だけれども今夜はいけませぬ、何故〳〵、何故でもいけませぬ、私が我まゝ故、申まいと思ふ時は何うしても厭やでござんすとて、ついと立つて樣がはへ出るに、雲なき空の月かげ涼しく、見おろ

す町にからころと駒下駄の音さして行かふ人のかげ分明なり、結城さんと呼ぶに、何だとて傍へゆけばまあ、此處へお座りなさいと手を取りて、あの水菓子屋で桃を買ふ子がござんしよ、可愛らしき四つ許の、彼子が先刻の人のでござんす、あの小さな子心にもよく〳〵憎くいと思ふと見えて私の事をば鬼々といひます、まあ其樣な惡者に見えまするかとて、空を見あげてホット息をつくさま、堪へかねたる樣子は五音の調子にあらはれぬ。

(四)

同じ新開の町はづれに八百屋と髮結床が庇合のやうな細露路、雨が降る日は傘もさゝれぬ窮屈さに、足もととては處々に溝板の落し穴あやふげなるを中にして、兩側に立てたる棟割長屋、突當りの井溜わきに九尺二間の上り框朽ちて、雨戸はいつも不用心のたてつけ、流石に一方口にはあらで山の手の仕合は三尺斗の椽の先に草ぼう〳〵の空地面、それが端を少し圍つて背紫蘇、そゝ菊、隱元豆の蔓などを竹のあら垣に搦ませたるがお力が所緣の源七が家なり、女房はお初といひて二十八か九にもなるべし、貧にやつれたれば七つも年の多く見えて、お齒黑はまだらに生へ次第の眉毛みるかげもなく、洗ひざらしの鳴海の浴衣を前と後を切りかへて膝の

あたりは目立ぬやうに小針のつき當、狹帶きり〳〵と締めて蟬表の內職、盆前よりかけて暑さの時分をこれが時よと大汗になりての勉强せはしなく、揃へたる籐を天井から釣下げて、しばしの手數も省かんとて蚊のあがるを樂しみに脇目もふらぬ樣あはれなり。もう日が暮れたに太吉は何故かへつて來ぬ、源さんも又何處を歩いて居るかしらんとて仕事を片づけて一服吸つけ、苦勞らしく目をぱちつかせて、更に土瓶の下を穿くり、蚊いぶし火鉢に火を取分けて三尺の樣に持出し、拾ひ集めの杉の葉を冠せてふう〳〵と吹立れば、ふす〳〵と烟たちのぼりて軒端にのがれる蚊の蹙凄まじい、太吉はがた〳〵と溝板の音をさせて母さん今戻つた、お父さんも連れて來たよと門口から呼立るに、大層おそいではないかお寺の山へでも行はしないかと何の位案じたらう、早くお遣入といふに太吉を先に立てゝ源七は元氣なくぬつと上る、おやお前さんお歸りか、今日は何んなに暑かつたでせう、定めて歸りが早からうと思うて行水を沸かして置ました、さつと汗を流したら何うでござんす、太吉もお湯に遣入なといへば、あいと言つて帶を解く、お待お待、今加減を見てやるとて流しもとに盥を据へて釜の湯を汲出し、かき廻して手拭を入れて、さあお前さん此子をもいれて遣つて下され、何をぐたりと爲てお出なさる、暑さにでも障りはしませぬか、さうでなければ一杯あびて、さつぱりに成つて御膳あがれ、太吉

が待つて居ますからといふに、おゝ左樣だと思ひ出したやうに帶を解いて流しへ下りれば、そゝろに昔しの我身が思はれて九尺二間の臺處で行水つかふとは夢にも思はぬもの、ましてや土方の手傳ひして車の跡押にと親は生つけても下さるまじ、あゝ詰らぬ夢を見たばかりにと、ぢつと身にしみて湯もつかはねば、父ちやん背中洗つてお呉れと太吉は無心に催促する、お前さん蚊が喰ひますから早々とお上りなされと妻も氣をつくるに、おい〳〵と返事しながら太吉にも遣はせ我れも浴びて、上にあがれは洗ひ晒せしさば〳〵の浴衣を出して、お着かへなさいましと言ふ、帶まきつけて風の透く處へゆけば、妻は能代の膳のはげかゝりて足はよろめく古物に、お前の好きな冷奴にしましたとて小丼に豆腐を浮かせて靑紫蘇の香たかく持出せば、太吉は何時しか盞より飯櫃取おろして、よつちよいよつちよいと擂ぎ出す、坊主は我れが傍に來いとて頭を撫でつゝ箸を取るに、心は何を思ふとなけれど舌に覺えの無くて咽の穴はれたる如く、もう止めにするとて茶椀を置けば、其樣な事がありますか、力業をする人が三膳の御飯のたべられぬと言ふ事はなし、氣合ひでも悪うござんすか、夫れとも酷く疲れてかと問ふ、いや何處も何とも無いやうなれど唯たべる氣にならぬといふに、妻は悲しさうな目をしてお前さん又例のが起りましたらう、夫は菊の井の鉢肴は甘くもありましたらうけれど、今の身分で思

ひ出した處が何となりまする、先は賣物買物お金さへ出來たら昔しのやうに可愛がつても呉れませう、表を通つて見ても知れぬ、白粉つけて美い衣類きて迷ふて來る人を誰れかれなしに丸めるが彼の人達が商賣、あゝ我れが貧乏に成つたから搾いつけて呉れぬなと思へば何の事なく濟ましよう、恨みにでも思ふたけがお前さんが未練でござんす、裏町の酒屋の若い者知つてお出なさらう、二葉やのお角に心から落込んで、かけ先を殘らず使ひ込み、夫れを埋めやうとて雷神虎が盆筵の端についたが身の詰り、次第に惡るい事が染みて終ひには土藏やぶりまでしたさうな、當時男は監獄入りしても、つそう飯たべて居やうけれど、相手のお角は平氣なもの、おもしろ可笑しく世を渡るに咎る人なく美事繁昌して居まする、あれを思ふに商賣人の一德、たまされたは此方の罪、考へたとて始まる事ではござんせぬ、夫よりは氣を取直して稼業に精を出して少しの元手も拵へるやうに心がけて下され、お前に弱られては私も此子も何うする事もならで、夫こそ路頭に迷はねば成りませぬ、男らしく思ひ切る時あきらめてお金さへ出來ようならお力はおろか小紫でも揚巻でも別莊こしらへて圍うたら宜うござりましよう、最うそんな考へ事は止めにして機嫌よく御膳あがつて下され、坊主までが陰氣らしう沈んで仕舞ましたといふに、みれば茶椀と箸を其處に置いて父と母との顔をば見くらべて何とは知らず氣になる樣

子、こんな可愛い者さへあるに、あのやうな狸の忘れられぬは何の因果かと胸の中かき廻されるやうなるに、我れながら未練ものめと叱りつけて、いや我れだとて其樣に何時までも馬鹿では居ぬ、お力などゝ名計もいつて呉れるな、いはれると以前の不出來しを考へ出していよ〳〵顔があげられぬ、何の此身になつて今更何をおもふ物か、飯がくへぬとても夫れは身體の加減であらう、何も格別案じてくれるには及ばぬ故小僧も十分にやつて呉れとて、ころりと横になつて胸のあたりをはた〳〵と打あふぐ、蚊遣の烟にむせばぬまでも思ひにもえて身の暑げなり。

(五)

誰れ白鬼とは名をつけし、無間地獄のそこはかとなく景色ぐくり、何處にからくりのあるとも見えねど、逆さ落しの血の池、借金の針の山に追ひのぼすも手の物ときくに、寄つてお出でよと甘へる聲も蛇くふ雉子と恐ろしくなりぬ、さりとも胎内十月の同じ事して、母の乳房にすがりし頃は手打〳〵あわゝの可愛げに、紙幣と菓子との二つ取りにはをこしをお呉れと手を出したる物なれば、今の稼業に誠はなくとも百人の中の一人に眞からの涙をこぼして、聞いておく

れ染物屋の辰さんが事を、昨日も川田やが店でおちやつぴいのお六めと悪戯まはして、見たくもない往來へまで擔ぎ出して打ちつ打たれつ、あんな浮いた了簡で末が遂げられやうか、まあ幾歳だとおもふ三十は一昨年、宜い加減に家でも拵へる仕覺をして、お呉れと逢ふ度に異見をするが、其時限りおい〳〵と空返事して根つから氣にも止めては呉れぬ、父さんは年をとつて、母さんと言ふは目の悪るい人だから心配をさせないやうに早く締つてくれゝば宜いが、私はこれでも彼の人の半纏をば洗濯して、股引のほころびでも縫つて見たいと思つて居るに、彼んな浮いた心では何時引取つて呉れるだらう、考へるとつく〳〵奉公が厭やになつてお客を呼ぶに張合もない、あゝくさ〳〵するとて常は人をも欺す口で人の愁らきを恨みの言葉、頭痛を押へて思案に暮れるもあり、あゝ今日は盆の十六日だ、お閻魔樣へのお詣りに連れ立つて通る子供達の奇麗な着物きて小遣ひもらつて嬉しさうな顏してゆくは、定めて定めて二人揃つて甲斐性のある親をば持つて居るのであろ、私が息子の與太郎は今日の休みに御主人から暇が出て何處へ行つて何んな事して遊ばうとも定めし人が羨しかろ、父さんは呑ぬけ、いまだに宿とても定まるまじく、母は此樣な身になつて恥かしい紅白粉、よし居處が分つたとて彼の子は逢ひに來ても呉れまじ、去年向島の花見の時女房づくりして丸髷に結つて朋輩と共に遊びあるきしに

土手の茶屋であの子に逢つて、これ〳〵と聲をかけしにさへ、私の若く成しに呆れて、お母さんでございますかと驚きし樣子、ましてや此大島田に折ふしは時好の花簪さしひらめかして、お客を捉らへて申戯いふ處を聞かば子心には悲しくも思ふべし、去年あひたる時今は駒形の蠟燭やに奉公して居まする、私は何んな愁らき事ありとも必らず辛抱しとげて一人前の男になり、父さんをもお前をも今に樂をばお爲せ申ます、何うぞ夫れまで何なりと堅氣の事をして一人で世渡りをして居て下され、人の女房にだけはならずに居て下されと異見を言ばれしが、悲しきは女子の身の寸燐の箱はりして一人口過しがたく、さりとて人の盞處を遣ふも柔弱の身體なれば勤めがたくて、同じ憂き中にも身の樂なれば、此樣な事して日を送る、努さら浮いた心では無けれど言甲斐のないお袋と彼の子は定めし爪はじきするであらう、常は何とも思はぬ島田が今日斗は恥かしいと夕ぐれの鏡の前に涕くむもあるべし、菊の井のお力とても悪魔の生れ替りにはあるまじ、さる仔細あればこそ此處の流れに落こんで泥のありたけ申談に其日を送つて、情は吉野紙の薄物に、盞の光ぴつかりとする許、人の涕は百年も我まんして、我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他處目も羞ひつらめ、さりとも折ふしは悲しき事恐ろしき事胸にたゝまつて、泣くにも人目を恥れば二階座敷の床の間に身を投ふして忍び音の憂き

涕、これをば友朋輩にも洩らさじと包むに根性のまつかりした、氣のつよい子といふ者はあれど、障れば絶ゆる蛛の糸のはかない處を知る人はなかりき、七月十六日の夜は何處の店にも客人入込みて都々一端唄の景氣よく、菊の井の下座敷にはお店者五六人寄集まりて調子の外れし紀伊の國、自まんも恐ろしき胴間聲に霞の衣衣紋坂と氣取るもあり、力ちやんは何うした心意氣を聞かせないか、やつた〳〵と責められるに、お名はさゝねど此坐の中にと普通の嬉しがらせを言つて、やんや〳〵と喜ばれる中から、我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怖し渡らねばと謳ひかけしが、何をか思ひ出したやうにあゝ私は一寸失禮をします、御免なさいよとて三味線を置いて立つに、何處へゆく何處へゆく、逃げてはならないと坐中の騒ぐに照ちやん高さん少し頼むよ、直き歸るからとてずつと廊下へ急ぎ足に出しが、何をも見かへらず店口から下駄を履いて節向ふの横町の闇へ姿をかくしぬ。

お力は一散に家を出て、行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行つて仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、靜かな、靜かな、自分の心も何もぼうつとして物思ひのない處へ行かれるであらう、つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あ

あ嫌だ〳〵と道端の立木へ夢中に寄かゝつて暫時そこに立どまれば、渡るにや怖し渡らねばと自分の謳ひし聲を其まゝ何處ともなく響いて來るに、仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずばなるまい、父さんも踏かへして落てお仕舞なされ、祖父さんも同じ事であつたといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば爲る丈の事はしなければ死んでも死なれぬのであらう、情ないとても離れも憐れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商賣がらを嫌ふと一ト口に言はれて仕舞、そゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には、以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう、人情さらず義理さらずか其樣な事も思ふまい、思ふたとて何うなる物ぞ、此樣な身で此樣な業體で、此樣な宿世で、何うしたからとて人並みでは無いに相違なければ、人並の事を考へて、苦勞する丈間違であろ、あゝ陰氣らしい何だとて此樣な處に立つて居るのか、何しに此樣な處へ出て來たのか、馬鹿らしい氣違じみた、我身ながら分らぬ、もう〳〵歸りませうとて横町の闇をば出はなれて夜店の並ぶにぎやかなる小路を氣まぎらしにとぶら〳〵歩るけば、行かよふ人の顔少さく〳〵擦れ違ふ人の顔さへも遙とほくに見るやう思はれて、我が踏む土のみ一丈も上にあがり居る如く、がや〳〵といふ聲は聞ゆれど井の底に物を落したる如き響きに聞なされて、人の聲は、人

の聲、我が考へは考へと別々に成りて、更に何事にも氣のまぎれる物なく、人立おびたゞしき夫婦あらそひの軒先などを過ぐるとも、唯我れのみは廣野の原の冬枯れを行くやうに、心に止まる物もなく、氣にかゝる景色にも覺えぬは、我れながら酷く逆上て人心のないのにと覺束なく、氣が狂ひはせぬかと立どまる途端、お力何處へ行くと肩を打つ人あり。

(十八)

十六日は必らず待まする來て下されと言ひしをも何も忘れて、今まで思ひ出しもせざりし結城の朝之助に不圖出合て、あれと驚きし顏つきの例に似合ぬ狼狽かたがをかしきとて、から〳〵と男の笑ふに少し恥かしく、考へ事をして歩いて居たれば不意のやうに惶てゝ仕舞ました、よく今夜は來て下りましたと言へばあれほど、約束をして待てくれぬは不心中とせめられるに、何なりと仰しやれ、言譯は後にしまするとて手を取りて引けば彌次馬がうるさいと氣をつける、何うなり勝手に言はせませう、此方は此方と人中を分けて伴ひぬ。

下座敷はいまだに客の騷ぎはげしく、お力の中坐をしたるに不興して喧しかりし折から、店口にておやお歸りかの聲を聞くより、客を置ざりに中座するといふ法があるか、歸つたらば此處へ來い、顏を見ねば承知せぬぞと威張たてるを聞流しに二階の座敷へ結城を連れあげて、今夜も頭痛がするので御酒の相手は出來ませぬ、大勢の中に居れは御酒の香に醉ふて夢中になるも知れませぬから、少し休んで其後は知らず、今は御免なさりませと斷りを言ふてやるに、夫れで宜いのか、怒りはしないか、やかましくなれば面倒であらうと結城が心づけるを、何のお店ものゝ白瓜が何んな事を仕出しませう、怒るなら怒れでござんすとて小女に言ひつけてお銚子の支度、來るをば待かねて結城さん今夜は私に少し面白くない事があつて氣が變つて居まするほどに其氣で附合て居て下され、御酒を思ひ切つて呑みまするから止めて下さるな、醉ふたらば介抱して下されといふに、君が醉つたを未だに見た事がない、氣が晴れるほど呑むは宜いが、又頭痛がはじまりはせぬか、何が其樣なに逆鱗にふれた事がある、僕らに言つては惡るい事かと問はれるに、いゑ貴君には聞て頂きたいのでござんす、醉ふと申ますから慰いてはいけませぬと嫣然として、大湯呑を取よせて二三杯は息をもつかざりき。

常には左のみに心も留まらざりし結城の風采の今宵は何となく尋常ならず思はれて、肩巾のありて背のいかにも高き處より、落ついて物をいふ重やかなる口振り、目つきの凄くて人を射るやうなるも威嚴の備はれるかと嬉しく、濃き髮の毛を短かく刈あげて衿足のくつきりとせしな

ど今更のやうに眺られ、何をうつとりして居ると問はれて、貴君のお顔を見て居ますのさと言へば、此奴めがと睨みつけられて、おゝ恐ひお方と笑つて居るに、申談はのけ、今夜は樣子が唯でない聞たら怒るか知らぬが何か事件があつたかとふ、何しに降つて沸いた事もなければ、人との紛紜などはよし有つたにしろ夫れは常の事、氣にもかゝらねば何しに物を思ひませう、私の時より氣まぐれを起すは人のするのでは無くて皆心がらの淺ましい譯がございます、私は此樣な賤しい身の上、貴君は立派なお方樣、思ふ事は反對にお聞きになすつて酌んで下さるか下さらぬか其處ほどは知らねど、よし笑ひ物になつても私は貴君に笑ふて頂き度、今夜は殘らず言ひまする、まあ何から申さう胸がもめて口が利かれぬとて又もや大湯呑に呑む事さかんなり。

何より先に私が身の自墮落を承知して居て下され、もとより箱入りの生娘ならねば少しは察しても居て下さろうが、口奇麗な事はいひますとも此あたりの人に泥の中の蓮とやら、悪業に染まらぬ女子があらば、繁昌どころか見に來る人もあるまじ、貴君は別物、私が處へ來る人とても大抵はそれと思しめせ、これでも折ふしは世間さま並の事を思ふて恥かしい事つらい事情ない事とも思はれるも寧九尺二間でも極まつた良人といふに添うて身を固めようと考へる事もざんすけれど、夫れが私は出來ませぬ、夫れかと言つて來るほどのお人に無愛想もなりがたく、可愛いの、いとしいの、見初ましたのと出鱈目のお世辭をも言はねばならず、數の中には真にうけて此樣な厄種を女房にと言ふて下さる方もある、持たれたら嬉しいか、添うたら本望か、夫れが私は分りませぬ、そも〳〵の最初から私は貴君が好きで好きで、一日お目にかゝらねば戀しいほどなれど、奥樣にと言ふて下されたら何うでございましよか、持たれるは厭なり他處ながらは羞はし、一ト口に言はれたら浮氣者でございませう、あゝ此樣な浮氣者には誰がしたと思召、三代傳はつての出來そこね、親父が一生もかなしい事でございましたとてほろりとするに、其親父さむはと問ひかけられて、親父は職人、祖父は四角な字をば讀む人でございます、つまりは私のやうな氣違ひで、世に益のない反古紙をこしらへしに、版をばお上から止められたとやら、ゆるされぬとかにて斷食して死んださうに御座ます、十六の年から思ふ事があつて、生れも賤しい身であつたれど一念に修業して六十にあまるまで仕出來したる事なく、終は人の物笑ひに今では名を知る人もなしとて父が常住歎いたを子供の頃より聞知つて居りました、私の父といふは三つの歳に樣から落て片足あやしき風になりたれば人中に立まじるも嫌やとて居職に飾の金物をこしらへ、なれど、氣位たかくて人愛のなければ最貧にしてくれる人もな

く、あゝ私が覺えて七つの年の冬でござんした、寒中親子三人ながら古浴衣で、父は寒いも知らぬか柱に寄つて細工物の工夫をこらすに、母は欠けた一つ竈に破れ鍋かけて私に然る物を買ひに行けといふ、味噌こし下げて端たのお錢を手に握つて米屋の門までは嬉しく驅けつけたれど、歸りには寒さの身にしみて手も足も龜かみたれば五六軒隔てし溝板の上の氷にすべり、足溜りなく轉ける機會に手の物を取落して、一枚はづれし溝板のひまよりざら〳〵と飜れ入れば、下は行水きたなき溝泥なり、幾度も覗いては見たれど是れをば何として拾はれませう、其時私は七つであつたれど家の内の樣子、父母の心をも知れてあるにお米は途中で落しましたと空の味噌こしさげて家には歸られず、立てゐばらく泣いて居たれど何うしたと問ふて呉れる人もなく、聞いたからとて買てやろうと言ふ人は猶更なし、あの時近所に川なり池なりあらうなら私は定し身を投げて仕舞ひましたろ、話しは贓の百分一、私は其頃から氣が狂つたのでござんす、歸りの遲きを母の親案じて尋ねに來てくれたをば時機に家へは戻つたれど、母も物いはず父親も無言に、誰れ一人私をば叱る者もなく、家の内森として折々溜息の聲のもれるに私は身を切られるより情なく、今日は一日斷食にせうと父の一言いひ出すまでは忍んで息をつくやうで御座んした。

いひさしてお力は溢れ出る涙の止め難ければ紅ゐの手巾かほに押當て其端を喰ひしめつゝ物いはぬ事小半時、坐には物の音もなく酒の香したひて寄りくる蚊のうなり聲のみ高く聞えぬ。顔をあげし時は頰に涙の痕はみゆれども淋しげの笑みをさへ寄せて、私は其樣な貧乏人の娘、氣違ひは親ゆづりで折ふし起るのでござります、今夜も此樣な分らぬ事いひ出して嘸貴君御迷惑で御坐んしてしよ、もう話しはやめにする、御機嫌に障つたらばゆるして下され、誰れか呼んで陽氣にしませうかと問へば、いや遠慮は無沙汰、その父親は早くに死くなつてか、はゝ母さんが肺結核といふを煩つて死なりましてから一週忌の來ぬほどに跡を追ひました、今居りましても未だ五十、親なれば褒めるでは無けれど細工は贓に名人と言ふても宜い人で御座した、なれども名人だとて上手だとて私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出來ないので御座んせう、我身の上にも知られまするとて物思はしき風情、お前は出世を望むなと突然に朝之助に言はれて、ゑッと驚きし樣子に見えしが、私等が身にて望んだ處が味噌こしが落、何の玉の輿までは思ひがけませぬといふ、嘘をいふは人に依る始めから何も見知つて居るに隱すは野暮の沙汰ではないか、思ひ切つてやれ〳〵とあるに、あれ其のやうなけしかけ詞はよして下され、何うで此樣な身でござんするにと打しほれて又もの言はず。

今宵もいたく更けぬ、下座敷の人はいつか歸りて表の雨戸をたてると言ふに、朝之助おどろきて歸り支度するを、お力は何うでも泊らするといふ、いつしか下駄をも藏させたれば、足を取られて幽靈ならぬ身の戸のすき間より出る事もなるまじとて今宵は此處に泊る事となりぬ、雨戸を鎖す音一しきり賑はしく、後には隙間もる燈火のかげも消えて、唯軒下を行かよふ夜行の巡査の靴音のみ高かりき。

(七)

思ひ出したとて今更に何うなる物ぞ、忘れて仕舞へ諦めて仕舞へと思案は極めながら、去年の盆には揃ひの浴衣をこしらへて二人一處に藏前へ參詣したる事なんど思ふともなく胸へうかびて盆に入りては仕事に出る張もなく、お前さん夫れではならぬぞへと諫め立てる女房の詞も耳うるさく、エ、何も言ふな默つて居ろとて横になるを、默つて居ては此日が過されませぬ、身體が悪るくば藥も呑むがよし、御醫者にかゝるも仕方がなければ、お前の病ひは夫れではなしに氣さへ持直せば何處に悪い處があろう、少しは正氣に成つて勉强をして下されといふ、いつでも同じ事は耳にたこが出來て氣の藥にはならぬ、酒でも買て來てくれ氣まぎれに呑んで見やうと言ふ、お前さん其お酒が買へるほどなら嫌やとお言ひなさるを無理に仕事に出て下されとは頼みませぬ、私が内職とて朝から夜にかけて十五錢が關の山、親子三人口おも湯も滿足には呑まれぬ中で酒を買へとは能く能くお前無茶助になりなさんした、お盆だといふに昨日らも小僧には白玉一つこしらへても喰べさせず、お精靈さまのお店かざりも拵へくれねば御燈明一つで御先祖樣へお詫びを申て居るも誰が仕業だとお思ひなさる、お前が阿房を盡してお力づらめに釣られたから起つた事、いふては悪るけれどお前は親不孝子不孝、少しは彼の子の行末をも思ふて真人間になつて下され、御酒を呑で氣を晴らすは一時、眞から改心して下さらねば心元なく思はれますとて女房打なげくに、返事はなくて吐息折々に太く身動きもせず仰向ふしたる心根の愁さ、其身になつてもお力が事の忘れられぬか、十年つれそふて子供まで儲けし我れに心かぎりの辛苦をさせて、子には襤褸を下げさせ家とては二疊一間の此樣な犬小屋、世間一體から馬鹿にされて別物にされて、よしや春秋の彼岸が來ればとて、隣近處に牡丹もち團子と配り歩く中を、源七が家へは遣らぬが能い、返禮が氣の毒なとて、心切かは知らぬど十軒長屋の一軒は除け物、男は外出がちなればいさゝか心に懸るまじけれど女心には遣る瀬のなきほど切なく悲しく、おのづと肩身せばまりて朝夕の挨拶も人の目色を見るやうなる情なき思ひもする

を、其れをば思はで我が情婚の上ばかりを思ひつゞけ、無情き人の心の底が夫れほどまでに戀しいか、晝も夢に見て獨言にいふ情なさ、女房の事も子の事も忘れはてゝお力一人に命をも遣る心か、淺ましい口惜しい愁らい人と思ふに中々言葉は出でずして恨みの露を眼の中にふくみぬ。

物いはねば狹き家の内も何となくうら淋しく、くれゆく空のたゞ〳〵しきに裏屋はまして薄暗く、燈火をつけて蚊遣りふすべて、お初は心細く戸の外をながむれば、いそ〳〵と歸り來る太吉郎の姿、何やらん大袋を兩手に抱へて母さん母さんこれを貰つて來たと莞爾として駆け込むに、見れば新開の日の出やがかすていら、おや此樣な好いお菓子を誰れに貰つて來た、よくお禮を言つたかと問へば、あゝ能くお辭儀をして貰つて來た、これは菊の井の鬼姉さんが呉れたのと言ふ、母は顏色をかへて圖太い奴めが是れほどの淵に投げ込んで未だいぢめ方が足りぬと思ふか、現在の子を使ひに父さんの心を動かしに遣し居る、何といふて遣したと言へば、表通りの賑やかな處に遊んで居たらば何處のか伯父さんと一處に來て、菓子を買つてやるから一處にお出といつて、我らは入らぬと言つたけれど抱いて行つて買つて呉れた、喰べては悪るいかへと流石に母の心を測りかね、顏をのぞいて猶豫するに、あゝ年がゆかぬとて何たら譯の分ら

ぬ子ぞ、あの姉さんは鬼ではないか、父さんを怠惰者にした鬼ではないか、お前の衣類のなくなつたも、お前の家のなくなつたも皆あの鬼めがした仕事、喰ひついても飽き足らぬ悪魔にお菓子を貰つた喰べても能いかと問くだけが情ない、汚い穢い此樣な菓子、家へ置くのも腹がたつ、捨て仕舞な、捨てお仕舞、お前は惜しくて捨てられないか、馬鹿野郎めと罵りながら袋をつかんで裏の空地へ投出せば、紙は破れて轉び出る菓子の、竹のあら垣打こえて溝の中にも落込むめり、源七はむくりと起きてお初と一聲大きくいふに何か御用かよ、尻目にかけて振むかうともせぬ横顏を睨んで、能い加減に人を馬鹿にしろ、默つて居れば能い事にして悪口雜言は何の事だ、知人なら菓子位子供にくれるに不思議もなく、貰ふたとて何が悪るい、馬鹿野郎呼はりは太吉をかこつけに我れへの當こすり、子に向つて父親の讒訴をいふ女房氣質を誰れが敎へた、お力が鬼なら手前は魔王、商賣人のたましは知れて居れど、妻たる身の不貞腐れをいふて濟むと思ふか、土方をせうが車を引かうが亭主は亭主の權がある、氣に入らぬ奴を家には置かぬ、何處へなりとも出てゆけ、出てゆけ、而白くもない女郎めと叱りつけられて、夫れはお前無理だ、邪推が過る、何しにお前に當つけよう、この子が餘り分らぬと、お力の仕方が憎くらしさに思ひあまつて言つた事を、とッこに取つて出てゆけとまでは酷う御座んす、家の爲を

おもへばこそ氣に入らぬ事を言ひもする、家を出るほどなら此樣な貧乏世帶の苦勞をば忍んでは居ませぬと泣くに貧乏世帶に飽きがきたなら勝手に何處なり行つて貰はう、手前が居ぬからとて乞食にもなるまじく太吉が手足の伸ばされぬ事はなし、明けても暮れても我れが店おろしかお力への妬み、つくづく聞き飽きてもう厭やに成つた、貴樣が出ずば何ら道同じ事惜しくもない九尺二間、我れが小僧を連れて出やう、さうならば十分に我鳴り立る都合もよからう、さあ貴樣が行くか、我れが出ようかと烈しく言はれて、お前はそんなら眞實に私を離緣する心かへ、知れた事よと例の源七にはあらざりき。

お初は口惜しく悲しく情なく、口も利かれぬほど込上る涕を呑込んで、これは私が悪う御座んした、堪忍をして下され、お力が親切で志して呉れたものを捨て仕舞つたは重々悪う御座いました、成程お力を鬼といふたから私は魔王で御座んせう、モウいひませぬ、モウいひませぬ、決してお力の事につきて此後とやかく言ひませず、陰の噂しますまい故離緣だけは堪忍して下され、改めて言ふまでは無けれど私には親もなし兄弟もなし、差配の伯父さんを仲人なり里なりに立てゝ來た者なれば、離緣されての行き處とてはありませぬ、何うぞ堪忍して置いて下され、私は憎くかろうと此子に免じて置いて下され、謝りますとて手を突いて泣けども、イヤ何

うしても置かれぬとて其後は物言はず壁に向ひてお初が言葉は耳に入らぬ體、これほど邪慳の人ではなかりしをと女房あきれて、女に魂を奪はるれば是れほどまでも淺ましくなる物か、女房が歎きは更なり、遂ひには可愛き子をも餓へ死させるかも知れぬ人、今詫びたからとて甲斐はなしと覺悟して、太吉、太吉と傍へ呼んで、お前は父さんの傍と母さんと何處が好い、言ふて見ろと言はれて、我らはお父さんは嫌い、何にも買つて呉れない物と眞正直をいふに、そんなら母さんの行く處へ何處へも一處に行く氣かへ、あゝ行くともとて何ども思はぬ樣子に、お前さんお聞きか、太吉は私につくといひまする、男の子なればお前も欲しからうけれど此子はお前の手には置かれぬ、何處までも私が貰つて連れて行きます、よう御座んすか貰ひまするといふに、勝手にしろ、子も何も入らぬ、連れて行き度ば何處へでも連れて行け、家も道具も何も入らぬ、何うなりともしろとて寐轉びしまゝ振向んともせぬに、何の家も道具も無い癖に勝手にしろもないもの、これから身一つになつて仕たいまゝの道樂なり何なりお盡しなされ、最ういくら此子を欲しいと言つても返す事では御座んせぬぞ、返しはしませぬぞと念を押して、押入れ探つて何やらの小風呂敷取出し、これは此子の寐間着の袷、はらがけと三尺だけ貰つて行きまする、御酒の上といふでもなければ、醒めての思案もありますまいけれど、よく考へて見

て下され、たとへ何のやうな貧苦の中でも二人揃つて育てる子は長者の暮しといひまする、別れゝば片親、何につけても不憫なは此子とお思ひなさらぬか、あゝ臑が腐た人は子の可愛さも分りはすまい、もうお別れ申ますと風呂敷さげて表へ出れば、早くゆけ〳〵とて呼かへして は呉れざりし。

(八)

魂祭り過ぎて幾日、まだ盆提燈のかげ薄淋しき頃、新開の町を出し棺二つあり、一つは駕にて一つはさし擔ぎにて、駕は菊の井の隠居所よりえのびやかに出ぬ、大路に見る人のひそめくを聞けば彼の子もとんだ運のわるい詰らぬ奴に見込れて可愛さうな事をしたといへば、イヤあれは得心づくだと言ひまする、あの日の夕暮、お寺の山で二人立ばなしをして居たといふ確かな證人もござります、女も逆上て居た男の事なれば義理にせまつて遣つたので御座ろといふもあり、何のあの阿魔が義理はりを知らうぞ湯屋の帰りに男に逢ふたれば、流石に振はなして逃る事もならず、一處に歩いて話しはしても居たらうなれど、切れたは後袈裟、頬先のかすり疵、頸筋の突疵など色々あれども、たしかに逃げる處を遣られたに相違ない、引かへて男は美事な

切腹、浦團やの時代から左のみの男と思はなんだがあれこそは死花、さらさうに見たといふ、何にしろ菊の井は大損であらう、彼の子には結構な旦那がついた筈、取にがしては殘念であらうと人の憂ひを申戯に思ふものもあり、諸説みだれて取止めたる事なけれど、恨は長し人魂かなにかあらず筋を引く光り物のお寺の山といふ小高き處より、折ふし飛べるを見し者ありと傳へぬ。

われから

(一)

霜夜ふけたる枕もとに吹くと無き風つま戸の隙より入りて障子の紙のかさこそと音するも哀れに淋しき旦那様の御留守、寢間の時計の十二を打つまで奥方はいかにするとも睡る事の無くて幾そ度の寢がへり少しは肝の氣味にもなれば、入らぬ浮世のさまざまより、旦那様が去歳の今頃は紅葉館にひたと通ひつめて、御自分はかくし給へども、他所行着のお袂より縫とりべりの手巾を見つけ出したる時の憎くさ、散々といぢめていぢめて、困め抜いて、最う是れからは決して行かぬ、同藩の澤木が言葉のいと、を違へぬ世は來るとも、此約束は決して違へぬ、堪忍せよと謝罪てお出遊したる時の氣味のよさとては、月頃の宿へが下りて、胸のすくほど嬉しう思ひしに、又かや此頃折ふしのお泊り、水曜會のお人達や、倶樂部のお仲間にいたづらな御方の多ければ夫れに引かれて自づと身持の悪う成り給ふ、朱に交はればといふ事を花のお師匠が癖にして言ひ出せども実にあれは嘘ならぬ事、昔しは彼のやうに口先の方ならで、今日は何處

开處で藝者をあげて、此樣な不思議な踊を見て來たのと、お腹のよれるやうな可笑しき事をば実面目に成りて仰しやりし物なれども、今日此頃のお人の悪るさ、憎くいほどお利口な事ばかりお言ひ遊して、私のやうな世間見ずをば手の平で揉んで丸めて、夫れは夫れは押へ處の無いお方、まあ今宵は何處へお泊りにて、明日はどのやうな嘘いふてお歸り遊ばすか、夕かた倶樂部へ電話をかけしに三時頃にお歸りとの事、又芳原の式部がもとへでは無きか、彼れも縁切りと仰しやつてから最う五年、旦那様ばかり悪いのでは無うて、暑寒のお遣ひものなど、憎くらしい處置をして見せるに、お心がつひ浮かれて、自づと足をも向け給ふ、本に商賣人とて憎くらしい物と次第におもふ事の多くなれば、いよ〳〵寢かれて奥方は縮緬の掻巻打はふりて郡内の蒲團の上に起上り給ひぬ。

八疊の座敷に六枚屏風たてい、お枕もとには桐胴の火鉢にお煎茶の道具、畑草盆は紫檀にて朱羅宇の畑管そのさま可笑しく、枕ぶとんの派手摸樣より枕の總の紅ゐも常の好みの大方に顯はれて、闌者にむせぶ部屋の内、燈籠蠟の光かすかなり。

奥方は火鉢を引寄せて、火の氣のありやと試みるに、宵に小間使ひが埋け參らせたる、櫻炭の半は灰に成りて、よくも起さで埋けつるは黒きまゝにて冷えしもあり、畑管を取上て二三服、

烟りを吹いて耳を立つれば折から此室の軒端に移りて妻戀ひありく猫の聲、あれは玉では有るまいか、まあ此霜夜に屋根傳ひ、何日のやうな風ひきに成りて苦るしさうな咽をするので有らう、あれも矢つ張いたづら者と烟管を置いて立あがる、女猫よびにと雪灯に火を移し平常着の八丈の書生羽織しどけなく引かけて、腰引ゆへる縮緬の、淺黄はことに美くしく見えぬ。

踏むに冷めたき板の間を引裾ながく樣がはに出でゝ、用心口より顔さし出し、玉よ、玉よ、と二タ聲ばかり呼んで、戀に狂ひてあくがるゝ身は主人が聲も聞分けぬ、身にしむやうな媚めかしい聲に大屋根の方へと啼いて行く、をゝ言ふ事を聞かぬ我まゝ者め、何うともお爲と捨てぜりふ言ひて心ともなく庭を見るに、ぬば玉の闇たちおほふて、物の黑白も見え分かぬに、山茶花の咲く垣根をもれて、書生部屋の戸の隙より僅かに光りのほのめくは、おゝまだ千葉は寢ぬさうな。

用心口を鎖してお寢間へ戻り給ひしが再度立つてお菓子戸棚のびすけつとの瓶とり出し、お鼻紙の上へ明けて押ひねり、雪灯を片手に樣へ出れば天井の鼠がた〳〵と荒れて、鼬にても入りしかゝるとい ふ聲もの凄し。まるべの燈火かげゆれて、廊下の闇に恐ろしきを馴れし我家の何とも思はず、侍女下婢が夢の最中に奥さま書生の部屋へとおはしぬ。

お前はまだ寐ないのかえ、と障子の外から聲をかけて、奥さまずつと入り玉へば、室内なる男は讀書の腦を驚かされて、思ひがけぬやうな惘れ顔をかしう、奥さま笑ふて立ち玉へり。

(二)

机は有りふれの白木作りに白天竺をかけて、勤工場ものゝ筆立てに晋唐小楷の、栗鼠毛の、ペンも洋刀も一ッに入れて、首の缺けた龜の子の水入れに、赤墨汁の瓶がおし並び、齒みかきの箱我れもと威を張りて、割據の机の上に寄りかゝつて、今まで洋書を繙て居たは年頃二十歳あまり三とは成るまじ、丸頭の五分刈にて顔も長からず角ならず、眉毛は濃て目は墨目がちに、一體の容顔好い方なれども、いかにもいかにもの田舍風、午旁縞の綿入に諭なく白木綿の帶、青き毛布を膝の下に、前こゞみに成りて兩手に頭をもかと押へし。

奥さまは無言にびすけつとを机の上へ載せて、お前夜ふかしをするなら爲るやうにして寒さの凌ぎをして置いたら宜からうに、湯わかしは水に成つて、お火と言つたら盛火のやうな、よく是れで寒く無いのう、お節介なれど私がおこして遣りませう、炭取を此所へと仰しやるに、書生はおそれ入りて、何時も無精を致しまする、申譯の無い事でと有難いを迷惑らしう、炭取を

さし出して我れは中皿へ桃を盛つた奚、これは私が蕩樂さと奥さま炭つぎにかゝられぬ。
自慢も交じる親切に盛火大事さうに挾み上げて、積み立てし炭の上にのせ、四邊の新聞三つ四つに折りて、隅の方よりそよ〳〵と煽ぐに、いつしか是れより彼れに移りて、ぱちぱちと言ふ音いさましく、青き火ひら〳〵と燃へて火鉢の縁のやゝ熱うなれば、奥さまは何のやうな働きをでも遊したかのやうに、千葉もお翳りと少し押やりて、今宵は分けて寒い物をと、指輪のかがやく白き指先を、籐編みの火鉢の縁にぞ懸けたる。
書生の千葉いとゞしう恐れ入りて、これは何うも、これはと頭を下げるばかり、故郷に有りし時、姉なる人が母に代りて可愛がりて呉れたりし、其折其頃の有さまを思ひ起して、もとより奥様が涙手作りに田舍もの〳〵姉者人がいさゝか似たるゆしは無けれど、中學校の試驗前に夜明しをつゞけし頃、此やうな事を言ふて、此やうな處作をして、其上には蕎麥搔きの御馳走、あたゝまるやうにと言ふて呉れし時も有し、懐かしきは其昔し、有難きは今の奥様が情と、平常お世話に成りぬる事さへ取添へて、怒り肩もすぼまるばかり畏まりて有るさまを、奥さま寒さうなと御覽じて、お前羽織はまだ出來ぬかえ、仲に頼んで大急ぎに仕立てゝ貰ふやうにお爲、此寒い夜に綿入一つで辛棒のなる筈は無い、風でも引いたら何うお爲だ、本當に身體を厭はれ

ばいけませぬぞえ、此前に居た原田といふ勉強ものが矢つ張お前の通り明けても暮れても紙魚のやうで、遊びにも行かなければ、寄席一つ聞かうでもなしに、それはそれは感心と言はふか恐ろしいほどで、特別認可の卒業と言ふ間際まで疵なしに行つてのけたを、惜しい事にお前、腦病に成つたでは無からうか、國元から母さんを呼んで此處の家で二月も介抱をさせたのだけれど、終ひには何が何やら無我夢中になつて、思ひ出しても情ない、言ば狂死をしたのだれ、私は夫れを見て居た故、勉強家は氣が引ける、懶惰られては困るけれど、煩はぬやうに心がけてお呉れ、別けてお前は一粒物、親なし、兄弟なしと言ふでは無いか、千葉家を負ふて立つ大黒柱に異狀が有つては立直しが出來ぬ、さうでは無いかと奥様身に比べて言へば、はッ、はッ、と答へて詞は無かりき。
奥様は立上がつて、私は大層邪魔をしました、夫ならば成るべく早く休むやうにお爲、私は行つて寢るばかりの身體、部やへ行く間の事は寒いとても仔細はなきに、搆ひませぬから此れを着てお出、遠慮をされると憎くゝ成るほどに何事も默つて年上の言ふ事は聞く物と奥様すつと お羽織をぬぎて、千葉の背後より打着せ給ふに、人肌のぬくみ背に氣味わるく、麝香のかをり 滿身を襲ひて、お禮も何といひかぬるを、よう似合のうと笑ひながら、雪灯手にして立出給へ

ば、蠟燭いつか三分の一ほどに成りて、檐端に高し木がらしの風。

（三）

落葉たくなる烟の末か、夫れかあらぬか冬がれの庭木立をかすめて、裏通りの町屋の方へ朝毎に靡くを、夫れ金村の奥様がお目覺だと人わる口の一つに數へれども、習慣の恐ろしきは朝飯前の一風呂、これの濟までは箸も取られず、一日怠る事のあれば終日氣持の唯ならず、物足らぬやうに氣に成るといふも、聞く人の耳には洒落者の蕩樂と取られぬべき事、其身に成りては賊に詮なき癖をつけて、今更難儀と思ふ時もあれど、召使ひの人々心を得て御命令なきに眞柴折くべ、お加減が宜しう御座りますと朝床のもとへ告げて來れば、最う廢しませうと幾度か思ひつゝ、猶相かはらぬ黴澤の一つ、さなご入れたる糠袋にみがき上て出れば更に濃い化粧の白さく、是れも今更やめられぬやうな肌になりぬ。

年を言はゞ二十六、遲れ咲の花も梢にまどむ頃なれど、扮裝のよきと天然の美くしきと二つ合せて五つほどは若う見られぬる御の性、お子様なき故と髪結の留は言ひしが、あらばいさゝか沈着くべし、いまだに娘の心が失せで、金齒入れたる口元に何う爲い、彼う爲い、仔細らしく

數多の奴婢をも使へども、旦那さま勸めて十軒店に人形を買ひに行くなど、一家の妻のやうには無く、お高祖頭巾に肩掛引まとひ、瓦人の君もろ共川崎の大師に參詣の道すがら停車場の群集に、あれは新橋か、何處ので有らうと叫かれて、奥様とも言はれぬる身ながら是れを淺からず嬉しうて、いつしか好みも其様に、一つは容貌のさせし業なり。

目鼻だちより髪のかゝり、齒ならびの宜い所まで似たとは恐か毋様を其まゝの生れつき、奥様の父御といひしは赤鬼の與四郎とて、十年の以前までは物すごい目を光らせて在したる物なれど、人の生血をまぶりたる報ひか、五十にも足らで急病の腦充血、一朝に此世の税を納めて、よしや葬儀の造花、派手に美事な造りはするとも、辻に立つて見る人に爪はぢきをされて後生いかゞと思はるゝ樣成し。

此人始めは大藏省に月俸八圓頂戴して、兀ちよろけの洋服に毛繻子の洋傘さしかざし、大雨の折にも車の費はやられぬ身成しを、一念發起して帽子も靴も取つて捨て、今川橋の際に夜明しの蕎麥搔きを賣り初し頃の勢ひは千鈞の重きを提げて大海をも跳り越えつべく、知る限りの人舌を卷いて驚くもあれば、猪武者の向ふ見ず、やがて元も子も摺つて情なき樣子が思はるゝと後言も有けらし、須彌も出たつ足もとの、其當時の事少しいはゞや、茨につらぬく露の玉この

與四郎にも懋は有けり、幼馴染の妻に美尾といふ身がらに合せて高品に美くしき其とし十七ばかり成しを天にも地にも二つなき物と捧げ持ちて、役所がへりの竹の皮、人にはしたゝれるほど濕つぱき妻と後指さゝれながら、妻や待らん夕烏の聲に二人とり膳の菜の物を買ふて來るやら、朝の出がけに水瓶の底を掃除して、一日手桶を持たせぬほどの汲込み、貴郎お疲だきで御座いますと言へば、おいと答へて米かし桶に盡り出すほどの惚ろさ、斯くて終らば千歳も美くしき夢の中に過ぬべうぞ見えし。

さるほどに相添ひてより五年目の春、梅咲く頃のそゝろあるき、土曜日の午後より同僚二三人、打つれ立ちて、葛飾わたりの梅屋敷廻り歸りは廣小路あたりの小料理やに、酒も深くは呑ぬ質なれば、淡泊と仕舞ふて殊更に土産の折を調へさせ、友には冷評の言葉を聞きながら、一人別れてとぼ〳〵と本郷附木店の我家へ戻るに、格子戸には締りもなくして、上へあがるに燈火はもとよりの事、火鉢の火は黑く成りて灰の外に轉々と凄まじく、まだ如月の小夜嵐引まどの明放しより入りて身に染む事も堪えがたし、いかなる故とも思はれぬに洋燈を取出してつく〳〵と思案に暮るれば、物音を聞つけて壁隣の小學教員の妻、いそがはしく表より廻り來て、お歸りに成ましたか、御新造は先刻、三時過ぎでも御座りましたろか、お實家からのお迎ひとて奇

麗な車が見えましたに、留守は何分たのむと仰しやつて其まゝお出かけに成ました、お火が無くば取りにお出なされ、お湯も沸いて居まするからと忠實〳〵しう世話を燒かるゝにも、不審の雲は胸の内にふさがりて、何ういふ樣子何のやうな事をいふて行きましたかとも問ひたけれど悋氣男と忖度らるゝも口惜しく、夫れは種々御厄介で御座りました、私が戻りましたからは御心配なくお就蓐下されと洒然といひて隣の妻を歸しやり、一人淋しく洋燈の光りに烟草を吸ひて、忌々しき土産の折は鼠も喰べよとこぐ細のまゝ勝手元に投出し、其夜は床に入りしかども、さりとは肝癪のやる瀬なく、よしや如何なる用事ありとても、我なき留守に無斷の外出、殊更家内あけ放しにして、是れが人の妻の仕業かと思ふに餘りの事と胸は沸くやうに成りぬ。明くれは日暇、終日寢て居ても咎むる人は無し、枕を相手に芋虫を真似びて、表の格子には錠をおろしたまゝ、人訪へとも音もせず、いたづらに午後四時といふ頃に成ぬれば、車の門に止まりて優しき駒下駄の音の聞ゆるを、論なく夫れとは知れども知らぬ顏に虛寢を作れば、美尾は格子を押て見て、これは如何な事、錠がおりてあると獨り言をいつて、隣家の松の垣根に添ひて、水口の方へと間道を入りぬ。

昨日の午後より谷中の母さんが急病、癇氣で御座んすさふな、つよく胸先へさし込みまして、

一時はとても此世の物では有るまいと言ふたれど、お醫者さまの皮下注射やら何やらにて、何事も無く納りのつき、今日は一人でお厠にも行かれるやうに成ました、右の譯故の手間どり、昨日家を出まする時も、氣がわく〳〵して何事も思はれず、後にて思へば締りも付けず、庭口も明け放しで、嘸かし貴郎のお怒り遊した事と氣が氣では無かつたなれど、病人見捨てゝ歸る事もならず、今日も此やうに遲くまで居りまして、何處までも私が惡う御座んするほどに、此通り謝罪ますほどに、何うぞ御免し遊して、いつもの樣に打解けた顏を見せて下され、御機嫌直して下されと詫ぶるに、さては左樣かと少し我の折れて、夫れならば其樣に、何故はがきでも越しはせぬ、馬鹿の奴がと叱りつけて、母親は無病壯健の人とばかり思ふて居たが、癪といふは始めてかと睦しう語り合ひて、與四郎は何事の秘密ありとも知らざりき。

(四)

浮世に鏡といふ物のなくば、我が妍きも醜きも知らで、分に安じたる思ひ、九尺二間に楊貴妃小町を隱くして、美色の前だれ掛與床しうて過ぎぬべし、萬づに淡々しき女子心を來て搖する樣な人の賞め詞に、思はず赫と上氣して、昨日までは打すてし髪の毛つやらしう結びあげ、端

折つゝみ取上げて見れば、いかう眉毛も生つゝきぬ、隣より剃刀をかりて顏をこしらゆる心、そも〳〵見て呉れの浮氣に成りて、襦袢の袖も欲しう、半天の襟の觀光が糸ばかりに成しを淋しがる思ひ、與四郎が妻の美尾とても一つは世間の持上しなり、身分は高からずとも賊ある其人の情心うれしく、六疊、四疊二間の家を、金殿とも玉樓とも心得て、いつぞや四丁目の藥師樣にて買ふて貰ひし洋銀の指輪を大事らしう白魚のやうな、指にはめ、馬爪のさし櫛も世にある人の本甲ほどには嬉しがりし物なれども、見る人毎に賞めそやして、これほどの容貌を埋れ木とは可惜しいもの、出て居る人で有うなら恐らく島原切つての美人、比べ物はあるまいとて口に稅が出ねば我おもしろに人の女房を評したてる白痴もあり、豆腐かふとて岡持さげて表へ出れば、通りすがりの若い盛に振かへられて、惜しい女に服粧が惡るいなど呶然と笑はれる、思へば綿銘仙の糸の寄りしに色の腿めたる紫めりんすの幅狹き帶、八圓どりの等外が妻としては是れより以上に粧はるべきならねども、若き心には情なく箍のゆるびし岡持に豆腐の露のまたゝるよりも不覺に袖をやまぼりけん、兎角に心のゆら〳〵と襟袖口のみ見らるゝをかて加へて此前の年、春雨はれての後一日、今日ならではの花盛りに、上野をはじめ隅田川へかけて夫婦づれを樂しみ、隨分とも有る限りの財裁をつくりて、取つて置きの一てう羅も其人は

黒紬の紋つき羽織、女房は唯一筋の博多の帶しめて、昨日甘へて買て貰ひし黒ぬりの駒下駄、よしや疊は擬ひ南部にもせよ、比ぶる物なき時は嬉しくて立出ぬ、さても東叡山の春四月、雲に見紛ふ木の間の花も今日明日ばかりの十七日成りければ、廣小路より眺むるに、石段を下り昇る人のさま、さながら蟻の塔を築き立つるが如く、木の間の花に衣類の綺羅をきそひて、心なく見る目には保養この上も無き景色なりき、二人は櫻が岡に昇りて今の櫻雲臺が傍近く來し時、向ふより五六輛の車かけ聲いさましくして來るを、諸人立止まりてあれ〳〵と言ふ、見れば何處の華族樣なるべき、若き老ひたるこき交ぜに、派手なるは曙の振袖緋無垢を重ねて、老け形なるは花の木の間の松の色、いつ見ても飽かぬは黒出たちに籠甲のさし物、今樣ならば襟の間に金ぐさりのちらつくべきなりし、車は八百膳に止まりて人は奥深く居るを、憎くさげなる詐いふて見送るもあり、唯大方にお立派などいひて行過ぐるも有りしが、美尾はいかに感じてか、茫然と立ちて眺め入りし風情、うすら淋しき樣に物おもはしげにて、何れ華族であらうお化粧が濃厚だと與四郎の振かへりて言ふを耳にも入れぬらしき樣にて、我れと我が身を打ながめ唯悄然としてあるに與四郎心ならず、何うかしたかと氣遣ひて問へば、俄に氣分が勝れませぬ、私は向島へ行くのは廢めて、此處から直ぐに歸りたいと思ひます、貴郎はゆるりと御覽なりませ、お先へ車で歸りますと力なさゝうに凋れて言へば、夫れはと與四郎案じ始めて、一人では何も面白くは無い、又來るとして今日は廢めにせうと美尾がいふまゝ優しう同意して呉れる嬉しさも、此折何とも思はれず、切めて歸りは島でも喰べてと機嫌を取られるほど物がなしく、逃げ出すやうにして一散に家路を急げば、與と〳〵く盡きて與四郎は唯お美尾が身の病氣に胸をいためぬ。

はかなき夢に心の狂ひてより、お美尾は有りし我れにもあらず、人目無ければ涙に袖をおし浸し、誰れを戀ふると無けれども大空に物の思はれて、勿躰なき事とは知りながら與四郎への待遇きのふには似ず、うるさき時は生返事して、男の怒れば我れも腹たゝしく、お氣に入らぬ物なら離縁して下され、無理にも置いてはと頼みませぬ、私にも生れた家が御座んするとて威丈高になるに男も堪えず箒を振廻して、さあ出て行けと時の拍子危ふくなれば、流石に女氣の悲しき事胸に迫りて、貴郎は私をいぢめ出さうと爲さるので御座んすか、私が身はそも〳〵から貴郎に上げた物なれば、憎くば打つて下され、殺して下され、此處を死に場に來た私なれば、殺されても此處は退きませぬ、さあ何となりして下されと泣いて、袖に取すがりて身を悶ゆるに、もとより憎くゝは有らぬ妻の事、離別などゝは時の威嚇のみなれば、縋りて泣くを好い時

機に、我まゝ者奴の言ひしらけ、心安きまゝの駄々と死して可愛さは猶日頃に増るべし。

(五)

與四郎が方に戀る心なければ、一日も百年も同じ日を送れども其頃より美尾が樣子の兎に角に怪しく、ぼんやりと空を眺めて物の手につかぬ不審しさ。與四郎心をつけて物事を見るに、さながら戀に心をうばゝれて空虛に成し人の如く、お美尾お美尾と呼べば何えと答ゆる詞の力なさ、何うでも日々を義務ばかりに送りて身は此處に心は何處の空を倘徉らん、一〻氣にかゝる事ども、我が女房を人に取られて知らぬは良人の鼻の下と指さゝれんも口惜しく、いよ〳〵眞に其事あらばと恐ろしき思案をさへ定めて美尾が彫身とつき添ふ如く守りぬ。されども是れぞの跡もなく、唯うか〳〵と物おもふらしく或時はまみ〳〵と泣いて、お前樣いつまで是れだけの月給取つてお出遊ばすお心ぞ、お向ふ邸の旦那さまは、其昔し大部屋あるきのお人成しを一念ばかりにて彼の御出世、馬車に乘つてのお姿は何のやうの髭武者だとて立派らしう見えるでは御座んせぬか、お前樣も男なりや、少しも早く此樣な古洋服にお辨當さげる事をやめて、道を行くに人の振かへるほど立派のお人に成つて下され、私に竹の皮づゝみ持つて來て下さる眞

實が有らば、お役所がへりに夜學なり何なりして、何うぞ世間の人に負けぬやうに、一ッぱしの豪い方に成つて下され、後生で御座んす、私は其爲になら內職なりともして御菜の物のお手傳ひはしましよ、何うぞ勉强して下され、押みますと心から泣いて、此ある甲斐なき活計を數へれば、與四郎は我が身を罵られし事と腹たゝしく、お爲ごかしの夜學沙汰は、我れを留守にして身の樂しみを思ふ故ぞと一圖にくやしく、何うで我は此樣な意氣地なし、馬車は思ひも寄らぬ事、此後辻車ひくやら知れた物で無ければ、今のうち身の納りを考へて、利口で物の出來る、學者で好男子で、年の若いに乘かへるが隨一であらう、向ふの主人もお前の姿を褒めて居るさうに聞いたぞと、碌でもなき枳すり言、懶息者だ懶息者だ、我は懶息者の意氣地なしだと大の字に寐そべつて、夜學はもとよりの事明日は勤めに出るさへ憂がりて、一寸もお美尾の傍を放れじとするに、あゝお前樣は何故その樣に聞分けては下さらぬぞと淺ましく、互ひの思ひそはそはに成りて、物言へば順て爭ひの糸口を引出し、泣いて恨んで摺れ〳〵の中に、さりとも憎くからぬ夫婦は折ふしの仕こなし忘れがたく、貴郎斯うなされ、彼あなされと言へば、お美尾お美尾と目の中へも入れたき思ひ、近處合壁つゝき合ひて物爭ひに口を利く者は無かりし。

ありし梅見の留守のほど、實家の迎ひとて金紋の車の來し頃よりの事、お美尾は兎角に物おも

ひ静まりて、深くは其人を諫めもせず、うつ〳〵と日を送つて實家への足いとゞしう近く、歸れば襟に腮を埋めて志のびやかに吐息をつく、其人の不審を立つれば、何うも心悪う御座んすからとて食もようは喰べられず、畳寢がちに氣不精に成りて、次第に顔の色の青きを、一向きに病氣とばかり思ひぬれば、與四郎限りもなく傷ましくて、醫者にかゝれの、藥を呑めのと惜氣は忘れて此事に心を盡しぬ。

されども お美尾が病氣はお目出度かた成き、三四月の頃より夫れとは定かに成りて、いつしか梅の實落る五月雨の頃にも成れば、隣近處の人々よりおめで度う御座りますと明らかに言はれて、折から少し暑くるしくとも半天のぬがれぬ恥かしさ、與四郎は珍らしく嬉しきを、夢かとばかり辿られて、此十月が當る月とあるを、人には言はれねども指をる思ひ、男にてもあれかしと果敢なき事を占なひて、表面は無情つくれども、子安のお守り何くれと、人より聞きて來た事を其まゝ、不案内の男の身なれば間違ひだらけ取添へて、美尾が母に萬端を頼めば、お前さんより私の方が少し功者さ、と參られて、成るほど成るほどと口を噤みぬ。

（十八）

月給の八圓はまだ昇給の沙汰も無し、此上小兒が生れて物入りが嵩んで、人手が入るやうに成つたら、お前がたが何とする、美尾は虚弱の身體なり、其人を助けて手内職といふも六ッかしかるべく、三人居縮んで乞食のやうな活計をするも、餘り賞めた事では無し、何なりと口を見つけて、今の内から心がけ最う少しお金になる職業に取かゝずば、行々お前がたの身の振かたは無く、第一子を育つる事もなるまじ、美尾は私が一人娘、やるからには私が終りも見て貰ひたく、贅澤を言ふのでは無けれど、お寺參りの小遣ひ位出しても貰はう、上げませうの約束でよこしたのなれども、元來呉られぬは横着ならで、何うでも爲る事のならぬ意氣地の無さ故、夫れは思ひ絶つて私は私の口を濡らすだけに、此年をして人樣の口入れやら手傳ひやら、老恥ながらも詮の無き世を經ますする、左れども當て無しに苦勞は出來ぬもの、つく〳〵お前夫婦の働きを見るに、私の手足が働かぬ時に成りて何分のお世話をお頼み申さねば成らぬ、曉、月給八圓で何う成らう、夫れを思ふと今のうち覺悟を極めて、少しは互ひに愁らき事なりとも當分夫婦別れして、美尾は子ぐるめ私の手に預り、お前さんは獨身に成りて、官員さまのみには限らず、草鞋を履いてなりとも一廉の働きをして、人並の世の過ごされる樣に心がけたが宜からうでは無いか、美尾は私が娘なれば私の思ふやうに成らぬ事は有るまじ、何もお前さんの思案一

つと母親お美尾の產前よりかけて、萬づの世話にと此家へ入り込みつゝ、兎もすれば與四郎を責めるに、齒ぎしりするほど腹立しく、此老婆はり仆すに事は無けれど、唯ならぬ身の美尾が心痛、引いては子にまで及ぼすべき大事と胸をさすりて、私とても男子の端で御座りますれば、女房子位過ぐされぬ事も御座りますまいし、一生は長う御座ります。墓へ這入るまで八圓の月給では有るまいと思ひますに、其邊格別の御心配なくと見事に言へば、母親はまだらに殘る黑き齒を出して、成るほど〳〵宜く立派に聞えました、左樣いふて呉れれば嬉しう無い、流石は男一疋、その位の考は持つて居て呉れるであらう、成るほど成るほどと面白くも無い點頭やうを爲る憎くさ、美尾は母さん其やうな事は言ふて下さりますな、家の人の機嫌そこなうても困りますと迂路〳〵するに、與四郎は心おごりて、馬鹿婆めが、何のやうに引割かうとすればとて、美尾は我が物、親の指圖なればとて別れる樣な薄情にて有るべきや、殊更今より可愛き物さへ出來んに二人が中は萬々歲、天の原ふみとゝろかし鳴神かと高々と止まれば、母を眼下に視下して、放れぬ物に我れ一人さだめぬ。

十月中の五日、與四郎が退出間近に安らかに女の子生れぬ、男と願ひし夫れには違へども、可愛さは何處に變りのあるべき、やれお歸りかと母親出むかふて、流石の初孫の嬉しきは、類の

あたりの皺にも走るく、これ見て下され、何と好い子では無いか、此まあ赤い事と指つけられて、今更ながらまご〳〵と媚しく、手をさし出すもいさゝか恥かしければ、母親に抱かせたるまゝさし覗いて見るに、誰れに似たるか彼れに似しか、其差別も思ひ分ねども、何とは知らず怪しう可愛くて、其嘴く聲は昨日まで隣の家に聞きたるのと同じ物には思はれず、さしも危ふく思ひし事の左りとは事なしに終りしかと重荷の下りたるやうにも覺めれば、產婦の樣子いかにやと覗いて見るに、高枕にかゝりて鉢卷にみだれ髮の姿、傷ましきまで窶れたれど其美くしさは神々しき樣に成りぬ。

七夜の、枕直しの、宮參りの、唯あわたゝしうて過ぎぬ、子の名は紙へ書きつけて產土神の前に神闘の樣にして引けば、常盤のまつ、たけ、蓬萊の、つる、かめ、夫れ等は探ぐりも當てずして、與四郎が假の銘ずさびに、此樣な名も呼よい物と書いて入れたる町といふをば引出しぬ、女は容貌の好きにこそ諸人の愛を受けて果報この上も無き物なれ、小野の夫れならねどお町は美くしい名と家内いさみて、町や、町や、と手から手へ渡りぬ。

（七）

お町は高笑ひするやうに成りて、時は新玉の春に成りぬ、お美尾は日々に安からぬ面もち、折には涕にくるゝ事もあるを、血の道の故と自身いへば、與四郎は左のみに物も疑はず、只との子の成長ならん事をのみ語りて、例の洋服すがた美事ならぬ勤めに、手辨當さげて昨日も今日も出ぬ。

お美尾の母は東京の住居も物うく、はした無き朝夕を送るに飽きたれば、一つはお前樣がたの世話をも省くべき爲、つね〳〵御懇命うけましたる從三位の軍人樣の、西の京に御榮轉の事ありて、お邸彼方へ建築られしを幸ひ、开處の女中頭として勤めは生涯のつもり、老らくをも養ふて給はるべき約束さたまりたれば、最う此地には居ませぬ、又來る事があらば一泊はさせて下され、その外の御厄介には成りませぬと言ふに、與四郎は左りとも一人の母親なれば、美尾が心細さも思ひやりて、お前も御老年のこと、いかに勤めよきとても、他人樣の奉公といふ事させましては、子たる我々が申譯の言葉なし、是非に止まり給へと言へども、いや〳〵其樣の事はお前樣出世の曉にいふて下され、今は聞ませぬとて孤身の風呂敷づゝみ、谷中の家は貸家の札はられて、舟路ゆたかに彼の地へと向ひぬ。

越えて一ト月、雲黑く月くらき夕べ、與四郎は居殘りの調べ物ありて、家に歸りしは日くれの

八時、例は淸くらき洋燈のもとに風車犬張子取ちらして、まだ母親の名も似合ぬ美尾が懷おしくつろげ、小兒に添へ乳の美くしきさまを見るべきを、格子の外より伺ふに燈火ぼんやりとして障子に映るかげも無し、お美尾お美尾と呼ながら入るに、答へは隣の方に聞えて、今參りますと言ふ句は似たれど言葉は有らぬ人なりき。

隣の妻の入來るを見るに、懷には町を抱きたり、與四郎胸さわぎのして、美尾は何處へ參りました、此日暮れに燈火をつけ放しで、買物にでも行きましたかと問へば、隣の妻は眉を寄せて、さあ其事で御座んすとて、睡り覺めたる懷中の町がくすりくすりと啼泣るを、おゝ好い子好い子と、ゆすぶつて言葉絶えぬ。

燈火は私が唯今點けたので御座んす、誠は今までお留守居をして居ましたのなれど、家のやんちゃが六ッかしやを言ふに小言いふとて明けました、御新造は今日の晝前、通りまで買物に行つて來まする、歸りまで此子の世話をお頼みと仰しやつて、唯ちばらくの事と思ひしに、二時になれども三時はうてども、音も無くて今まで影の見えられぬは、何處まで物買ひにお出なされしやら、留守たのまれまして日の暮れし程心づかひな物は無し、まあ何うなされたので御座んしよな、と問ひかけられて、それは我れより尋ねたき思ひ、平常着のまゝで御座りましたか

と問へば、はあ羽織だけ替えて行かれたやうで御座んす、何か持つて行きましたか、いえ其やうには覺えませぬと有るに、はてなと腕の組まれて、此遲くまで何處にと覺束なし。

無器用なお前様が此子いぢくる譯にも行くまじ、お歸りに成るまで私が乳を上げませうと、有さまを見かねて、隣の妻の子を抱いて行くに、何分お頼み申ますと言ひながら、美尾の行衛に心を取られてお町が事はうはの空に成ぬ。

よもや、よもや、と思へども、晴れぬ不審は疑ひの雲に成りて、唯一ト棹の笛竹の引出しより、柳行李の底はかと無く調べて、もし其跡の見ゆるかと探ぐるに、座一はしの畳場も漏らず、つね〳〵寶のやうに大事がりて、身につく物の隨一好き成りし手綱染の帶あげも其まゝに有けり、いつも小遣ひの入れ場處なる鏡臺の引出しを明けて見るに、これは何とせし事ぞ手の切れるやうな新紙幣をばかり、其數およそ二十も重ねて上に一通、與四郎は見るより仰天の思ひに成りて、胸は大波の立つ如く、扨こそ仔細は有けれと狂ふて、其文開けば唯一ト言、美尾は死にたる物に御座候、行衛をお求め下さるまじく、此金は町に乳の粉をとの願ひに御座候。

與四郎は忽ち顔の色青く赤く、唇を震はせて悪婆、と叫びしが、怒氣心頭に起つて、身より は黒烟りの立つ加く、紙幣も文も寸断〳〵に裂いて捨てゝ、直然と立しさま人見なば如何なりけん。

(八)

浮世の欲を金に集めて、十五年がほどの足掻きかたとては、人には赤鬼と仇名を負せられて、五十に足らぬ生涯のほどを死灰のやうに終りたる、それが餘波の幾万金、今の玉村恭助ぬしは、其與四郎が聟なりけり。彼の人あれ程の身にて人の姓をば名告らずともと誹りしも有けれど、心安う志す道に走つて、内を顧みる疚しさの無きは、これ皆養父が賜物ぞかし、されば奥方の町子おのづから寵愛の手の平に乘つて、強ち其人を侮るとなけれども、舅姑おはしまして萬づ窮屈に堅くるしき嫁御寮の身と異なり、見たしと思はゝ替り目毎の芝居行きも誰れかは苦情を申べき、花見、月見に旦那さま催し立てゝ、共に連らぬる袖を樂しみ、お歸りの遲き時は何處までも電話をかけて、夜は更くるとも寐給はず、餘りに戀しう懐かしき折は自ら少しは恥かしき思ひ、如何なる故とも走るに難けれど、旦那さま在しまさぬ時は心細さ堪えがたう、兄とも親とも頼母しき方に思はれぬ。

左りながら折ふし地方遊説などゝて三月半年のお留守もあり、湯治場あるきの夫れと異なれば、

此時には甘ゆる事もならで、唯徒らの御文道、互ひの封のうち人には見せられぬ事多かるべし。此御中に何とてお子の無き、相添ひて十年餘り、夢にも左樣の氣色はなくて、清水堂のお木偶さま幾度空しき願ひに成けん、旦那さま淋しき餘りに貰ひ子せばやと仰しやるなれども、奥さまの好み六づかしければ、是れも御緣は無くて過ぎゆく、落葉の霜の朝な〳〵深くて、吹く風いとゝ身に寒く、時雨の宵は女子ども炬燵の間に集めて、浮世物がたりに小說のうわさ、されたる婢女は輕口の落しばなしして、お氣に入る時は御褒賞の何や彼や、人に物を遣り給ふ事は幼少よりの遊樂にて、これを父親二もなく愛がりし、一ト口に言はゞ機嫌かちの質なりや、一ト言心に染まる事のあれば跡先も無く其者可愛ゆう、車夫の茂助が一人子の與太郎に、此新年旦那さま召おろしの絣子の羽織を遣はされしも深くの理由は無き事なり、假初の愚痴に新年着の御座りませぬよし大方に申せしを、頓て憐みての賜り物、茂助は天地に拜して、人は鷹の羽の定紋いたづらに目をつけぬ、何事も無くて奥樣、書生の千葉が寒かるべきを思しやり、物縫ひの仲といふに命令て、仰せければ背くによし無く、少しは投やりの氣味にて有りし、飛白の綿入れ羽織ときの間に仕立させ、彼の明る夜は着せ給ふに、千葉は御恩のあたゝかく、口に數々のお禮は言はねども、氣の弱き男なれば涙さへさしぐまれて、仲働きの福に頼みてお禮をか

るべくと言ひたるに、渡り者の口車よく廻りて、斯樣〳〵ぢか〳〵で、千葉は貴婦泣いて居りますと言上すれば、お〳〵可愛い男と奥樣御贔負の增りて、お心づけのほど今までよりはいとゝしう成りぬ。

十一月の二十八日は旦那さまお誕生日なりければ、年毎お友達の方々招き參らせて、座の周旋はそんじよ夫れ者の美くしきを撰りぬき、珍味佳肴に打とけの大愉快を盡させ給へば、聲むしやの鳥居さまが口から、逢ふた初手から可愛さがと恐れ入るやうな御詞をうかゝふのも、例の澤木さまが落人の梅川を遊して、お前の父さん孫いもんさむとお感元を顯はし給ふも皆この折の隱し藝なり、されば派手者の奥さま此日を晴れにして、新調の三枚着に今歲の流行を知らしめ給ふ、世は冬なれど陽春三月のおもかげ、散り過ぎたる紅葉は庭に淋しけれど、垣の山茶花折しり顏に匂ひて、松の綠のこまやかに、醉ひすゝまぬ人なき日なりける。

今歲は別きてお客樣の數多く、午後三時よりとの招待狀一つも空しう成りしは無くて、暮れ過ぐるほどの賑ひは坐敷に溢れて茶室の隅〳〵逃るゝもあり、二階の手摺りに洋服のお輕女郎、目鏡が中だと笑はるゝもありき、町子はいとゝ方々の持はやし五月蠅く、奥さん奥さんと御盃の雨の降るに、御免遊ばせ、私は能う頂きませぬほどにと盃洗の水に流して、さりとも一盞二

盡は逃れがたければ、いつしか耳の根あつう成りて、胸の動悸のくるしう成るに、外づしては濟まれども人まらぬうちにと庭へ出でゝ池の石橋を渡つて築山の背後の、お稲荷さまが社前なるお賽錢箱へ假初に腰をかけぬ。

(九)

此家は町子が十二の歳、父の與四郎抵當ながれに取りて、夫れより修繕は加へたれども、水の流れ、山のたゝずまい、松の木がらし小高き聲も唯その昔のまゝ成けり、町子は醉ごゝち夢のごとく頭をかゝへして背後を見るに、雲間の月のほの明るく、社前の鈴のふりたるさま、紅白の綱ながく垂れて古鏡の光り神さびたるもみゆ、夜あらしさつと喜連格子に音づれば、人なきに鈴の音からんとして、幣束の紙ゆらぐも淋し。

町子は俄かに物のおそろしく、立あがつて二足三足、母屋の方へ歸らんと爲たりしが、引止められるやうに立止まつて、此度は狛犬の臺石に寄かゝり、木の間もれ來る座敷の騷ぎを遥かに聞いて、あゝあの聲は旦那樣、三味線は小梅さうな、いつの間に彼のやうな意氣な酒落ものに成り給ひし、油斷のならぬと思ふと共に、心細き事堪えがたう成りて、締つけられるやうな苦

しさは、胸の中の何處とも無く湧き出ぬ。

頃久しうありて奥さま大方醉も覺めぬれば、萬におのが亂るゝ怪しき心を我れと叱りて、歸れば盃盤狼藉の有さま、人々が迎ひの車門前に綺羅星とならびて、何某樣お立ちの聲にさはしく、散會の後は時雨に成りぬ。

恭助は太く疲れて禮服ぬぎも敢へず横に成るを、あれ貴郎お召物だけはお替へ遊ばせ、夫れではいけませぬと羽織をぬがせて、帶をも奥さま手づから解きて、糸織のなへたるにふらんねるを重ねし寢間着の小袖めさせかへ、いざ御就蓐と手をとりて助ければ、何其樣に醉ふては居ないと仰しやつて、蹌踉ながら寢間へと入給ふ。奥さま火のもとの用心をと言ひ渡し、誰れも彼れも寢よと仰しやつて、同じう寢間へは入給へど、何故となう安からぬ思ひのありて、言はねども面色の唯ならぬを、旦那さま半睡の目に御覽じて、何故寢ぬか、何を考へて居るぞと尋ね給ふに、奥さま何とお返事の聞かせ參らする事もあらねど、唯々不思議な心地が致しまする、何う致したので御座りませう、私にも分りませぬと言へば、旦那さま笑つて、餘り心を遣ひ過きた結果であらう、氣さへ落つければ直ぐ癒る筈と仰しやるに、否それでも私は言ふに言はれぬ淋しい心地がするので御座ります、餘り先刻みな樣のお強い遊ばすが五月蠅さに、一人庭へ

と逃げまして、お稲荷さまのお社の所で酔ひを覺まして居りましたに、私は變な變な、をかしい事を思ひよりまして、笑つて下さりますな、何うも何とも言はれぬ氣持に成ました、貴郎には笑はれて、叱かられる樣な事で御座りましよと下を向いて在するに、見れば涙の露の玉、膝にこぼれて怪しう思はれぬ。

奥さまは例に似合ず沈みに沈んで私は貴君に捨てられは爲ぬかと存じまして、夫れで此樣に淋しう思ひまするとと言ひ出れば、又かと旦那さま無造作に笑つて、誰れか何を言ふたか、一人で考へたか、其樣なつまらぬ事の有る筈は無い、お前のおもふて呉れるほど世間は我しを思ふて呉れぬから、まあ安心して居るが宜いと仔細も無い事に言ひ捨つれば、夫れでも私は其やうな悒氣沙汰で申のでは御座りませぬ、今日の會席の賑かに、種々の方々御出の中に誰れとて世間に名の聞えぬも無く、此やうのお人達みな貴郎さまの御友達かと思ひますれば、嬉しさ胸の中におさへがたく、蔭ながら拜んで居ても宜いほどの辱さなれど、つく〳〵我が身の上を思ひまするに、貴郎はこれより彌ます〳〵の御出世を遊じて、世の中廣うなれば次第に御器量まし給ふ、今宵小栁が三味に合せて勸進帳の一くさり、悒氣では無けれど彼れほどの御修業つみしも知らで、何時も昔しの貴郎とおもひ、淺き心の底はかと無く知られまする内、御厭はしさ

の種も交るべし、限りも知れず廣き世に立ちては耳さへ目さへ肥え給ふ道理、有限だけの家の内に朝夕物おもひの苦も知らで、唯ぼんやりと過しまする身の、遂ひには厭かれまするやうに成りて、悲しかるべき事今おもふても愁らし、私は貴郎のほかに頼母しき親兄弟も無し、有りてから父の與四郎在世のさまは知り給ふ如く、私をば母親似の面ざし見るに肝の種とて寄せつけも致されず、朝夕さびしうて暮しましたるを、嬉しき縁にて今斯く私が我まゝをも免し給ひ、思ふ事なき今日此頃、それは勿體ないほどの有難さも、萬一身にそぐなはぬ事ならばと案じられまして、此事をおもふに今宵の淋しき事、居ても起ちてもあられぬほどの情なさより、言ふてはならぬと存じましたれど、遂ひ此樣に申上て仕舞ました、夫れは何れも取止めの無き取こし苦勞で御座りませうけれど、何うでも此樣な氣のするを何としたら宜う御座りますか、唯々心ぼそう御座りますとて打なくに、旦那さま恐痴の僻見の跡先なき事なるを思召、悒氣よりそと可笑しくも有ける。

(十)

我れと我が身に持て惱みて奥さま不覺に打まどひぬ、此明くれの空の色は　晴れたる時も曇れ

る如く、日の色身に志みて怪しき思ひあり、時雨ふる夜の風の音は人來て扉をたゝくに似て、淋しきまゝに琴取出し獨り好みの曲を奏でるに、我れと我が調哀れに成りて、いかにするとも彈くに得堪えず、涙ふりこぼして押やりぬ。ある時は婦女どもに凝る肩をたゝかせて、心うかれる樣な戀のはなしなどさせて聞くに、人の噂のはづるゝ可笑しさとて笑ひ轉ける樣な埒のなきさへ、身には一々哀れにて、我れも思ひの燃ゆるに似たり、一夜仲働きの禰こそを改めて、言はねば人の知らぬ事、いふて私の德にも成らぬを、無言にゐられませぬは饒舌の癖、お聞きに成つても知らぬ顏に居て下さりませ、此處にをかしき一條の物がたりと少し乘地に聲をはづますれば、夫れは何ぞや、お聞なされませ書生の千葉が初戀の哀れ、國もとに居りました時そと見初めたが御座りましたさうな、田舍者の事なれば鎌を腰へさして藁草履で、手拭ひに草束ねを包んでと思召ませうが、中々左樣では御座りませぬ美くしいにて、村長の妹とゝふやうな人ださうで御座ります、小學校へ通ふうちに淺からず思ひましてと言へば、夫れは何方からと小間使ひの米口を出すに、默つてお聞、無論千葉さんの方からさとあるに、おやあの無骨さんがとて笑ひ出すに、奥樣苦笑ひして可憐さうに失敗の昔し話しを探り出したのかと仰しやれば、いゑ中々其やうに遠方の事ばかりでは御座りませぬ、未だ追々にと衣紋を突いて咳拂ひすれば、

小間使ひ少し顏を赤くして似合頃の身の上、惡口の禍が何を言ひ出すやらと尻目に睨めば、夫れに構はず唇を窄めて、まあお聞、遊ばせ、千葉が其子を見初ましてからの事、朝學校へ行きする時は必ず其家の窓下を過ぎて、聲がするか、最う行つたか、見たい、聞たい、話したい、種々の事を思ふたと思し召せ、學校にては物も言ひましたろ、顏も見ましたろ、夫れだけでは面白う無うて心いられのするに、日曜の時は其家の前の川へ必らず釣をしに行きましたそうな、鮒やたなどは宜い迷惑な、釣るほどに釣るほどに、夕日が西へ落ちても歸るが惜しく、其子出て來よ殘り無くお魚を遣つて、喜ぶ顏を見たいとでも思ふたので御座りましよ、あゝは見えまするれど彼れで中々の苦勞人といふに、夫れはまあ幾歳のとし其戀出來てかと奥樣おつしやれば、當てゝ御覽あそばせ先方は村長の妹、此方は水許めし上るお百姓、雲にかけ橋、霞に千鳥などと奇麗事では間に合ひませぬほどに、手短かに申さうなら提燈に釣鐘、大分其處に隔てが御座りまするけれど、戀に上下の無い物なれば、まあ出來たと思しめしますか、お米どん何とゝ題を出されて、何か言はせて笑ふつもりと悪推をすれば、私は知らぬと横を向く、奥樣少し打笑ひ、成り立たねばこそ今日の身であろ、其樣なが萬一あるなら、あの打かぶりの亂れ髪、酒落氣なしでは居られぬ筈、勉强家にしたは其自狂からかと仰しやるに、中々もちまして彼男が貴

嬢自狂など起すやうな男で御座りましよか、無常を悟つたので御座りますと言ふに、そんならその子は亡くなつてか、可憐さうなと奥さま憐がり給ふ、福は得意に、此慈いふも言はぬも御座りませぬ、子供の事なれば心にばかり思ふて、表向きには何とも無い月日を大凡どの位送つた物で御座んすか、今の千葉が様子を御覽じても、彼れの子供の時ならばと大抵にお合點が行ましよ、病氣して煩つて、お寺の物に成ましたを、其後何と思へばとて答へる物は松の風で、何うも仕方が無からうでは御座んせぬか、さて夫からが本文で御座んすとて笑ふに、福が能い加減なこしらへ言、似つこらしい嘘を言ふと奥さま爪はじき遊ばせば、あれ何しに嘘を申ませう、左りながらこれをお耳に入れたといふと少し私が困りの筋、これは當人の口から聞いたので御座りますと言へば、嘘をお言ひ、彼男が何うして其様な事を言はふ、よし有つてからが、苦い顔でおし默つて居るべき筈、いよ〳〵の嘘と仰しやれば、さても情ない事その様に私の事を信仰して下さりませぬは、昨日の朝千葉が私を呼びまして、奥様が此四五日御すぐれ無い様に見上げられる、何うぞ遊してかと如何にも心配らしく申ますので、奥様はお血の故で折ふし鬱ざ症にもお成り遊すし眞實お悪い時は暗い處で泣いて居らつしやるがお持前と言ふたらば、何んなにか貴嬢吃驚致しまして、飛んでも無い事、それは大層な神經質で、悪るくすると取かへしの付かぬ事になると申まして、夫れで其時申ました、私が郷里の幼な友達に是れ〳〵斯う言ふ娘が有つて、肝もちの、はつきりとして、此邸の奥様に何うも能く似て居た人で有つた、繼母で有つたので平常の我慢が大抵ではなく、積つて病死した可憐な子と何れ彼の男の事で御座りますから、眞面目な顔であり〳〵を言ひましたを、私がはぎ合せて考へると今申た様な事に成るので御座ります、其子に奥様が似ていらつしやると申たのは夫れは嘘では御座りませぬけれど、露顕しますと彼男に私が叱られます、御存じないお積りでと舌を廻して、たゝき立る太鼓の音さりとは賑はしう聞え渡りぬ。

(十一)

今歳も今日十二月の十五日、世間おしつまりて人の往來大路いそがはしく、お出入の町人お歳暮持參するものお勝手に賑々しく、急ぎたる家には餅つきのおとさへ聞ゆるに、此邸にては煤取の笹の葉座敷にこぼれて、冷めし草履こゝかしこの廊下に散みだれ、お雜巾かけまする者、お疊たゝく者、家内の調度になひ廻るも有れば、お振舞の酒に醉ふて、これが荷物に成るもあり、御懇命うけまするお出入の人々お手傳お手傳ひとて五月蠅きを半は斷りて集まりし人だけ

に瓶のぞきの手ぬぐひ、それ、と切つて分け給へば、一同手に手に打冠り、姉さま唐茄子、頬かふり、吉原かふりをするも有り、旦那さま朝よりお留守にて、お指圖し給ふ奥さまの風を見れば、小袖かた手に友仙の長襦袢下に長く、赤き鼻緒の麻裏を召て、あれよ、これよと仰せらる、一しきり終りての午後、お茶ぐわし山と擔き込めば大皿の鐵砲まき分捕次第と沙汰ありて、奥様は暫時のほど二階の小間に氣づかれを休め給ふ、血の道のつよき人なれば胸ぐるしさ堪えがたうて、枕に小抱卷假初にふし給ひしを、小間づかひの米よりほか、絶えて知る者あらざりき。

奥さまとろ〳〵としてお目覺れば、枕もとの様がはに男女の話し聲さのみ憚かる景色も無く、此宿の旦的の、奥洲のと、車宿の二階で言やうなるは、奥さま此處にと夢にも人は思はぬなるべし。

一方は仲働の禍のこゑ、叮嚀に叮嚀にと仰しやるけれど、一日業に何うして左様は行渡らりよう、隅々隈々やつて居てお溜りが有らうかえ、目に立つ處をさつと働いて、あとは何れも野となれさ、夫れで丁度能い加減に疲れて仕舞、そんなにお前正直で勤る物かと嘲笑ふやうに言へば、大きにさといふ、相手は茂助がもとの安五郎がこゑなり、正直といへば此處の旦的が一

件物、飯田町のお波が事を知つてかと問ひかけるに、お福は百年も前からと言はぬばかりにして、夫れを御存じの無いは此處の奥様お一方、知らぬは亭主の反對だね、まだ私は見た事は無いが、色の淺黑い面長で、品が好いといふでは無いか、お前は親方の代りにお供を申すこともある、狎んだ事が有るかと問へば、見た段か格子戸に鈴の音がすると坊ちやんが先立で驅け出して來る、續いて顯はれるが例物さ、髪の毛自慢の櫛卷で、洒化粧のあつさり物、半襟つきの前だれ掛とくだけて、おや貴郎と言ふだらうでは無いか、すると此處のがでれりと御座つて、久しう無沙汰をした、冤るせ、かなんかで、入口の敷居に腰をかける、例のが驅け下りて靴をぬがせる、見とも無いほど睦ましいと言ふは彼れの事、旦那が奥へ通ると小戻りして、お供さん御苦勞、これで畑草でも買つてと言つて、夫れ鼻藥の出る次第さ、あれがお前素人だから感心だと賞めるに、素人も素人、生無垢の娘あがりだと言ふでは無いか、旦那とは十何年の中で、坊ちやんが歳もことしは十歳か十一には成う、都合の悪るいは此處の家には一人も子寶が無うて、彼方に立派の男の子といふ物だから、行々を考へるとお氣の毒なは此處の奥さま、何うも是れも授り物だからと一人が言ふに、仕方が無い、十分先の大旦那がしぼり取つた身上だから、人の物に成ると言つても理屈は有るまい、だけれどお前、不正直は此處の旦那で有らうと言ふ

に、男は皆あんな物、氣が多いからとお福の笑ひ出すに、悪く當つ擦りなさる、耳が痛いでは無いか、己れは斯う見えても不義理と土用干は仕た事の無い人間だ、女房をだまくらかして妾の處へ注ぎ込む樣な不人情は仕度ても出來ない、あれ丈腹の太い豪いのでは有らうか、考へると此處の旦那も鬼の性さ、二代つゞきて彌々根が張らうと、聞人なげに遠慮なき高聲、福も相槌例の調子に、もう一ト働きやつて除けよう、安さんは下廻りを賜みます、私にも一度此處を拭いて、今度はお藏だとて、雑巾がけしつ〳〵と始めれば、奥さまは唯この隔てを命にして、明けずに去ねかし、顔みらるゝ事愁らやと思しぬ。

(十二)

十六日の朝ぼらけ昨日の掃除のあと清き、納戸めきたる六疊の間に、燈炬燵して旦那さま奥さま差向ひ、今朝の新聞おし披きつゝ、政界の事、文界の事、語るに答へもつきなからず、他處目うら山しう見えて、而白げ成しが、旦那さま好き頃と見はからひの御積りなるべく、年來足らぬ事なき家に子の無きをばかり口惜しく、其方に在らば重疊の喜びなれど萬一いよ〳〵出來ぬ物ならば、今より貰うて心に任せし教育をしたらばと是れを明くれ心がくれども、未だに其

きも見當らず、年たてば我れも初老の四十の坂、じみなる事を言ふやうなれども家の根つぎの極まらざるは何かにつけて心細く、此ほど中の其方のやうに、淋しい淋しいの言ひづめも爲では有られぬやうな事あるべし、幸ひ海軍の鳥居が知人の子に素性も悪るからで利發に生れつきたる男の子あるよし、其方に異存なければ其れを貰ふて丹精したらばと思はるゝ、悉皆の引受けは鳥居がして、里かたにも彼の家にて成るよし、年は十一、容貌はよいさうなと言ふに、奥さま顔をあげて旦那の面樣いかにと覗ひしが、成程それは宜い思し召より、私にかれこれは御座りませぬ、宜いと覺しめさばお取極め下さりませ、此家は貴郎のお家で御座りまする物、何となり思しめしのまゝにと安らかには言ひながら、萬一その子にて有りたらばと無情おもひおのづから顔色に顯はるれば、何取いそぐ事でも無い、よく思案して氣に叶ふたらば其時の事、あまり氣を鬱々として病氣でもしては成らんから、少しは慰めにもと思ふたのなれど、夫れも餘り輕卒の事、人形や雛では無し、人一人翫弄物にする譯には行くまじ、出來そこねたとて塵塚の隅へ捨てられぬ、家の礎に貰ふのなれば、今一應聞定めもし、取調べても見た上の事、唯この頃の樣に鬱いで居たら身躰の爲に成るまいと思はれる、これは急がぬ事として、ちと寄席きゝにでも行つたら何うか、播磨が近い處へかゝつて居る、今夜は何うであらう行かんかな

と機嫌を取り給ふに、貴郎は何故そんな優しらしい事を仰しやります、私は決して其やうな事は伺ひたいと思ひませぬ、鬱ぐ時は鬱がせて置いて下され、笑ふ時は笑ひますから、心任かせにして置いて下されと、言ひて流石打つけには恨みも言ひ敢へず、心に籠めて愛はしげの躰にてあるを、其人は淺からず氣にかけて、何故その樣な捨てばるは言ふぞ、此間から何かと奥齒に物の挾まりて一々心にかゝる事多し、人には取違へもある物、何をか下心に含んで隠しだてゝは無いか、此間の小梅の事、あれでは無いかな、夫れならば大間違ひの上なし、何の氣も無い事だに心配は無用、小梅は八木田が年來の持物で、人には指をもさゝしはせぬ、ことには彼の痩せがれ、花は疾くに散つて紫蘇葉につゝまれようと言ふ物だに、何れほどの物好きなれば手出しを仕樣ぞ、邪推も大抵にして置いて呉れ、あの事ならば清淨無垢、潔白な者だと微笑を含んで口髭を捻らせ給ふ。飯田町の格子戸は音にも知らじと思召、是れが備へは立てもせず、防禦の策は取らざりき。

(十三)

さまゝ〳〵物をおもひ給へば、奥樣時々お癇の起る癖つきて、はげしき時は仰向に仆れて、今にも絶え入るばかりの苦るしみ、初は皮下注射など醫者の手をも待ちけれど、日毎夜毎に度かさなれば、力ある手につよく押へて、一時を兎角まぎらはす事なり、男ならでは甲斐のなきに、其事あれば夜といはず夜中と言はず、やがて千葉をば呼立てゝ、反かへる背を押へさするに、武骨一遍律義男の身を忘れての介抱人の目にあやしく、志のびやかの叫き頓て無沙汰に成るぞかし、隠れの方の六疊をば人奥樣の癇部屋と名付けて、亂行あさましきやうに取なせば、見る目がらかや此間の事いぶかしう、更に霜夜の御憐れみ、羽織の事さへ取添へて、仰々しくも成ぬるかな、あとなき風も騒ぐ世に忍ぶか原の虫の聲、露ほどの事あらはれて、奥樣いとゞ憂き身に成りぬ。

中働きの福かねてあら〳〵心組みの、奥樣お着下しの本結城、あれこそは我が物の頼み空しう、いろ〳〵千葉の厄介に成たればとて、これを新年着に仕立てゝ遣はされし、其恨み骨髄に徹りてそれよりの見る目横にか逆にか、女髪結の留を捉らへて珍事唯今出來の顔つきに、例の口車くる〳〵とやれば、此電信の何處までかゝりて、一町毎に風説は太りけん、いつしか恭助ぬしが耳に入れば、安からぬ事に胸さはがれぬ、家つきならずは施すべき途もあれども、浮世の聞え、これを別居と引離つこと、如何にものさびぬ思ひあり、さりとて此まゝさし置かんに、内

政のみだれ世の攻撃の種に成りて、淺からぬ難儀現在の身の上にかゝれば、いかさまに爲ばやと持てなやみぬ我まゝも其まゝ、氣隨も其まゝ、何かはことごとして咎めたてなさんやは、金村が妻と立ちて、世に耻かしき事なからずはと思せども、さし當がたき沙汰とにかくに喧しく、親しき友など打つれての勸告に、今日は今日はと思ひ立ちながら、猶其事に及ばずして過行く、年立かへる朝より、松の內過ぎなばと思ひ、松とり捨つれば十五日ばかりの程にはとおもふ、二十日も過ぎて一月空しく、二月は梅にも心の急がれず、來る月は小學校の定期試驗として飯田町のかたに、笑みかたまけて急き合へるを、見れども心は樂しからず、家のさま、町子の上、いかさまにせん、と許おもふ、谷中に知人の家を買ひて、調度萬端おさめさせ、此處へと思ふに町子が生涯あはれなる事いふばかりなく、暗涙にくれては我が身が不德を思しゝる筋なきにあらねど、今はと思ひ斷ちて四月のはじめつ方、浮世は花に春の雨ふる夜、別居の旨をいひ渡しぬ。

かねてぞ千葉は放たれぬ。汨羅の屈原ならざれば、恨みは何とかこつべき、大川の水清からぬ名を負ひて、永代よりの汽船に乘込みの歸國姿、まさしう見たりと言ふ者ありし。

* * * * * * * * * * * *

憂かりしはその夜のさまなり、車の用意何くれと調へさせて後、いふべき事あり此方へと其人のいふに、今さら恐ろしうて書齋の外にいたれば、今宵より其方は谷中へ移るべきぞ、此家をば家とおもふべからず、立歸らるゝ物と思ふな、罪はおのづから知りたるべし、はや立て、とあるに、夫れは餘りのお言葉、我に惡き事あらば何とて小言は言ひ給はぬ、出しぬけの仰せは聞ませぬとて泣くを、恭助振向いて見んともせず、理由あればこそ、人並ならぬ事ともなせ、一々の罪狀いひ立んは憂かるべし、車の用意もなしてあり、唯のり移るばかりと言ひて、つと立ちて部やの外へ出給ふを、追ひすがりて袖をとれば、放さぬか不埒者と振切るを、お前樣どうでも左樣なさるので御座んするか、私を浮世の捨て物になさりまするお氣か、私は一人もの、世には助くる人も無し、此小さき身すて給ふに仔細はあるまじ、美事すてゝ此家を君の物にし給ふお氣か、取りて見給へ、我れをば捨てゝ御覽ぜよ、一念が御座りまするとて、はたと白睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ。

ゆく雲

(上)

酒折の宮、山梨の岡、鹽山、裂石、さし手の名も都人の耳に聞きなれぬは、小佛さゝ子の難處を越して猿橋のながれに眩めき、鶴瀬、駒飼見るほどの里もなきに、勝沼の町とても東京にての塢末ぞかし、甲府は流石に大厦高樓、躑躅が崎の城趾など見る處のありとは言へど、汽車の便りよき頃にならば知らず、こと更の馬車腕車に一晝夜をゆられて、いざ惠林寺の櫻見にといふ人はあるまじ、故郷なればこそ年々の夏休みにも、人は箱根伊香保ともよふし立つる中を、我れのみ一人あし曳の山の甲斐に峯の走り雲あとを消すこと左りとは是非もなけれど、今歳この度みやこを離れて八王子に足をむける事これまでに覺えなき辛らさなり。

養父濟左衛門、去歳より何處开處からだに申分ありて寐づ起きつとの由は聞きしが、常日頃すこやかの人なれば、さしての事はあるまじと醫者の指圖などを申やりて、此身は雲井の鳥の羽がひ自由なる畜生の境界に今ぞばしは遊ばるゝ心なりしを、先きの日故郷よりの便りに曰く、

大旦那さまこと其後の容躰さしたる事は御座なく候へ共、次第に短氣のまさりて我意つよく、これ一つは年の故には御座候はんなれど、隨分あたりの者御機げんの取りにくゝ、大心配を致すよし、私など古狸の身なれば兎角つくろひて一日二日と過し候へ共、筋のなきわからずやを仰せいだされ、足もとから鳥の立つやうにお急きたてなさるには大閉口に候、此中より頻に貴君様を御手もとへお呼び寄せなさり度、一日も早く家督相續あそばさせ、樂隱居なされ度お のぞみのよし、これ然るべき事と御親類一同の御決議、私は初手から貴君様を東京へお出し申すは氣に喰はぬほどにて、申しては失禮なれどいさゝかの學問など何うでも宜い事、赤尾の彦が息子のやうに氣ちがひに成つて歸つたも見て居り候へば、もと〳〵利發の貴君様に其氣づがひはあるまじきなれど、放蕩ものにでもお成りなされては取返しがつき申さず、今の分にて嬢さまと御祝言、御家督引つぎ最はや早きお歳にはあるまじくと大賛成に候、さだめしさだめし其地には遊しかけの御用事も御座候はん夫れ等を然るべく御取まとめ、飛鳥もあとを濁ごすなに候へば、大藤の大盡が息子と聞きしに野澤の桂次は了簡の清くない奴、何處やらの割前を人に背負せて逃げをつたなどゝ斯ふいふ噂があと〳〵に殘らぬやう、郵便爲替にて證書面のとほりお送り申候へども、足りずば上杉さまにて御立かへを願ひ、諸事清潔にして御歸りなさる

べく、金故に恥ぢをお掻きなされては金庫の番をいたす我等が申わけなく候、前申せし通り短氣の大旦那さま頻に待ちこがれて大ぢれに御座候へば、其地の御片つけすみ次第一日もはやくと申納候、六藏といふ通ひ番頭の筆にて此樣の迎ひ狀いやとは言ひがたし。

家に生抜きの我れ實子にてもあらば、かゝる迎へのよしや十度十五たび來たらんとも、おもひ立ちての修業なれば一ト廉の學問を研かぬほどは不孝の罪ゆるし給へとでもいひやりて、其我まゝの徹らぬ事もあるまじきなれど、愁らきは養子の身分と桂次はつく〳〵他人の自由、羨やみて、これからの行く末をも鎖りにつながれたるやうに考へぬ。

七つのとしより實家の貧を救はれて、生れしまゝなれば素跣足の尻きり半纏に田圃へ辨當の持はこびなど、松のひでを燈火にかへて草鞋うちながら馬士歌でもうたふべかりし身を、目鼻だちの何處やらが水子にて亡せたる總領によく似たりとて、今はなき人なる地主の内儀に可愛がられ、はじめはお大盡の旦那と尊びし人を、父上と呼ぶやうに成りしは其身の幸福なれども、幸福ならぬ事おのづから其中にもあり、お作といふ娘の桂次よりは六つの年少にて十七ばかりになる無地の田舍娘をば、何うでも妻にもたねば納まらず、國を出るまでは左まで不運の緣とも思はざりしが、今日この頃は送りとしたる寫眞をさへ見るに物うく、これを妻に持ちて山梨

の東郡に蟄伏する身かと思へば人のうらやむ造酒家の大身上は物のかずならず、よしや家督をうけつぎてからが親類緣者の干渉きびしければ、我が思ふ事に一錢の融通も叶ふまじく、いはゞ賓の藏の番人にて終るべき身の、氣に入らぬ妻までとは彌々の重荷なり、うき世に義理といふ柵みのなくば、藏を持ぬしに返し長途の重荷を人にゆづりて、我れは此東京を十年も二十年も今すこしも離れかたき思ひ、そは何故と問ふ人のあらば切りぬけ立派に言ひわけの口上もあらんなれど、つくろひなき正の處こゝもとに唯一人すてゝかへる事のをしくをしく、別れては顏も見がたき後を思へば、今より胸の中もやくやとして自ら氣もふさぐべき種なり。

桂次が今をる此許は養家の緣に引かれて伯父伯母といふ間がら也、はじめて此家へ來たりしは十八の春、田舍縞の着物に肩縫あげをかしと笑はれ、八つ口をふさぎて大人の姿にこしらへられしより二十二の今日までに、下宿屋住居を半分と見つもりて、出入り三年はたしかに世話をうけ、伯父の勝義が性質の氣むづかしい處から、無敵にわけのわからぬ强情の加減、唯々女房にばかり手やはらかなる可笑しさも呑込めば、伯母なる人が口先ばかりの利口にて離れにつきても根からさつぱり親切氣のなき、我欲の目當てが明らかに見えねば笑ひかけた口もとまで結んで見せる現金の樣子まで、度々の經驗に大方は會得のつきて、此家にあらんとには金づかひ

奇麗に損をかけず、表むきは何處までも田舍書生の厄介者が舞ひこみて御世話に相成るといふこしらへでなくては第一に伯母御前が御機嫌むづかし、上杉といふ苗字をば宜いことにして大名の分家と利かせる見得ぼうの上なし、下女には奥樣といはせ、着物の裾のながいを引いて、用をすれば肩がはるといふ、三十圓どりの會社員の妻が此形粧にて繰廻しゆく家の中おもへば此女が小利口の才覺ひとつにて、瓦人が箔の光つて見ゆるやら知らねども、失敬なは野澤桂次といふ見事立派の名前ある男を、かげに廻りては家の書生がと安々となされて御玄關番同樣にいはれる事馬鹿らしさの頂上なれば、これのみにても寄りつかれぬ價値はたしかなるに、えかも此家の立はなれにくゝ、心わるきまゝ下宿屋あるきと思案をさだめても二週間と訪問を絶ちがたきはあやし。

十年ばかり前にうせたる先妻の腹にぬひと呼ばれて、今の奥樣には繼なる娘あり、桂次がはじめて見し時は十四か三か、唐人髷に赤き切れかけて、姿はおさなびたれども、母のちがふ子は何處やらをとなしく見ゆるものと氣の毒に思ひしは我れも他人の手にて育ちし同情を持てばなり、何事も母親に氣をかね、父にまで遠慮がちなれば自づから詞かずも多からず、一目に見わたした處では柔和しき温順の娘といふばかり、格別利發ともはげしいとも、人は思ふまじ、父、

母そろひて家の内に籠り居にても濟むべき娘が、人目に立つほど才女など呼ばるゝ大方お俠の飛びあがりの、甘やかされの我まゝの、つゝしみなき高慢より立つ名なるべく、物にはゞかる心ありて萬ひかえ目にと氣をつくれば、十が七に見えて三分の損はあるものと桂次は故郷のお作が上まで思ひくらべて、いよ〳〵おぬひが身のいたましく、伯母が高慢がほはつく〳〵と嫌やなれども、あの高慢にあの温順なる身にて事なく仕へんとする氣苦勞を思ひやれば、せめては傍近くに心ぞへをも爲し、慰めにも爲りてやり度と、人知らば可笑かるべき自ぼれも手傳ひて、おぬひの事といへば我が事のやうに喜びもし怒りもして過ぎ來つるを、見すてゝ我れ今まで故郷にかへらば殘れる身の心ぼそさいかばかりなるべき、あはれなるは繼子の身分にして、腑甲斐ないものは養子の我れと、今更のやうに世の中のあぢきなきを思ひぬ。

(中)

まゝ母育ちとて誰れもいふ事なれど、あるが中にも女の子の大方すなほに生たつは稀なり、少し世間並除け物の緩い子は、底意地ばつて馬鹿强情など人に嫌はるゝ事この上なし、小利口なるは狡るき性根をやしなうて面かぶりの大變ものに成るもあり、えやんとせし氣性ありて人間の

質の正直なるは、すね者の部類にまぎれて其身に取れば生涯の損おもふべし、上杉のおぬひと言ふ娘、桂次がのぼせるだけ容貌も十人なみ少しあがりて、よみ書き十露盤それは小學校にて學びし丈のことは出來て、我が名にちなめる針仕事は袴の仕立までわけなきよし、十歳ばかりの頃までは相應に悪戯もつよく、女にしてはと亡き母親に眉根を寄せさして、ほころびの小言も十分に聞きし物なり、今の母は父親が上役なりし人の隠し妻どやらお妾どやら、種々曰くのつきし難物のよしなれども、持ねばならぬ義理ありて引うけしにや、それとも父が好みて申受しか、その邊たしかならねど勢力おさ〳〵女房天下と申やうな景色なれば、まゝ子たる身のおぬひが此瀬に立ちて泣くは道理なり、もの言へば睨まれ、笑へば怒られ、氣を利かせれば小ざかしと云ひ、ひかえ目にあれば鈍な子と叱かられる、二葉の新芽に雪霜のふりかゝりて、これでも延びるかと押へるやうな仕方に、堪へて眞直ぐに延びたつ事人間わざには叶ふまじ、泣いて泣いて泣き盡くして、訴へたいにも父の心は鐘のやうに冷えて、ぬる湯一杯たまはらん情もなきにまして他人の誰れにか慨つべき、月の十日に母さまが御墓まゐりを谷中の寺に樂しみて、志きみ線香夫々の供へ物もまだ終らぬに、母さま母さま私を引取つて下されと石塔に抱きつきて遠慮なき熱涙、苦のしたにて聞かば石もゆるぐべし、井戸がはに手を掛て水をのぞきし事三

四度に及びしが、つく〳〵思へば無情とても父様は眞實のなるに、我れはかなく成りて宜からぬ名を人の耳に傳へれば、殘れる耻は誰が上ならず、勿躰なき身の覺悟と心の中に詫言して、どうでも死なれぬ世に生中目を明きて過ぎんとすれば、人並のうい事つらい事、さりとは此身に堪へがたし、一生五十年めくらに成りて終らば事なからんと夫れよりは一筋に母様の御機嫌、父が氣に入るやう一切この身を無いものにして勤むれば家の内なみ風おこらずして、軒ばの松に鶴が來て巣をくひはせぬか、これを世間の目に何と見るらん、母御は世辭上手にて人を外らさぬ甘さあれば、身を無いものにして闇をたどる娘よりも、一枚あがりて、評判わるからぬやら。

お縫とてもまだ年わかなる身の桂次が親切はうれしからぬに非ず、親にすら捨てられたらんやうな我が如きものを、心にかけて可愛がりて下さるは辱けなき事と思へども桂次が思ひやりに比べては遙かに落つきて冷やかなる物なり、おぬひさむ我れがいよ〳〵歸國したと成つたならば、あなたは何と思ふて下さろう、朝夕の手がはぶけて厄介が減つて、樂になつたとお喜びなさろうか、夫れとも折ふしは彼の話し好きの饒舌のさわがしい人が居なくなつたで、少しは淋しい位に思ひ出して下さろうか、まあ何と思ふてお出なさると此樣な事を問ひかけるに、仰し

やるまでもなく、どんなに家中が淋しく成りましよう、東京にお出あそばしてさへ、一ト月も下宿に出て入らつしやる頃は日曜が待どほで、朝の戸を明けるとやがて御足おとが聞えはせぬかと存じまする物を、お國へお歸りになつては容易に御出京もあそばすまじければ、又どれほどの御別れに成りまするやら、夫れでも鐵道が通ふやうに成りましたら度々御出あそばして下さりませうかそうならば、嬉しけれどゝ言ふ、我れとても行きたくてゆく故郷でなければ、此處に居られる物なら歸るではなく、出て來られる都合ならば又今までのやうにお世話に成りに來まする、成るべくは烏渡たち歸り直ぐにも出京したきものと輕くいへば、それでもあなたは一家の御主人さまに成りて采配をおとりなさらずは叶ふまじ、今までのやうなお樂の御身分ではいらつしやらぬ筈と押へられて、されば誠に大難に逢ひたる身と思しめせ。

我が養家は大藤村の中萩原とて、見わたす限りは天目山、大菩薩峠の山々峯々垣をつくりて、西南にそびゆる白妙の富士の嶽は、をしみて面かげを示めさねども冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚といひては甲府まで五里の道を取りにやりて、やう〳〵鹽の刺身が口に入る位、あなたは御存じなければお親父さんに聞て見給へ、それは隨分不便利にて不潔にて、東京より歸りたる夏分などは我まんのなりがたき事もあり、そんな處に我れは括られて、面白くもない

仕事に追はれて、逢ひたい人には逢はれず、見たい土地はふみ難く、兀々として月日を送られねばならぬかと思に、氣のふさぐも道理とせめては貴嬢でもあはれんでくれ給へ、可愛さうなものでは無きかと言ふに、あなたは左樣仰しやれど母などはお浦山しき御身分と申て居ります。

何が此樣な身分うら山しい事か、こゝで我れが幸福といふを考へれば、歸國するに先だちてお作が咽死するといふ樣なことにならば、一人娘のことゆゑ父親おどろいて暫時は家督沙汰やめになるべし、然るうちに少々なりともやかましき財産などの有れば、みす〳〵他人なる我れに引わたす事をしくも成るべく、又は縁者の中なる欲ばりども唯にはあらで運動することたしかなり、その曉に何かいさゝか仕損ないでもこしらゆるれば我は首尾よく離縁になりて、一本立の野中の杉ともならば、其れよりは我が自由にて其時に幸福といふ詞を與へ給へと笑ふに、おぬひ惘れて貴君は其樣の事正氣で仰しやりますか平常はやさしい方と存じましたに、お作樣に咽死しろとは蔭ながらの嘘にしろあんまりでござります、お可愛想なことをと少し涙ぐんでお作をかばふに、それは貴嬢が當人を見ぬゆゑ可愛想とも思ふか知らねど、お作よりは我れの方を憐れんでくれて宜い筈、目に見えぬ繩につながれて引かれてゆくやうな我れをば、あなた

は眞の處何とも思ふてくれねば、勝手にしろといふ風で我れの事とては少しも察してくれる樣子が見えぬ、今も今居なくなつたら淋しかろうとお言ひなされたはほんの口先の世辭で、あんな者は早く出てゆけと帶に鹽花が落るならんも知らず、いゝ氣になつて御邪魔になつて、長居をして御世話さまに成つたは、申譯がありませぬ、いやで成らぬ田舍へは歸らねばならず、情のあらうと思ふ貴孃がそのやうに見すてゝ下されば、いよ〳〵世の中に面白くないの頂上、勝手にやつて見ませうと態とすねて、むつと顏をして見せるに、野澤さんは本當にどうか遊していらつしやる、何がお氣に障りましたのとお縫はうつくしい眉に皺を寄せて心の解しかねる躰に、それは勿論正氣の人の目からは氣ちがひと見える筈、自分ながら少し狂つて居ると思ふ位なれど、氣ちがひだとて種なしに間違ふ物でもなく、いろ〳〵の事が疊まつて頭腦の中がもつれて仕舞ふから起る事、我れは氣違ひか熱病か知らねども正氣のあなたなどが到底おもひも寄らぬ事を考へて、人まれず泣きつ笑ひつ、何處やらの人が子供の時うつした寫眞だといふあどけないのを貰つて、それを明けくれに出して見て、面と向つては言はれぬ事を並べて見たり、机の引出しへ叮嚀に仕舞つて見たり、うわ言をいつたり夢を見たり、こんな事で一生を送れば人は定めし大白痴と思ふなるべく、其やうな馬鹿になつてまで思ふ心が通じず、なき線ならば

切めては優しい詞でもかけて、成佛するやうにしてくれたら宜さそうの事を、志らぬ顏をして情ない事を言つて、お出がなくば淋しかろう位のお言葉は酷いではなきか、正氣のあなたは何と思ふか知らぬが、狂氣の身にして見ると隨分氣づよいものと恨まれる、女といふものは最う少しやさしくても好い筈ではないかと立てつゞけの一ト息に、おぬひは返事もしかねて、私しは何と申てよいやら、不器用なればお返事のしやうも分らず、唯々こゝろぼそく成りますとて身をちゞめて引退くに、桂次拍子ぬけのしていよ〳〵頭の重たくなりぬ。

上杉の隣家は何宗かの御梵刹さまにて、寺內廣々と桃櫻いろ〳〵植わたしたれば、此方の二階より見おろすに雲は柳曳く天上界に似て、腰ごろもの觀音さま濡れ佛にておはします御肩のあたり膝のあたり、はら〳〵と花散りこぼれて前に供へし樒の枝につもれるをかしく、下ゆく子守りが鉢卷の上へ、まばしやどかせ春のゆく衞と鄰ひくるもみゆ、かすむ夕べの朧月よに人顏ほのぼのと暗く成りて、風少しそふ寺內の花をば去歲も一昨年も其まへの年も、桂次此處に大方は宿を定めて、ぶら〳〵あるきに立ならしたる處なれば、今歲この度とりわけて珍らしきさまにもあらぬを、今とん春はとても立かへり蹈べき地にあらずと思ふに、こゝの濡れ佛さまにも中中の名殘をしまれて、夕げ終はりての宵々家を出でゝは御寺參ゐり殊勝に、觀音さまには

合唱を申て、我が戀人のゆく末を守り玉へと、お志しのほどいつまでも消えねば宜いが。

(下)

我れのみ一人のぼせて耳鳴りやすべき桂次が熱ははげしけれども、おぬひと言ふもの木にて作られたるやうの人なれば、まづは上杉の家にやかましき沙汰もおこらず、大藤村にお作が夢ものどかなるべし、四月の十五日歸國に極まりて土産物など折柄日清の戰爭畢、大勝利の袋もの、ばちん羽織の紐、白粉かんざし櫻香の油、繰類廣ければとり〳〵に香水、石鹸の氣取りたるも買ふめり、おぬひは桂次が未來の妻にと贈りものゝ中へ薄藤色の縮緬の襟に白ぬきの牡丹花の形あるをやりけるに、これを眺めし時の桂次が顏、氣の毒らしかりしと後にて下女の竹が申き。

桂次がもとへ送りこしたる寫眞はあれども、秘しがくしに取納めて人には見せぬか、夫れとも人しらぬ火鉢の灰になり終りしか、桂次ならぬもの知るによしなけれど、さる頃はがきにて處用と申こしたる文面は男の通りにて名書きも六蹴の分なりしかど、手跡大分あがりて見よげに成りしと父親の自まんより、娘に書かせたる事論なしとこゝの內儀が人の惡き目にて睨みぬ、

手跡によりて人の顏つきを思ひやるは、各を聞いて人の善惡を判斷するやうなもの、當代の能書に業平さまならぬもおはしますぞかし、されども心用ひ一つにて惡筆なりとも見よげのしたゝめ方はあるべきと、達者めかして筋もなき走り書きに人よみがたき文字ならば詮なし、お作の手はいかなりしか知られぬど、此處の內儀が目の前にうかびたる形は、横巾ひろく長つまりし顏に、自鼻だちはまづくもあるまじけれど、髮うすくして首筋くつきりとせず、胴よりは足の長い女とおぼゆると言ふ、すて筆ながく引いて見ともなかりしか可笑し、桂次は東京に見てさへ醜るい方では無いに、大藤村の光る君歸鄕といふ事にならば、機場の女が白粉のぬりかた思はれると此處にての取沙汰、容貌のわるい妻を持つぐらゐ我慢もある筈、水呑みの小作が子として一足飛のお大盡なればと、やがては實家をさへ洗はれて、人の口さがなし伯父伯母一つになつて嘲るやうな口調を、桂次が耳に入らぬこそよけれ、一人氣の毒と思ふはお縫なり。

荷物は通運便にて先へたゝせたれば殘るは身一つに輕々しき桂次、今日も明日もと友達のもとを馳せめぐりて何やらん用事はあるものなり、儘かなる人目の暇を求めてお縫が袂をひかえ、我れは君に厭はれて別るゝなれども夢いさゝか恨む事をばなすまじ、君はものづから君の本地

ありて其島田をば丸髷にゆひかへる折のきたるべく、うつくしき乳房を可愛き人に含まする時もあるべし、我れは唯だ君の身の幸福なれかし、すこやかなれかしと祈りて此長き世をば盡さんには隨分とも親孝行にてあられよ、母御前の意地わるに逆らふやうの事は君として無きに相違なけれどもこれ第一に心がけ給へ、言ふことは多し、思ふことは多し、我れは世を終るまで君のもとへ文の便りをたゝざるべければ、君よりも十通に一度の返事を與へ給へ、唾りがたき秋の夜は胸に抱いてまぼろしの面影をも見んと、このやうの數々を並らべて男なきに涙のこぼれるに、ふり仰向てはんけちに顏を拭ふさま、心よわげなれど誰れもこんな物なるべし、今から歸るといふ故郷の事業家のこと、我身の事お作の事みなから忘れて世はお縫ひとりのやうに思はるゝも闇なり、此時こんな場合にはかなき女心の引入られて、一生消えぬかなしき影を胸にきざむ人もあり、岩木のやうなるお縫なれば何と思ひしかは知らねども涙ぼろ〳〵こぼされて一ト言もなし。

春の夜の夢のうき橋、と絶えする横ぐもの空に東京を思ひ立ちて、道よりもあれば新宿までは腕車がよしといふ、八王子までは滝車の中、をりればやがて馬車にゆられて、小佛の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、犬目、鳥澤も過ぐれば猿はし近くに其の夜は宿るべ

し、巴峽のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の轡きに夢むすび愛く、これにも腸はたゝるべき聲あり、勝沼よりの端書一度とゝきて四日目にそ七里の消印ある封狀二つ、一つはお縫へ向けてこれは長かりし、桂次はかくて大藤村の人に成りぬ。

世にたのまれぬを男心といふ、それよ秋の空の夕日にはかに掻きくもりて、傘なき野道に横しぶきの難義さ、出あひし物はみな其樣に申せども是れみな時のはづみぞかし、波こえよとて末の松山ちぎれるもなく、男傾城ならぬ身の空涙こぼして何に成るべきや、昨日あはれと見しは昨日のあはれ、今日の我が身に爲す業しげゝれば、忘るゝとなしに忘れて一生は夢の如し、露の世といへばほろりとせしもの、はかないの上なしなり、思へば男は結髮の妻ある身、いやとても應とても浮世の義理をおもひ斷つほどのこと此人此身にして叶ふべしや、事なく高砂をうたひ納むれば、即ち新らしき一對の夫婦出來あがりて、やがては父とも言はるべき身なり、諸緣これより引かれて斷ちがたき絆次第にふゆれば、一人一箇の野澤桂次ならず、運よくは萬の身代十萬に延して山梨縣の多額納稅と銘うたんも斗りがたけれど、契りし詞はあとの湊に殘して、舟は流れに隨がひ人は世に引かれて、遠ざかりゆく事、千里、二千里、一萬里、此處三十里の隔てなれども心かよはずは八重かすみ外山の峰をかくすに似たり、花ちりて青葉の頃ま

でにお縫が手もとに文三通、こと細か成けるよし、五月雨軒ばに晴れまなく人戀しき折ふし、彼方よりも數〻思ひ出の詞うれしく見つる、夫れも過ぎては月に一二度の便り、はじめは三四度も有りけるを後には一度の月あるを恨みしが、秋蟲のはきたてとかいへるに懸りしより、二月に一度、三月に一度、今の間に半年目、一年目、年始の狀と暑中見舞の突際になりて、文言うるさしとならば端書にても事は足るべし、あはれ可笑しと軒ばの櫻くる年も笑ふて、隣の寺の觀音樣御手を膝に柔和の御相これも笑めるが如く、若いさかりの熱といふ物にあはれみ給へば、此處なる冷やかのお縫も笑くぼを頬にうかべて世に立つ事はならぬか、相かはらず父樣の御機嫌、母の氣をはかりて、我身をない物にして上杉家の安穩をはかりぬれど、ほころびが切れてはむづかし。

經つくゑ

（一）

哀れ手向の花一枝に千年のちぎり萬年の情をつくして、誰れに操の身はひとり住、あたら美形を月花にそむけて、世は何時ぞとも知らず顏に、繰るや珠數の緒の引かれては御佛輪廻にまよひぬべし、ありしは何時の七夕の夜、なにと盟ひて比翼の鳥の片羽をうらみ、無常の風を連理の枝に憤りつ、此處閉窓のうち机上の香爐に絶えぬ烟りの主はと問へば、答へはぱろり襠袢の袖に露を置きて、言はぬ素性の聞きたきは無理か、かくすに顯はるゝが世の常ぞかし。

さすれば夢のあともなけれど、悟らぬ先の誰れも誰れも思ひを寄せしは名か其人か、醫科大學の評判男に松島忠雄と呼ばれて其頃二十七か八か、名を聞けば束髮の薔薇の花やかで笑みを作り、首卷のはんけち俄かに影を消して、途上の默禮とも千歳の名譽とうれしがられ、娘もつ親幾人に仇敵の思ひをさせて我が聟がねにと夫れも道理なり、故郷は靜岡の流石に士族出だけ人品高尚にて男振申分なく、才あり學あり天晴れの人物、今こそ內科の助手といへども行末の

望みは十指のさす處なるを、これほどの人他人に取られて成るまじとの意氣ごみにて、舞さま拂底の世の中なればにや華族の姫君、高等官の令嬢、大商人の持參金つきなど彼れよ是れよと申込みの口〻より、小町が色を衒ちふ島田髷の寫眞鏡、式部が才にはこる英文和譯、つんで机上にうづたかけれども此男なんの望み有りてか有らずか、仲人が百さへづり聞ながしにして夫れなりけりとは不審しからずや、うたがひは懸かる柳闇花明の里の夕べ、うかるゝ先きの有りやと見れど品行方正の受合人多ければ事はいよ〳〵闇黑になりぬ、さりながら怪しきは退院がけに何時も立寄る某れの家、雨はふれど雪は降れど其處に轅棒おろさぬ事なしと口さがなき車夫の誰れに申せしやら、某から某と傳はりて想像のかたまりは影となり形となり種々の噂となり、人知れず氣をもみ給ふ御方もありし、其中に別けて苦勞性のあるお人まのびやかに跡をやつけ給ひし、探ぐりに探ぐれば扨も煙蛮のもと暗らさよ、本郷の森川町とかや神社のうしろ新坂通りに幾構への生垣ゆひ廻せし中、押せば開らく片折戸に香月そのと女名まへの表札かけて折々もるゝ琴のまのび音、軒端の梅に鶯はづかしき美音をば春の月夜のおぼろげに聞くばかり、ちらり姿は夏の簾ごし憎くや誰れゆゑ惜しみてか藥師さまの御緣日にそゝろあるきをするでもなく、人まち顔の立姿かどに拜みし事もなけれど美人と言ふ名との近傍にかくれなしと

聞くは、扨こそ彌々學士の外妾か、よしや令嬢ぶればとてお里はいづれ知れたもの、其樣なものに鼻毛よまれて果は跡あしの砂の御用心さりとてはお笑止やなどゝ憎くまれ口いひちらせど皿の處は妬し妬しの積り、かゝる人々の瞋恚のほむらが火柱などゝ立昇つて罪のない世上をおどろかすなるべし。

(二)

黑ぬり塀の表かまへとお勝手ひきの經濟は別ものぞかし、推はかりに人の上は羨やまぬ物よ、香月左門といひし舊幕臣、彼の學士の父親とは社祢の肩をならべし間なるが、維新の變に彼れは靜岡のお供、これは東臺の五月雨にながす血汐の赤き心を首尾よく顯はして露とや消えし、水さかづきして別れし限りの妻へ形見が此美人なり、人の不幸は生れながらに後家さまの親を持ちて、すがる乳房の甘へながらも父といふ味夢にも知ず、物ごゝろ知るにつけて親といへば二人ある他人のさまの羨やましさに、いとしき事とひかけては幾度母の袖をぼらせしが、その母にも又十四といふとし果敢なく別れて今は身一つのいたはしさ、かの學士どの其病床に不圖まねかれて盡力したるが原因となり、くり返す昔しのゆかりも捨てがたく、引つゝいて行通

しけるが、見るにも聞くにも可愛想なり氣のどくなり、これが若しもお俠ん娘の飛びかへりなどならば知らぬ事、世といはゞ門の戸の外をも見ず、母さまとならでは湯にも行かじ、觀音さまのお參りもいやよ、芝居も花見も母さま御一處ならではと此一トもとのかげに隱くれて、姿こそ島田の大人づくらせたれど正の處は人形だいて遊びたきほどの嬰兒さまが俄かに落し木の下の猿同やう、涙のほかになんの考へもなくお民と呼ぶ老婢の袖にすがつて、私しも一處に棺に入れよとて聞きわけもなく泣き入りし姿のあくまであどけなきが不愍にて、素より離れたのまねば義務といふ筋もなく、恩をきせての野心もなけれど夫れより以來の百事萬端、身に引うけて世話をすること眞の兄弟も出來ぬ業なり、これを色眼鏡の世の人にはほろ醉の膝まくらに耳の垢でも取らせる處が見ゆるやら、さりとは學士さま寃罪の訴へどころもなし。

今の世の女子教育を贊成といひかたき心よりお園にも學校かよひ爲せたくなり、廻り路でもなき師宅がけの一時間を此家に寄りては讀書算術、思ふやうに教へて見れば記憶もよく分りも早く、學士はいよ〳〵可愛がりしが、お園すこしの感じもなく、有がたし嬉しなど口の先に出すどころか顏を見るさへ嫌やがりて、日々の稽古にも書物の事より外に問ふことの無きは勿論、返事をさへ打とけて言ひし事はなく、强て問へば泣き出しさうな景色を見るお民氣の毒さかぎ

りなく、何歳までも嬰兒さまで致しかたが御座りませぬ、流石に氣のおけるお他人には少し大人らしくお成り遊ばせど、お心安だての我まゝか、甘へ氣味であの通りの御遠慮なさ、ちと御呵り遊ばして下さりませと極り文句に花を持たすれど學士は更に氣にも止めず、その幼なきが尊ときなり、反對に跳かへられなばお民どのにも療治が六ッかしからん、園さま我れに遠慮は入らず、嫌やな時は嫌やといふがよし、我れを他人の男と思はず母樣同やう甘へ給へと優しく慰さめて日毎に通へば、なほさら五月蠅く厭はしく車のおとの門に止るを何よりも氣にして、それお出と聞がいなや、勝手もとの箒に手拭をかぶらせぬ。

(三)

お民は此家に十年あまり奉公して主人といへど今は我が子に替らず、何とぞ此人を立派に仕あげて我れも世間に誇りたき願ひよりやきもきと氣を揉むほど何心なきお園の躰のもどかしく、どうした物と考へ、困つたものと歎き、はては意見に小言を交ぜて或る日さまざま言ひ聞かせぬ。

何時かは言はふと存じたれど、お前さまといふ御人には呆れまする、是れが五つや十の子供で

はなし、十六といへばお子樣もつ人もありますぞや、まあ考へて御覽なされお母樣がお病沒かち此かた、足かけ三年の長の間に松島さまが何れほど盡して下されたと思しめす、私しでさへ涙がこぼれるほど嬉しきにお前さまは木か石か、さりとは不人情と申す者なり、お覺えがある筈なれど一々申さねばお分りになるまじ、お身寄り便りのなきお前さまの身を案じて、人は敵が肝腎のものなるに言はゝ園さまなどは今が白糸、何の色にも染まりやすければ、學校がよひに宜からぬ友でも出來てはならず、一切我れに任かせてまあ見て居てくれと親切に仰しやつてお師匠さまから毎日のお出稽古、月謝を出して附け屆けして御馳走して車を出して、あがめ奉る先生でも雪や雨には勿論の事、三度に一度はお斷りが常のものなり、それを何ぞや駄々つ子樣の御機嫌とり〳〵、此本一冊よみ終らば御褒美には何を參らせん、手ならひが能く出來たれば此次には文を書きて見せ給へと勿躰ない率皆の稍半切れを手遊に下された事忘れはなさるまい、斯う申さばお前さまのお心には何の彼んな物たゝきつけて返したしと思しめすか知れど、紙一枚にも真實のこもるお志しを頂く物ぞかし、其御恩を何とも思はず、一年といふ三百六十五日打通して、好い顏どころか普通の暑い寒いも滿足には仰しやらず、必竟あの方なればこそお腹もたてず氣にも悪けず可愛がつて下さるものゝ、第一天道さまの罰が當らずには居りま

せぬ、昨日も此近傍の噂を聞けば松島さまは世間で評判の方、奥さま持たうなら撰り取り見どりに山はどなれど何方もお斷りで此方へのお出は嬢樣の上にばかり日の照りが違うか、何といふお幸福と燒もちやいて羨みますぞや、そのお人に捨てられたらお前さまはまあ何と遊ばす、お泣きなさるはお腹がたつか、お怒りになつてもよし、民は申だけは申ます、悪るくお聞き遊ばせば夫れまで、さりとは方圖のなきお我まゝと思ひ切つて呵りつけしが是れも主思ひの一部なり、もとよりお園に悪る氣のあるではなく唯おさな子の人ぎらひして、抱かれるを嫌やがり、あやされゝば泣くと同じく、何故か其人に氣が合はず去りとて格別に仇をして困らせんなどゝ念の入りし憎くさでもなく、まこと世間見ずの我まゝから起りし所爲なれば、言はれるにつけて何と言譯の理由もなく、口惜しきか悲しきか恥かしきか無茶苦茶に泣いて顏もあげぬを、お民なほも何事をかいはんとする折門にとまる例の車の音、それお出なり今日とそはお優しく遊ばせよ。

(四)

園さまはどうなされた今日はまだ顏が見えぬと問はれてまさかに、今までこれ〳〵で次の間に

泣いて居られますとも言ひがたければ、少々御不加減で、然しもう宜しう御座りませうほどに、まあお茶を一つなどゝ民は其場をつくろひぬ。

學士眉を皺めて夫れは困つたもの、全躰が健康といふ質でなければ時候の替り目などは殊さら注意せねば悪るし、お民どの不養生をさせ給ふな、さてと我れも急に白羽の矢が立ちて、遠方へ左遷と事が極まり今日は御吹聽ながらの御告別なりと譯もなくいへばお民あきれて、御申談をおつしやりますな、いや申談ではなし札幌の病院長に任じられて都合次第明日にも出立せねばならず、尤も突然といふではなく斯うとは大抵志れて居りしが、何か驚かせるが苦るしさに結局いはねばならぬ事を今日までも默つて居りしなり、三年か五年で歸るつもりなれども其はどは如何か分らねばまづ當分お別れの覺悟、それにつけても案じられるは園様のこと、何の餘計な世話ながら何故か最初から可愛くて真實の處一日見ぬも氣になる位なれど、さりとて何時來ても喜ばれるでもなく、結局あれほど厭やがるものを氣の毒など氣のつかぬでもなけれど、如何かして天晴れの淑女に育てゝ見たく、自惚れの言ひ分と笑ひ給はんが兎に角今日まで嫌やがられに來しなり、まづ學問といふた處が女は大抵あんなもの、理化學政法などゝ延びられては、お嫁さまの口にいよ〳〵遠ざかるべし、第一皮相の學問は枯木に造り花したも同じにて真

心の人は悦ばぬもの、よしや深山がくれでも天真の花の色は都人を床しがらする道理なれば、此うへは優美の性をやしなつて德をみがく樣に教へ給へ、我れ此地に居たりとて根からさつぱり談合の膝にも成るまじきが、これからはいよ〳〵お民どの大役なり、前門の虎、後門の狼、右にも左にも怕らしき奴の多き世の中、あたら美玉に疵をつけ給ふな、園さまにも言ひきかせたきこと多くあれど我が口よりいはゝ又耳に兩手なるべし、不思議に緣のない人に緣があるか馬鹿らしきほど慎いてゆくが嫌やな氣持ちと、笑つてのけながら調子がいつもほど冴えては聞えず。

散々のお民が異見に少し我が非を知り初し揚句、その人は俄かに別れといふ、幼なき心には我が失禮の我まゝを憎くみて夫故に遠國へでも行かれるやうに悲しく、詫がまたれけれど障子一重を出る時機がなく、お民が最初に呼んで呉れし時すこしひねくれてより拍子ぬけがして今更には馳け出しもされず、其うちにお歸りにならば何とせん、もう逢つては下さらぬかなどゝ敷居の際にすり寄つてお園の泣けるも知らず、學士はその時つと起つて、今日はお名殘なるに切めては笑ひ顔でも見せて給はれとさらり障子を明くれば、おゝ此處にか。

(五)

左樣ないてくれては困る、お民どのも同じやうに何の事ぞ、もう逢はれぬと言ふでもなきに心細き事いひ給ふな、園さま何も詫びらるゝ事はなし、お前さまの事は宜しくお民が承知して居れば少しも心配の事はあらず、唯これまでと違ひて段々と大人になり世間の交際も知らねばならず、第一に六づかしきは人の機嫌なり、さりとて諂ひの草履とりも餘りほめた話しではなけれど开處が工合ものにて、清淨なり無垢なり潔白なりのお前樣などか、右をむくとも左を向くとも憎くむ人は無き筈なれど夫れでは世が渡られず。我れも矢張り其仲間の一枚板にて使ひ道が不向きなれども流石に年の功といふものか少しはお前さまより人が悪るし、さりとて悪るく成り過ぎては困れど過不及の取かぢは心一つよく考へて應用なされ、實の處出立は明後日支度も大方出來たれば最早お目にかゝるまじく隨分身躰をいとひて煩ひ給ふな、此上にお願みは萬々見送りなどして下さるな、さらでだに泣き男の我れ朋友の手前もあるに何かをかしく察られてもお互に詰らず、さりながらお寫眞あらば一枚形見に頂きたし此次出京する頃には最はや立派の奥樣かも知れず、それでも又逢つて給はるかと顔をのぞけば、膝に泣き伏て正躰もなし、

夫れほど別れるがお嫌やかと背を撫でられて默頭づく可愛さ、三年目の今日今さらに寧いつもの愁らきが增しなり。

柔かき人ほど氣はつよく學士人々の涙の雨に路どめもされず、今宵は切めてと取らへる袂を優しく振切つて我家へ歸れば、お民手の物を取られしほど力を落して、よしや千里が萬里はなれるとも眞實の親子兄弟ならば何時歸つて何うといふ樂しみもあれど、ほんの親切といふ一筋の糸にかゝつて居し身なれば、遠ざかるが最期もう緣の切れしも同じこと取りつく島の頼みもなしと、我れ振りすてられしやうな歎きにお園いよ〳〵心細く、母親の別れに悲しき事を知り盡して腸もみ切るほど泣きに泣きしが今日の思ひは夫れとも變りて、親切勿躰なし、殘念などゝいふ感念が右往左往に胸の中を搔き廻して何が何やら夢の心地、さりとて其夜は寐らるゝところならず、强ひて床へは入りしものゝ寐間着も着かへず横にもならず、さてつく〳〵と考へれば目の前に畫間の樣々が浮かびて、我れは知らねど胸にや刻まれし學士が言ひし詞一言半句も忘れず、歸り際は此袖をかく捉らへて待つとし聞かば今かへり來んと笑ひながらに仰せられし彼のお聲も最う聞くことは出來ず、明日からは車のおとも止まるまじ、思へば何故に彼の人のあの樣に嫌やなりしかと長き袂を打かへし打かへし見る途端、紅絹の八ツ口ころ〳〵と洩れて

燈下に輝やく黄金の指輪、學士が左の藥指に先のほどまで光りしものなり。

（十八）

苔みと思ひし梢の花も春雨一夜たしぬけにこれはこれはと驚かるゝ物なり、時機といふものゝ可笑しさには お園の小さき胸に何を感ぜしか、學士が出立後の一日二日より爲る所業どことなく大人びて今までの樣に我まゝも言はず、縫はり仕事よみ書の外、以前に增して身をつゝしみ誘ふ人ありとも人寄せ芝居の浮きし事に足も向けねば、折ふしは遂ひに今まで見し事もなき日本全圖などゝいふ物をお民がお使ひの留間の間に繰り開げて居る事もあり、新聞紙の上にも札幌とか北海道とか言ふ文字には逸はやく目のつく樣子、或日お民氣が付いて見れば右の指にあり〳〵と輝やくものあり。

さても秋風の桐の葉は人の身か、知らねばこそあれ雪佛の堂塔いかめしく造らんとか立派にせんとか、あはれ草臥もうけに成るが多し、文化とか開明とかの餘光に何事も根から葉から堀かへして百年千年むかしの人の心の中まで解剖する世に、これを職掌の醫道の妙にも我が天授の齡ひは何うもならず、學士札幌へ赴きし歳の秋、診察せし室扶斯患者に感染して、惜しや三十

路にたらぬ若ざかりを北海道の土に成しぬ、風の便りにこれを聞きしお園の心。

空蟬の世の中すてゝ思へば黒染に袖の色かへるまでもなく、花もなし紅葉もなし、丈にあまる黒髪きり拂へばとて夫れは見る目の菩提心、人前づくりの後家さまが處爲ぞかし、うき世の飾りの紅をしろいこそ入らぬ物と洗ひ髪の投げ島田に元結一筋きつて放せし姿、色このむ者の目には又一段の美とたゝえて甥にゆかん嫁にとらん、家名相續は何ともすべしと言ひ寄る人一人二人ならず、ある時學士が親友なりし某、當時醫學部に有名の教授どの人をもつて法の如く言ひ込みしを、お民上もなき緣と喜びてお前さまも今が花のさかり散りがたに成つては呼んで歩行とも賣れる事でなし、大底にお心を定め給へ、松島さまに恩はありとも何のお約束がありしでもなく、よし有りたりとも再緣する人さへ世には多し、何處へ憚かりのある事ならねばとて既諭せしに、お園にこやかに笑ひて口先の約束は解くにとかれもせん、其の愛なき契りは拚て再緣する人も有べし、素より彼の人に約束の覺えなく增して操の立てやうもなけれど、何處とも知らず染みたる思ひは此身ある限り忘れ難ければ、萬一かの教授さま達て妻にと仰せのあらば、形だけは參りもせん心は容易くたてまつり難しと傳へ給へと、事もなく言ひて聞きいれる景色のなきに、お民いひ甲斐なしと斷念して夫れよりは又勸めずとぞ、經机の由緣かくの如

し。

或る口の悪るきお人これを聞きて、扨もひねくれし女かな、今もし學士が世にありて札幌にもゆかず以前の通り生やさしく出入りをなさば、虫づのはしるほど嫌やがる事うたがひなしと苦笑ひして仰せられしが『ある時はありのすさびに憎くかりき、無くてぞ人は戀しかりける』兎にも角にも意地わるの世や意地悪るの世や。

やみ夜

(一)

取まはしたる邸の廣さは幾ばく坪とか聞えて、閉ぢたるまゝの大門はいつぞやの暴風雨をそのまゝ今にも覆へらん樣あやふく、松は無けれど瓦に生ふる草の名の忍ぶ昔はそも誰れとか、男鹿やなくべき宮城野の秋を、いざと移したる小萩原ひとり錦をほこらん頃も、觀月のむしろに雲上のたれそれ樣つらねられける袂は夢なれや、秋風さむし飛鳥川の淵瀬こゝに變りて、よからぬ風說は人の口に殘れど餘波いかにと訪ふ人もなく、哀れに淋しき主從三人は都ながらの山住居にも似たるべし。

山師の末路はあれと指されて衆口一齊に非はならせど私欲ならざりける證據は家に餘財のつめる物少なく、殘す誹りのそれだけは施しける徳も蔭なりけるが多かりしかば我れぞ其餘にと潤れ色みする人すらなくて、醜名ながく止まる奥庭の古池に、あとは言ふまじ恐ろしやと雨夜の雜談に枝の添ひて松川さまのお邸といへば何となく怕き處のやうに人思ひぬ。

もとより廣き家の人氣すくなければ、いよ〳〵空虛として荒れ寺などの如く、掃除も左のみは行とゞかぬがちに入用のなき間は雨戸を其まゝの日さへ多く、俗にくだきし河原院もかくやと許り、夕がほの君ならねどお蘭さまとて册かるゝ娘の兒にも取られで淋しとも思はぬか、習慣あやしく無事なる朝夕が不思議なり。

晝さへあるに夜るはまして孤燈かげ暗き一室の壁にうつれる我がかげを友にて、唯一人悄然と更けゆく鐘をかぞへたらんには、鬼神をまのぐ荒ら男たりとも越し方ゆく末の思ひに迫まられて涙は襟に冷やかなるべし、時は陰暦の五月廿八日、月なき頃は暮れてほどなけれども闇の色ふかく、こんもりと茂りて森の如くなる屋後の樫の大樹に音づるゝ風の音もの凄く聞えて、其うらてなる底ゐれずの池に寄る波の音さへ手に取るばかりなるを、聞くともなく聞かぬともなく、紫檀の机に臂を持たして、深く思ひいりたる眼は半ばねぶれる如く、折々にさゝ波うつ柳眉の如何なる愁ひやふくむらん、黄金を鑠かす此頃の暑さに、こちたき髪のうるさやと洗ましけるは今朝、おのづからの綠ゐたゝらん計なるが肩にかゝりて、こぼるゝ幾筋の雪はづかしき類にかゝれるほど好色たる人に許させんは勿體なし、何とやら觀音さまの面かげに似て、それよりは淋しく、それよりは、美くし。

忽ち玄關の方に何事ぞ起りたると覺しく人聲俄かに聞えて平常ならぬに、ねふれる樣なりし美人はふと耳かたぶけぬ、出火か、鬪爭か、よもや老夫婦がと微笑はもらせど、いぶかしき思ひに襟を正して猶聞とらんと耳をすませば、あはたゞしき足音の廊下に高く成りて、お蘭さま御書見で御座りまするか、濟みませぬがお藥りを少しと障子の外より言ふは老婆の聲なり。何とせしぞ佐助が病氣でも起りしか樣子によりて藥の品もあれば急かずに話して聞かせよと言へば、敷居際に兩手をつきたる老婆は慇懃に、否老爺では御座りませぬ。今夜も例の如く佐助、お庭内の見廻りを濟まして御門の締りを改めに參りし、潛りの工合のわるくして平常さわる處のあれば夫を直さんとて明けつ閉めつするほどに、暗をてらして彼方の大路より飛び來る車の、提燈に潺潺の紋ありしかば氣ばやくも涙崎さまの御出來と思ひて、閉づべき小門を其まゝに待ち參らせし、されども夫れは涙崎さまにては非ざりしならん。其車の御門前を過ぐる時、老爺も知らざりし何時の間にか人のありて、馳せ過ぐる車の輪に何として觸れけん、あつと叫ぶ聲に驚きし老爺の我が額を潛りに打ちし痛さも忘れて轉ろび出しに慣くきは夫れと知りつゝ宙を飛ばして車は過ぎぬ。殘りし男の負傷はさしたる事ならねど若きに似合ぬ意氣地なしにて、へた〳〵と蹶りて起つべ

き勢ひもなく、半分は死にたるやうな哀れの情態、これを見捨る事のならぬ老爺が、お叱りを受くるかは知らねどお玄關まで荷ひ入れしに、また人心地のあるやなしなる覺束なさ、ともかく一ト目見ておやり下され、嘘ならぬ憐れさと語りける。

（二）

數日の飢と疲れに綿の如く成りし身も又もや車の齒にかけられて、痛みと驚きに魂ひいつか身を離れて氣息の絶えける暫時は夢のやう成りしに、頽郁とせし香の何處ともなくして胸の中すゝしく成ると共に、物に覆はれたらん樣なりし頭の初めて我れに復りて儘かに目を開きて身邊を見廻ぐらせば、氣の付しと見ゆるに藥今少しといふ聲その枕に聞えて、まだ魂ひの極樂にや遊ぶいづれ人間の種ならぬ女菩薩こゝにおはしましけり。さりとは意地のなき奴、疵は小指の先を少しかすりて、蜻蛉おふ小僧が小溝にはまりても此位の負傷はありうちなるを、氣を失なふ馬鹿もなき物ぞ、走つかりして藥でも呑めやと佐助のやかましく小言いふを左樣あらあらしくは言はぬ物、いづれ病後か何かにて酷く疲れて居るらしければ、靜かに介抱して遣るがよし。

心を置くべき宿ならねば氣を落つけてゆる〳〵と睡り給へ、幾日ありとて此處にはさしつかへも無けれど我家へ知らせたしと思はゝ人を遣りて家内の人をも迎ふべし、不時の災難は誰しもあるならひなれば氣の毒などの念をさりて思ふまゝの我まゝを言ふがよし、打見し處が病氣あがりかとも見ゆるに斯く夜に入りても家に歸らずば、有らば二タ親の心配さこそと思はるゝに今宵は此處に泊まる事として人をば宿處に走らすべし、目前みての憂ひよりは想像にこそ苦はますなれ、別條なきよしを知らせて其さま〳〵に走しる想像の苦を安めたし。

住處はいづれぞと問はれて、つらく起かへる男の顔はいたく肉落て、大きやかなる目の光りどんよりと、鼻はひくからねど鼻筋いたく窪みて、さらでもさし出たる頷のいよ〳〵いちじるく、生際薄くして延びたる髪は頸をおほへり、物いはんとすれば涙のみこぼれて色もなき唇のぶる〳〵と戦くは感の胸に迫りてにや、お關は靜かにさし寄りていざと藥をすゝむれば、手を振りて最早氣分はたしかで御座りまする。

歸るべき家なく、案じ給ふ親なければ車に引ころされぬとも、道に行仆れぬとも我れ一人天命を觀ずる外、世間に哀れと見る人もあるまじ、情ある方々に媚しき詞をそゝがるゝは薄命の我れに中々の苦るしみを增す道理なれば、氣のつかざりしほどは兎も角、今は御門外へ捨てさせ

給へ、命あるほどは憂きを見盡して魂さりての屍體は瘠せ犬の餌食にならば事たる身なり。恨めしかりし車の紋は澤瀉、暗なれども見とめたりし面かげの主に恨みは必らず返へせど、情ある君達に御恩報じの叶ふべき我れならず。

さらば死し給へと身を起すに足もと定まらずよろ〳〵とするを、扨もあぶなし道理のわからぬ奴め、親がなしとても其身は誰れから貰ひしぞ、さる無造作に亂末にして濟むべきや、汝ごとき不了簡ものゝ有ればこそ世上の親に物おもひは絶えざるなれと、我れも一人もちたる子に苦勞したりし佐助が、人事ならず氣づかはしさに叱りつけて座らすれば、男は又もや首うなだれて俯ぶく。

逆上してをかしき事を言ふらしければ今宵一夜こゝに置きて、ゆる〳〵睡らせたしと老婆もいふに、男は老夫婦にまかせてお蘭は我が居間に戻りぬ。

(三)

雛にからむ朝顔の花は一朝の榮えに一期の本懷を盡くすぞかし、我身に定まりたる分際を知らば爲さぬ浮世に思ふ事あるまじく、甲斐なき悶に腸にゆべしやは、さても祖父の世までは一

鄉の名醫と呼ばれて切棒の駕に畔ゆく村童まで跪かせしものを、下りゆく運は誰が導きの薄命道、不幸夭死の父につゞきて母は野中の草がくれ妻とは言はれぬ身なりしに、浮世はつれなし親族なりける誰れ彼れが作畧に、爭はんも甲斐なや亡き旦那さまこそ照覽ましませ、八幡いつはりなき御胤なれども言ひ張りてから欲とや言はれん卑賤の身くやしく、涙を包みて宿に下りしは此子胎内に宿りて漸く七月、主樣うせての二七日なりける、さるほどに狹きは女子の心なり、恨みのつもる世の中あぢきなくなりて、死出の山路けふや明日やと祈れば、さらでも の初產に血の騷ぎはげしく產み落せし子の顏も得ざらで哀れ二十一の秋の暮一村しぐれ誘はれて逝きぬ、東西さらぬ昔しより父なく母なく生ひたてば、胸毛に埋もれし祖父の懷中よりほかに世の暖かさを身に知らねば、春風氷をとく小田のくろに里の童が遊びにも洩れて、我れから木がくれのひねれ者に强情いよ〳〵つのれば、憐れをかくるは祖父一人、世間の人に憎くまるゝほど不憫や親のなき子は添竹のなき野末の菊の曲がるもくねるも無理ならず、不運は天にありて身から出たる罪にもあらぬを親なし子と落しめる奴原が心は鬼か蛇か、よし我等が頭に宿り給ふ神もなき佛もなき世なるべし、世間は我等が仇敵にして、我等は遂ひに世間と戰ふべき身なり、祖父なき後は何處に行きても人の心はつれなければ夢いさゝかも他人に心をゆるさ

ず、人我れにつらからば、我れも人につらくなして、とても憎くまるゝほどならば生中人に媚びて心にもなき追從に破れ草鞋の踏みつけらるゝ所業はすなとて口惜し涙に明けくれの無念は日間なく、我が孫かはゆきほど世の人憎くければ此子が頭に拳一つ當てたる奴は假令村長どのが息子にせよ理非は兎に角相手は我れと力味たつ、無法の振舞やうやく募のれば、もとより水呑み百姓の痩田一枚もつ身ならぬに憎くき老ぼれが根生骨、美事通して見よやと計り田地持ちに睨らまれたるぞ最期、祖父孫二人が命は風にまたゝく殘燈の言はんも愚かや消るは定なり。娘が死せての十三回忌より老爺は不起の病ひにかゝりぬ、瞋念の眼かたく閉ぢては今更の醫藥も何かはせん、哀れの孫と頑固の翁ど唯二人、傾きたる命運を茅屋が軒の月にながめて、人きかば魂や消ぬべき凄く無慘の詞を殘して我れは流石に終焉みだれず、合唱すべき佛もなしとや嘲ける如き笑みを唇に止めて、行方は何處ぞ地獄天堂、三寸息たえて萬事休みぬ。

殘りし孫ぞ即ち今日の高木直次郎、とる年は十九、つもりし憂きは量るも哀れや、仰げば高き鹿野山の麓をはなれ天羽郡と聞えし生れ故郷を振すてけるより、おのれやれ世に捨てられ物の我れ一身を犧牲に、こゝ東京に醫學の修業して聞傳へたる家の風いざやとばかり、母と祖父との恨みを負ひて誰れにか談合らん心一つを杖に、出し都會に人鬼はなくとも何處の里にも用ひ

らるゝは才子、よしや輕薄のそしりはありとも口振利口に取り廻しの小器用なるを人喜ぶぞかし、孟嘗君今の世にあらばいざ知らず、癖づきし心は組糸をときたる如く、はてもなくこぢれて微塵愛敬のなきに、仕業も拙なりや某博士誰れ院長の玄關先に熱心あふるゝ辯舌さわやかならず、自ら食客の輩貶したりとて誰れかは正氣に聞くべき何處にも狂氣あつかひ情なく、さる處にて乞食とわやまたれし時御臺處に呼こまれて一飯の御馳走下しおかれしを、さりとは無禮失禮奇怪至極と蹴返へす膳部に一喝して出ぬ。

野猪に似たりし勇のみあふれて智惠は袋の底にや沈みし、誰が目に見ても看板うつて相違なき愚人と知らるれば、流石に憐れむ人もありて心は低くせよ身を惜しむな、其身に合ひたる勞働ならば夫れ相應に世話しても取らすべしとて、湯屋の木拾ひ、蕎麥やのかつぎ、權助庭男の數を盡くして、一年がほどに目見への數は三十軒、三日と保たず隨德寺はまだよし、内儀樣のヒ、、、、やらくらの髮たぼ胸あるやと張仆して馳せ出けるもあり、旦那どのと口論のはては腕立の始末はづかしく、警察の世話にも幾度とかや、又そろ此處も敵の中と自ら定めぬ。

木賃宿とて燈火暗き塲末の旅店に帳つけといふ物して送りける昨日今日、主人が輕侮の一言に持病むら〳〵として發れば、何か堪へん筆へし折りて硯を投げつけつ、さして行く手は東西南

北、ふすや野山の當てもなき身に高言吐きちらして飛び出せば、それよりの一飯も如何はすべき、舌かみ切つて死なん際まで人の軒端に立つ男ならねば、今日も暮れぬる入相の鐘にさても塒をさらぬ身は旅烏にも劣りつべく、來るともなく行くともなく、よろめき來たりし松川屋敷の表門、驚破といふ間に挽過し車ぞ佐助も見たりし澤瀉の紋なる。

（四）

此處に助けられたる夜より三日がほどを夢に過くせば記憶はたしかならねど最初の夜見たりし女菩薩枕のもとにありて介抱し給ふと覺しく、臙氣ながら美くしき御聲になぐさめられ、柔らかき御手に抱かるゝ我れは宛然天上界に生れたらん如く、覺めなばはかなや花間の胡蝶、我れは人かの境に唾りぬ。

浮世の中の淋しき時、人の心のつらき時、我が手にすがれ、我が膝にのぼれ、共に携へて野山に遊ばゝや、悲しき涙を人には包むとも我れにはよしや瀧つ瀨も拭ふ袂は此處にあり、我れは汝が心の愚なるも卑しからず、汝が心の邪なるも憎からず、過にし方に犯したる罪の身をくるしめて今更の悔みに人知らぬ胸を抱かば、我れに語りて清しき風を心に呼ぶべし、恨めしき時くやしき時はづかしき時、失望の時、落膽の時、世の中すてゝ山に入りたき時、人を殺して財を得たき時、高位を得たき時、高官にのぼりたき時、花を見んと思ふ時、月を眺めんと思ふ時、風をまつ時、雲をのぞむ時、棹さす小舟の波のうちにも、嵐にむせぶ山のかげにも、日かげに疎き谷の底にも、我身は常に汝が身に添ひて、水無月の日影つち裂くる時は清水となりて渴きも癒やさん、師走の空の雪みぞれ寒き夕べの皮衣とも成ぬべし、汝は我と離るべき物ならず、我れは汝と離るべき中ならず、醜美善惡曲直邪正、あれもなし、これもなし、我れに隱くすことなく、我れに包むことなく、心安く長閑に落付て、我が此腕に寄り、此膝の上に唾るべしと の給ふ御聲心身にひゝく度々、何處の誰れ樣ぞ斯くは優しの御言葉と伏拜む手先ものに觸れて魂我れにかへれば苦熱その身に燃ゆるが如かりし。

斯くて眠りつ覺めつ覺めつ眠りつ、今日ぞ一週といふ其午後より我れと覺えて粥の湯のゆくやうに成りぬ、やかましけれども心切あふるゝ佐助翁の介抱、おそよが待遇、いづれもいづれも心づきては涙こぼるゝ優しの人々に、聞けば病中の有樣の亂暴狼藉、あばれ次第にあばれ、狂ひ放題くるひて、今も頷に殘るおそよが向ふ疵は、我が投つけし湯呑の痕と說明れて、微塵立腹氣もなき笑顏氣の毒に、今更の汗腋下を傳へば後悔の念かしらにのぼりて平常の心の現はれ

ける我れ恥かしく、さても如何なる事をか申たる、お前様お二人のほかに聞かれし人はなきかと裏どへば佐助大笑ひに笑ひて聞かせたしとても人氣のござらねば耳引たつるは天井の鼠か壁を傳ふ蜥蜴、我々二人にお嬢様をおきては此大伽藍に犬の子のかげもなく、一年三百六十五日客の來る事なく客に行く事なく、無人屋敷の夫れに心配はなけれども氣の付かれなば淋しさに堪へがたく、今までの夢なりし代りに今宵よりは瞼ふつに合はず、寐られぬ枕に軒の松風、さりとは馴れぬ身に氣の毒やとあれば、其お嬢様と聞まするは何時も枕邊にお出たるお人か、いかにも其通りと言はれて、さらば夢にも非ざりけり。

現か、優しき御聲に朝夕を慰さめ給ひしは、夢か、御膝に抱き給ひしは、正氣づきゆく日數にそへて、目前お蘭さまと物いふにつけて、分らぬ思ひは同じ處を行廻り行めぐり、夢に見たりし女菩薩をお蘭さまと爲れば、今見るお蘭さまは御人かはりて、我れに無情とにはあらねど、一重隔ての中垣に、きつとして馴れがたき素振は何として御手にすがらるべき、何として御膝にのぼらるべき、悲しき涙を拭へと仰せられしお袖の端の端のはしにも我が手のもしも觸れたらば恥かしく恐ろしく我身はふるへて我が息はとまりぬべく。總じて夢中に見へし女は嬉しく床しくなつかしく、親しさは我れに覺えなけれど母のやうにも有けるを、現在のお蘭様は懐かしく床しきほかに恐ろしく怕きやうにて身も心も一つになどと懸けても仰せられん事か、見たりしには異なる島田髷に、美相は斯くぞおぼえし夢中の面かげを止めて、御聲も斯くぞ有し朝夕の慰問うれしけれど、思へば此處も他人の宿なり、心はゆるすまじき他人の宿なり、いざゝらば行かん、此やさしげなるお蘭さまの許をも辭して。

(五)

さらば行かんと思ひ立しより直次郎、たばしも待たぬ心は弦をはなれし矢のやうに一ト筋にはしりて此まゝのお暇乞を佐助に通じてお蘭さまにと申上れば、てもさてもと驚かれて、餞を見給へ未だ其顏色にて何處へ行かんとぞ、强情は平常の時、病ひに勝てぬは人の身なるに、其やうな氣短かはいはで心靜かに養生をせであらんやは最初よりいひしやうに此家には少しも心をおかず遠慮も入らず斟酌も無用にして見かへすやうな丈夫の人になりて給はらば嬉しかるべし、袖すり合も他生の緣と聞くを假初ながら十日ごしも見馴れては他處の人とも思はれぬに歸るに家なしとかいひし一ト言の怪しきを思へば、いづれ普通ならぬ悲しき境にさまよふにこそ、我れも見給ふ通りの有様になれゆく邸の末はいかならん、はかなき身にもよそへられて彌

々おもはるゝは浮世の涙にもまれゆきて漂ひつかれし人の上なり、何も女の力たらで談合に甲斐なしとも、同じ心は榮花にあきし世の人よりも持つ物ぞや、我れに遠慮あらば佐助もありそよもあり、あの年涙のよるほどには稽古もつみて世渡りの道も知らぬではなく、夫こそ相談の相手にもなるべし、家は化物屋敷のやうなれど人鬼の住家でもなければ、さのみは物恐ぢをし給ふなと少し笑ひてお蘭さまの仰せらるゝは我が意氣地なくくだらなき奴を見ぬき給ひてなぶり給ふにや、賊に我れは此處を離れて何處へ行かん目的もなく、道にて病まば能れかは助けん其まゝの行倒れと、我身の弱きに心さへ折れて、恥かしけれど直次郎はじめの勢ひには似ず強てもとは言はざりけり。

老夫婦は猶もお蘭樣が詞の幾倍を加へて、今少し身體のたしかになるまでは我等が願ひても此家に止めたしと思ひしを、嬢さまよりのお言葉なれば、今は天下はれてのお食客ぞや、肩身を廣く思ふ事をもなし此邸の用をも助けて大に働くがよかるべし、若き者の愚圖愚圖と日を送るは何よりの毒なればとて身にあふほどの用事を彼れ是れと宛がひて、家内の者のやうにあつかはるれば、それに引かれて氣の毒も薄く、一日二日三日四日、さらばお詞にあまへてとも言はねど、やう〳〵に根の生へて我れも分らぬ日を何とはなしに送りぬ。

さしも廣かる邸内を手入れの屆かねば木はいや茂りに茂りて、折しもあれ夏草處得がほにひろがれば、忘れ草志のぶ草それ等は論なし、刈るも物うき雜草のまげみをたどりて裏手にめぐれば幾抱への松が枝大蛇の水にのぞめる如くうねりて、下枝はぬるゝ古池の深さ幾ばくぞ、昔しは東屋のたてりし處とて、小高き所の今も餘波は見ゆめれど、まやの餘りも淺ましくあれて、秋風ふかねど入日かげろふ夕ぐれなどは獨りたつまじき怪の心さへ呼おこすべく、見渡す限り物すさまじき宿に、さらでも沈みがちの直次郎、明けぬれど暮れぬれど淋しき思ひは滿身をおそひて彌々浮世に遠ざかるやうなり。

月にも暗にもをかしきは夏の夜といへど斯る宿の夕月よ、五條わたりの軒のつまならば夕がほの猶も花々しかるべき、お蘭さまの居間といへるは廊下いく曲りはるかに放れて、獨りや物思ふよべど答へも松風の音ものさわがしき奥の奥の奥座敷なり、直次は老夫婦と共に玄關近き處にあれば一家のうちながら自らの隔てに病中とは異なりて打とけて物いふ事も少なく、佐助おそよとても嬢樣をば神樣のやうにいづきまつりて、大事に大事に大事に、我が命はよしや芥の捨てもせん、此御爲ならばと忠義は然る事ながら、唯おそれて惶みて、此處に盛りの名花一木ちらさじ折らさじと注連引はへて垣の外より守るが如く馴れての睦みのあらざれば直次もい

つか引いれられて、我れは食客の上下相通の身ながら、さながらお主様のやうにぞ覺えける、されば月の頃の夕納涼とて團扇かた手に浮世物がたり昼たからかと畫の暑つさを若竹の葉風に拂ひて蚊遣の烟り空になびかする輕々しきすさびもあられば、何として分るべきお蘭さまの人となりも此家の素性も、唯雲をつかむやうの想像に虚實は知らず佐助おそよが物がたりを加へて、僅かに松川何某といひし財産家の浮世にはづれ易き投機にかゝりて、花を望みし鋏の白雲あとなく消ゆれば、殘るはお蘭様のお身一つと、痛はしや背負ひあまる負債もあり、あはれ此處なる邸も他人の所有と唯これだけを曉り得ぬ。

（十八）

庭草におく露玉をつらねて吹風心地よきある朝ぼらけのこと、おらん様いつより早くお起きなされて、今日は父様の御命日なればお花は我れが剪りて奉らんとて花鋏手にして庭へ下りらるゝに、撫子ならば裏の方が美くしとて直次も續いて跡を追ひぬ。

いつぞは問はんと思ひし此處の様子をお蘭さまが口づから聞くよしもやと直次郎、例に似ず口輕に物いへばお蘭さまも機嫌よげにて、早百合撫子あれこれの花は剪りて後も我が庭ながら物

めづらしげに見あるき給ふ嬉しさ、直次は何氣なき體にて今日のお志しは御父上様とか、お前様は幾歳にて別れ給ひしぞと問へば、汝も早くよりの一人者とや我れによく似し事かなとはほゝゑまる。

此坂を下りて彼方へ行て暫時やすまん、つかれては話しも厭やなればと仰せあるに、さらば歸り給ふか、厭々、今志ばし遊ばんとて苦なめらかなる小道を下らるゝに、おあぶなしと言へば氣の毒なれど其肩をかし給へとてつと寄りて此處を下りぬ。

下りて出るは例の池の岸なり、木の切株の平らなるに座を拂ひて此處にお休みなされよと言へば、嬉しき事よの今日は弟の介抱を受くるやうなり其方も此處へ休まばよきにと半分を讓らるれば、何として勿體もなき事と直次は前なる枯草の中へうづくまりぬ。

其方も早くに二た親とも世をさりしとか、我れも母なりし人の顔はまらで、育ちしは父上の手一つなれば、戀しさなつかしさは又一倍に覺ゆるぞかし、平常はともあれ由緣ある日はこと更に思ひ出られて、紛らさんとても氣の紛れぬは今日なり、其方にも其覺えは有るべしとあるに、誠に其通りとて直次も涙ぐまれぬ。さてもお父様は幾年の前にか失せ給ひし、お前様の親御様なれば御年もまだお若く有しならんと問へば、いや若しといふほどにはあらず、別れしは

八年の前、おもへば夢のやうな別れ成りしとあるに、さらば御病氣は俄の病ひにてや有りしと疊かけて問へば、何の病氣かは、我が父は是れ此池に身を沈め給ひしなり。

直次が驚愕に背ざめし面を斜に見下してお蘭樣は冷やかなる眼中に笑みを浮かべて、水の底にも都のありと詠みて帝を誘ひし尼君が心はさらず、我が父は此世の憂きにあきて何處にもせよ靜かに眠る處をと求め給ひしなり、涙は表面にさはぐと見ゆれど思へば此底は靜なるべし、世の憂き時のかくれ家は山邊も淺し海邊もせんなし唯この池の底のみは住よかるべしとて靜かに池の面を見やられぬ。

吹風松の梢に高く音づれば、やがてさゝ波池の面におこりて草のそよぎも後の見らるゝにお蘭さまは猶たゝんともし給はず、直次は何故そのやうにかしこまりてのみ居るのぞや我れ許ならで汝も何ぞ話して聞かせよと仰せらるゝに、いよ〳〵詞のふさがりてさしうつむけば、困りし人よ女のやうな男と笑はれて、今更消えぬ心の恐れも顏色に出て笑るゝにや、我が意氣地なきに比べてお蘭さまは何れほど強き心を持てば彼のやうに平氣に落つきてすら〳〵と物語をつづけらるゝならん我れは聞くのみにも膽の冷ゆるやうなるをと、物は言はで御顏を打守れば、思ひなしにや流石に色は青白くみゆ。

さりながら此はなしは他人に聞かすまじきぞや、物いひさがなきは世のならひながら親のことなれば口惜しきぞかし、汝とてもこれを知りては此處は厭やとおもふやうに成るべきか、さらば話すのでは無かりしにと少し景色のかはりて言へば、何として何として、其樣なこと思ふて成りませうや又口外などはもとよりの事、夢さら御心配なされますなといへば、誠に我が弟同樣におもふ心易だてより底の見えるやうな事聞かせし恥かしさ、何も聞ながしにし給へ、さらば行かんと立あがるに、花は我が持ちて參らん、いや夫れよりは手を助けて給はれとて、例の脇道にかゝりし時まろく美くしき手を直次が肩にかけつゝ、小作りに見ゆれど流石に男は丈の高きものかな、汝は幾歳ぞや、十九か二十か我れに比らべてよほどの弟とおぼゆるに、我れはまあ幾歳ほどに見ゆるぞや、されば一ッ二ッの姉君か、何として何として、すがれと云ふ三十は頃てほどなき二十五といふ、それは誠か、何たる御若さといへば、褒めるのかや誹るのかやとて御顏あかみぬ。

(七)

女子は温順にやさしくば事たりぬべし、生中持ちたる一節のよきに隨ひてよきは格別、浮世の

浪風さかしまに當りて、道のちまたの二た筋にいざや何處と決心の當時、不運の一煽りに炎あらぬ方へも燃えあがりては、お釈迦さま孔子さま兩の手を取らへて御異見あそばさるゝとも、無用のお談氣お置きなされ、聞かう聞かぬと振のくる顔の、眼に涙はたゝゆるとも見せじこぼさじ是れを浮世の强情我慢といふぞかし、天のなせる麗質よきは顔のみか、姿とゝのひて育ちも美事に、斯くながら人の妻とも呼ばれたらば打つに點なき潔白無垢の身なりけるを、はかなきはお蘭の身の上なり、天地に一人の父を亡なひて、あかも病ひの床に看護の幾日、これも天壽と醫藥の後ならばさてもあるべし、世上に山師のそしりを殘して、あるべき事か我れと我が手に水底の泡と消えたる原因の罪はと數ふれば、流石に天道是非無差別といひがたけれど、口に正義の髭つき立派なる方樣のうちに恐ろしや實の罪はありける物を、手先に使はれける父が身はあはれ露拂ひなる先供なりけり、毒味の膳に當てられて一人犧牲にのぼりたればこそ殘る人々の枕高く、春のよの夢花をも見るなれ、さては恩ある忘れがたみに切めては露の情もあるべきを、あれゆく門に馬車あとたえて行かば恐ろし世上の口と、きたなき物は人心ならずや、邪峽の水の木の葉舟かゝる流れにのりたるお蘭が、悲しさ怕さ口惜しさの乙女心に染込て、よしさらば我れも父の子やりてのくべし、惡ならば惡にてもよし、善とはもとより言はれまじき

素性の表面を温和につゝんでいざ一と働き、仆れてやまば夫れまでよ、父は黄泉に小手招きして九品蓮臺の上品ならずとも、よろしき住家は彼の世にもあるべし、さらば夢路に遊ばんと決心、これさら〳〵好きに狂ひし浮かれ心かは、時につられて涙は腦に片頬笑みしつ、見あぐる軒端日毎にあるれど、まのぶの露を哀れ風流とうそぶく身は人ぎらぬあはれ此のうちにあり。

爲すまじきは戀とや、色なる中に忍ぶ文字ずりいざ陸奥にありといふ關の人目に途絶えを詫るは優しかるべし懸けつ懸けられつ釣糸のくるしきは欲よりの間柄なり、一人は賊の心より暮ふともよりあはねば是れも片糸の思ひやすらん、其頃番町に波崎漂とて衆議院に美男の聞えあるる年少議員どのありき、遠からぬ縣より撰出の當時、やかましかりし沙汰の世のならひとて班にはならねど、秘密は松川との間にかくれて今日の財産も半は何より出しやら、世にある頃は水魚の交り知らぬ人なく、よき聟得んと洩らせし一と言を耳に殘せる人もあれど、浮雲おほふて乍ち昏し扶桑の影、なしといはゝ夫れまでなる外國あるきに年月を經て、歸りしは其人すでに亡せるの後、今日の羽風に昔しの座を拂ひて、又ぞろ釣り出すや其節のゆかり、官臭とや、ら女子の知らぬ香のする堂には駙馬の君とて用ひも輕からず、演說上手に人をも感動さするよ

し、夫れもまかなり口車よく廻らでやは、もしやに引かれて二十五の秋まで哀れお蘭が一人寢の枕に結ばぬ夢の行方はこれなり、誰が爲守る操の色ぞ松の常磐もかくては甲斐なき捨られ物に、一身つく〳〵と觀じては浮世いや〳〵黒染の袖に嵯峨野は遠し此都ながらの世すて人ともならんは常なれど、憎くき男心におめ〳〵と秋の色ひとり見て、生悟の經佛に爲事なしのあきらめ、夫れも嫌々、とても狂はゞ一世を闇にして首尾よくは千載の後まで花紅葉ゆかしの女に成りおほせ、世來ずば一時の榮花に末は野どなれ山路の露と消ゆるもよし、我れながら女夜叉、本性さても恐ろしけれど、かく成りゆくはこれまでの人なり、悔まじ恨まじ浮世は夢と、これや戀をしをりに淺ましの觀念、おそろしきは涙の後の女子心なり。

(八)

此夏もくれて秋は荻の葉に風そよぐ頃も過ぎぬ、松川屋敷の月日はいかに流るゝか、お蘭さま佐助夫婦、直次の上にも變りたる事なく、唯としごろ熱心成し醫學の修業を思ひ絶えたるのみぞ此男の變動なりける。

何うでもやりまする、骨が舍利になるともやりまする、精神一到何事か出來ぬといふ筈はなく、

我れも男なれば言ひたる事を後へは引がたし、これまでも散々村の奴原にも侮どられ、此都に出ても輕蔑されて出來ぬものに言落されましたれば猶さらの事、美事通して見せねど骨も筋もなき男でござります、我れは其やうな骨なしに見えまするかとて、何時も此話しの始まりし時に青筋出して疊をたゝくに、はて身知らずの男、醫者に成るは芋太根作りたてたるとは壁が違ふぞとて、佐助は眞向より强面の異見に、とても出來ぬ事はよして仕舞へと言ひける、お蘭さまはつく〳〵と聞きて、可愛さうに叱からずともの事なり、それほど思ひ込んだる事なれば出來まじとは言はれねど、荻の友ずり殖をして痩せるは世のならひなれば隨分と人數も多し、年毎にむつかしくはなる、まかも學費の出どころが無くば一段と難氣ではなきか、夫れが精神一到と其方は言ふか知らねど、其方の寶の潔白沙汰は今の世の石瓦、此やうの事は口にするは厭なれど丸うならねば思ふ事は遂げられまじ、その會得がつきたらば隨分おもふ事は貫くが宜けれど、何うやら其邊か六ヅかしくは無きかと仰せられける。

國を出しより此方こゝろは一途にはしりて前後を省みず、どうでも貫くと言ひし舌の根我れと引きたくはなけれど、打たれて擲かれて輕蔑されて、はては道ゆく車の輪にかけられて、今一歩の違ひにては一生の不具にもなるべき負傷の揚句、あはれ可愛やと救ひあげられし大恩の主

様とても浮世は同じ秋風に、門樞あれて美玉ちりに隠くるゝ明けくれのたゝずまひ悲しく、天道はどうでも善人に與みし給はぬか、我が祖父、我が母、我が代までも飛ぶ虫一つむざとは殺さず、里の小犬が飢渇のあはれは、我が一飯を分てもの心、さりとは世上に敵をもうけて憎まれ者の居處なしにならんとは知らざりし、今更世上に媚をうりて初一念のつらぬかるゝとも夫れまでの道中いやなり、いやなり、とても辛棒なりがたきは泥草履つかんで追從の犬つくばひそれで成り上りて醫は仁術と勿體ぶる事穢なし、今は此業もやめにせん、やめになすべし、思ひ絶えて仕舞ふべし、我れに浮世の能なし猿にはなるとも穢なき男には得こそなるまじ、それよと断念の曉きよく再度び口にも出ださず成りぬ。

さして行く處はなし、世間は仇なり、望みの空に歸してより此一身を如何になすべき、詮方なき身のすて處いづこと尋ぬれば、雛は荒れて庭は野らなる秋草の茂みに嵐をいたむ女郎花にも似たるお蘭さまが上いとしと思ひぬ、もとより我れは愚人なり、お蘭さまは女子なれども計りがたき意志の、我れ弱虫の類にはあるまじきなれど、強しといふとも頼むに人なき孤獨の身に大厦の一木何として支へん、佐助おそよとても一身この君にさゝげ物の忠ならんが我が目より見れば未だ幼き御身の女子様を主に持ちて、吹かば散るべき花前の嵐に掩ふ袂の狹

さ狹さ、彼の人々は何れ重代の縁もあるべし、我れは昨日今日の恩なれども情の露の甘きにぬれては何れに年の長短を問ふべき、口廣けれども我れはお蘭様に命と申す、此の一言を金打にして、心に浮世のさま〳〵を思ひ断ちたれば生死は御心のまゝにと、言はねども其色あらはれぬ。

人の心は怪しき物なり、直次がお蘭様を思ふほどに佐助夫婦が直次に對する憐れみは薄く成りぬ、見ず知らずの最初抱き入れて介抱の心切はつくろひなき賊實なれば今とて更に衰るよしはなけれど、一にもお蘭さま、二にもお蘭さまと我が物のやうに差出たる振舞、さりとは物知らずの奴かな、御産湯の昔しより抱き參らせたる老爺さん、心におもふ事の半分は殘して御意に隨ふは浮世の禮なるを、宿なし男の行仆を救はれし恩は知らで我がお嬢さまが弟顔する憎くらしさ、あのやうの物知らずは真向から浴せつけずは何事も分るまじとてつけ〳〵と憎くまれ口はいかりなく、ともすれば此間に年甲斐もなき爭ひの火の手もえあがりて、何れに團扇のあげがたきお蘭さまが一人氣をもむ事もありし。

(九)

秋は夕ぐれ夕日花やかにさして、塒にいそぐ烏の聲さびしき頃、めづらしき黒鴨の車夫に狀箱もたせて波崎さまよりのお使ひと言ふが來たりぬ、折しもお蘭さま籬の菊に日映りのをかしきを御覽じけるほどなりしが、おそよが取次ぎて珍らしき、お便りとさし出すに、をかしや白妙の袖にはあらでと受取りて座敷へ歸られける、文は長く長く一丈もあるべし、久しき途絶えを恨めしとも仰せられぬは愁らからずや、俗用走げく心は君が宿に通へど浮世は蘆分小舟ぞかし、今日は暇を得て染非の閑居に獨りかき籠りし、理由は自から知り給へ、人目の煩ひなく思ふ事をも聞えたく、我れより其邸を訪はんは見る目かぐ鼻うるさし、此車にて今より、と能書の淵墨その昔ならば魂も消えぬべし、これ見よおそよ、波崎さまは相變らずお利口なりとて左のみは喜びもせぬお蘭が顏を不審氣に守りて、お前さまは其のやうに落つきてお出なされど避逅の御暇に先方さまは飛び立つやうなるは知れた事、少しも早くお支度をなさりまし、お車も待て居りまする物をと急がするに、あれ老媼は我れに行けと言ふか、さりとは正直者と笑ひて返事を書く。

文の便りの度々に釣られて萬一やと思ひしは昔し、今日のお蘭は其のやうな優しきお孃樣氣を捨てたれば古手の嬉しがらせを惶みて御別莊に御機嫌をうかゝふまでの恥はさらさじ、つれなしとても一向のかき絶えは世にあるならひと歸らめもある物を、憎くき男の地位にほこりて何時まで我れを弄ばんとや、父は山師の汚名を着たれど未だ野幇間の名は取らざりし、戀に人目を去のぶとは表面、やみ夜もあるものを千里のかち跣足に誠意は其時こそ見ゆれ、此家より遠からぬ染井の別墅に月の幾日を暮すとは新聞をまたでも知るべき事なり、殊更の廻り道して我が門をよそに、止みがたき時は車を飛ばせて女子一人に逢はじの悪念、お笑止や我れ故天地を狹しと思すか、あまりの窮屈にいざ廣々とならんには我れを欺して君樣いとしと言はせ、何も時世とあきらめ給へ、正しき妻とは言ひ難けれど心ば後の世かけてなどゝ、我れを何處までも日陰ものゝ人知らぬ身として仕舞はゞ、前後に心ざはりなくて胸安からんの所爲とは見え透きたり、流石に御心にはかゝりて何時ぞは仇する女ぞと思し召たるか、お道理の御悪念唯にあるべき我れかは、裏屋の夫婦が倦かれしとは事かはれば、御身分から世の攻撃に居場處のなき其やうの恥はお互ひの事見せ申まじ、おのづからの恨みはゆる〳〵と、人こそ知らぬ心の底には冷やかに笑ひぬ。

返事はたゞ折ふしの風邪に取みだしたる姿はづかしく、中々の御目通りに倦かれ參らする事つらければ、免し給へ、又こそとて、何もうはべは美はしくして使ひを歸しぬ。

波崎が車は此門を過ぐる事あり、直次が引かれし其夜の車も提燈の紋は澤瀉なりしに、今日の車夫も被布に澤瀉の縞紋ありけり、あれとこれとは同一か別物か、直次は此使ひの來たりし時より例になき事なれば不審しき思ひに心を止めて、終始眼をそゝぎけるが、歸る後姿を見送りし途端、不審澤瀉のぬひ紋我れ知らず目に映りぬ。

あれは何處よりの使ひと佐助に問へば、さてもよく根堀り聞たがる男ではなきか、人の家なれば使ひの來る事もありと無情のこたへに、左樣いはれては返へずに詞も無けれど何處からの使ひだ位は聞かせて呉れても仔細なき筈、喧嘩かひのとげ〳〵しき言葉ならでもと下手に出れば、はて世樣などの聞いて益はなき事、嬢樣への文なれば理由は嬢樣ならでは知りがたし、波崎樣とて新聞にも見ゆる識員さまよりの使ひといふに、それは御親類でゝもありや、此邸へお出はなきやうなるが我が參らざりし以前はお出に成りし時も有しかと問ふに、夫々それがくどし、聞いて何にすると笑はれて、何にもせねど被布の紋が彼の夜の紋に同じなれば何か心にかゝりて聞きたき心持と語るに、さらば彼の車夫を捕らへて小指の一つも斬る心成しか、恐ろしき執念の奴、前世は蛇でも有しやら、さかし其夜の恨みを忘れぬとは感心にて頼母しゝ、恩をば疾くの昔しに忘れたるやうなれば、よもや恨みの性根もあるまじと思ひしに、流石なり感心の男

と折ふし何の癖に障りしやら、後に思はゝ恥かしかるべき事を、舌の動くまゝに言ひけり、いつもならば泡を飛ばして口論もすべき直次郎が無言に終りし屈托のほどは其夜お關さまがお膝もとに、泣きの涙の白狀いつはりなく、立聞かば共に布子の袖やぬぼらん此男の影法師うすく成けるをば更に夢にも知らざりけり。

(十)

あはれ三十一文字の風雅の化粧はつくるとも、いつ失せにけん幼な心の誠意は愚に似し物なりけり、其夜ふけたる燈火のかげにお關樣を驚かして、涙にぬれし眼のうち唯事ならず、疊に兩手をきつと畏まりし直次の體、これは何事とお關樣心もとながりて、遠慮なき我れに遊酌は無用ぞ、思ふ事はありのまゝに告げ給へと優しき問ひに保ちかねてはら〳〵と膝に玉をば散らしけるが、思ひ切りて、我れにお暇を下さりませと一ト言、あと先もなければ何の事とも思はれず、又物爭ひの餘波ではなきか、いつも言ふ年寄りの一徹に遠慮なき小言などを心にかけては一日の辛棒もなるまじく、彼男とても惡る氣は微塵もなき人なれば、其方の爲よかれとての言葉ならんを苦にはすまいもの、まあ何事の起りにて其やうに腹は立てしと例の通り慰めらるゝ

に、否、否、否、何も言はれましたる事もなければ、喧嘩はもとよりの事、唯我が身に愛想が盡きましたれば、最早此世に居る事が嫌に成りました、とて疊にひれ伏して泣ける。

直次其方は死なうと思ふや、賊か、賊か、と膝を直して問ひ給ふに、嘘には死なれ申まじ、いつぞや奥庭に遊びし時、お池に親旦那が御最期を承りしが、此底のみは浮世の外の靜けさならんと仰せられし、あれをば今に忘れませぬ、搔き廻はさるゝやうの胸の中は、明けても暮れても暮れても明けても、寸の間のたゆみなしに靜かなる時もなく、生れ落しより以來不幸不運の身なれば、一生を不運の内に終りたらば我が本分は盡きまするやら、お世話に成しは今で幾月、嘘では御座りませぬお前樣は我が爲の大恩人、お袖のかげに隱くれてより面白しと思ふ事もをかしと思ふ事も有ましたるなれど、これが世に出で初の終り、我れは明らかに悟つた事のあれば、もはや此嫌やな世には止まりませぬ、さりながら、未練のやうなれど、情深きお前樣に無言で此世を去りまする事の愁らく、お禮は澤山申たきなれど口が廻らねば是れも口惜しう御座ります、お前樣はいつ〳〵までも無事に御出世をなさりませ、我れは此世には愚人に生れましたれば御爲にと思ふ事も叶はねど、魂はかならず御上を守りまするとて、涙に咽んで語り出る言の葉かなし。

我れは何故に君の慕はしきかを知らず、何故に君の戀きかを知らねど、一日は一日より多く、一時は一時より增りて、我心は君が胸のあたり〳〵引つけらるゝやうにて、明け暮れ御姿を見、おん聲を聞き、それに滿足せば事なかるべけれど唯々心は火の燃るやうにて我れながら分らぬ思ひに責めらるゝ果々、靜かに顧みれば、勿體なや恥かしき思ひの何處やらに潛みて、夫故の苦とさとりたる今、此身を八つ裂にして木の空にもかけたきは今日の夕ぐれの御使ひを君が御緣の方よりと知りてなり、申すまじき事なれど我れは賊に妬しと思ひぬ、口惜しき事に見てけり、さかも見ねば宜かりし車夫の被布に澤瀉の紋ありしかば、我れは殆んと神經病のやうなれど彼の夜の車上にちらと見とめし薄髭のありける男を、その、波崎とか言へる奴、國會議員なりとか聞けば定めし世には尊ばるゝ人ならんが其奴のやうに思はれて、これは妄念と幾度おもへども腦をさらねば其甲斐もなし、大恩ある君が戀人を恨めしと思ふ我れは即ち君が仇に成りしなり、斯くて此思ひの增りゆかばいかにせん、恐ろしと思ひしより我身は賊に捨てたく成りぬ、我が身の死するは君に害を加へじとてなり、よしや我が想像のあやまりにて今日の文には聞くあらずとも、すでに我が心の腐りは去るく、消からぬ思ひの下に忍べる上は我れは最早大罪を犯せる身、表面はいかに粧ひて人目をつゝむとも明暮れ君につきまとふ心の、おも

へば恥かし我れは餓飢道のくるしみに美妙の御聲も身をやく炎と成ぬべし、さては人心の頼みなさ、我れながら今日までの經歴をおもふにも時に隨ひて移りゆく後は我れにも有らぬ我れに成りて、いかに恐ろしき所爲をなすべきか、今亡する身の御恩は萬分が一を送らねど、切めては害を加へ參らせじとのすさび、憎くき奴とは思し給ふとも死せたる後は吊らはせ給へとて、眞心よりの涙に詞はふるへて、疊につきたる手をあげも得ず、恐れ入つたる體、あはれとはたれをや。

（十一）

戀をうきたる物とは誰れか言ひし、戀に誠なしとは誰れか言ひし、明日までの述懐我れながら恥かし、直次は我れを左ほどに思ひしか、我れは其方を思ふ事の夫れほどには非らざりしぞかし、我れは其方を哀れとは思ひつれど命をかけても可愛しとは思はざりし、今日の今こそ其方は誠に可愛き人に成りぬ、誠ぞや、今日の今までお關に口づから戀ひしといひし人も無ければ心に染みて一生の戀はせざりしなり、浮世を知らざりし少女の昔し誘はれしは春風か才智、容貌それ等の外形に心を亂して今日の壹間の文の主、波崎といふ人にも逢ひき、斯くいはゝ我れ

を不貞と思はくも愁らけれど、守らぬは操ならで班女が團の扇の色に我れ秋風のたゝれし身なり、捨てられし人に恨みは恐痴なれど、愁らき浮世に我れは弄ばれて恐ろしとおぼすな、いつしか心に魔神の入りかはりしなるべく、君の前には肩身も狭き我れは悪人の一人なるべし、夫れをも更に厭ひ給ふまじきか、恐ろしとは覺さぬか、悪人にても厭ひ給はずば、悪魔にても恐ろしと覺さずば、今日より關が心の良人に成りて、關をば君が妻と呼ばせ給へ。

さりながら此の世の縁はなき物と諦らめ給へ、我れも諦めぬべし、たま〳〵嬉しき人の心を知りながら、これは我が口より言ひ出がたき事、心ぐるしさの限りなれど浮世に不運の寄合とおぼせかし、我れを誠に可愛しとならば其命を今此場にて賜はるまじきや、不仁の詞、不慈の心、世の常の中にても然る事は言はれまじきに、まして勿體なき心の底を知り抜たる今、此ようの情なき願ひに血を吐く思ひの我が心中を汲み給へ、今日の文の主は我が昔しの戀人、今よりは仇に成りて我が心のほだしは彼れのみ、斷たずば止むまじき執着を是れをも慈といふかや、我れは知られど憎くきは彼の人なり、如何にもしての恨みは日夜に絶えねど我が手を下していざとおらんは、察し給へ、また後に入用のある身の上つらく、欲とはおぼすな父が遺志のつきたさになり、今二十五年の我が命に代りて御身を捨て物に暗夜の足場よき處をもとめていかやう

にも爲して賜はらずや、此やうの恐ろしき女子に我れは何時より成けるやら、死なるゝ身ならば我れも死にたけれど、常に涙は見せし事なきお蘭さまの繻袢の袖にぬぐふ露あり。

君が恨みの澤瀉は正しく其人と我れはたしかに思ふぞかし、染井の宿に飛ばす車の折から惡るき我が門前にての出來事なれば、知られて成るまじの千里一と飛びに負傷は正しく其人の處爲なれど、原因は我れを恐るゝよりの事、おもへば何も我が罪なりし、君をば我手に救ひしにはあらで、言はゞ死地に導くやうの成行、何もこれまでの契りと御命を賜はれや、さりながら斯くいふ君の運つよくは逃るゝ丈のがれて美事その塲をさへ外れらるれば夜にまぎれて此邸までの途中に難をさけ、門より内に入れば世は安泰なり、今知る通りの人氣のなきに、出逕入るものとては犬くゝりに犬の子のかげもなく、女子あるじなれば警察の眼にもかゝるまじ、ともかくもして逃がれんと思しめせと叮きぬ。

詞はなくて聞居たりし直次郎、もはや何も仰せられますな、會得がつきました、偽りにても此世に思ひかけざりしお言葉を聞きて殘る恨みも今はなき身、さらでも今宵は過ぐさじの決心でありしを、御處望にて仆れんは厭ふてなき事、美事にやつて御目にかくべし、今日までは思ひ立しことの何事も通らで浮世に意久地なしの鏡なりける身なれど、一心おもひ込たるお前樣がお聖がゝりにて、身をすて物に此度の仕事は天晴れ直次も男なりけりとお心だけに賞めて頂かば本望、其塲に仆れても捕へられての絞木の上にも思ひ殘す事は御座りませぬ、唯恨めしきは逃れらるゝ丈のがれて來よとの御言葉、さりとはお情とも申まじ、逃れんと思ふ卑怯にて人一人やられん物か、我れは愚人なれば世の利口ものが處爲は知らず、相手が仆れるか我れが死ぬか、二つに一つの瀬戸際に我れ助からんの汚なき心にて、後髮を引かゝる物ありては、潔き本望は遂げらるまじ、先の手に殺されなば夫れまで、仕遂げて後に捕へられぬとも御名は決して出すまじければ、案じ給ふな、罪は我れ一人なり、首尾よき曉に我れ命冥加ありて、其塲をのがるゝは萬一なれど然りとも再びお顏をば見申さじ、いかなる事より罪の顯はれて最惜しき君に連累の咎口惜し、何も直次は今日限りのお暇この世に無き物と思しすてられて事の成否は世の取沙汰に聞き給へ、御緣もこれまで我れはいさぎよく死にまする、と思ひ定めては涙もこぼさねど、悄然とせしかげ障子に映りて、長く、長く、長く、お蘭が身のあらん限り此夜の事忘れがたかるべし。

(十二)

直次はその夜の暗にまぎれて松川屋敷を出でぬ、明けて驚きし佐助夫婦が、常は兎角に小言もいひけれど如何に定めて斯かる仕義と流石に胸安からねば評議とり〳〵に、おそよは朝な〳〵手を合する神々にも心得ちがひの無からんやうにと祈りぬ。

ほどを隔てゝ冬のはじめつ方、事は番町の波崎が本宅前に起りぬ、何某の大會に幹事の任を帶びて席上演説に喝采わくやうなる中を終れば、醉のまぎれの車上ゆる〳〵と半は夢をのせて歸り來たりし表門の前、乍ち物かげより跳り出たる男の母衣に手をかけて後さまにと引けば、たまらず覆へる處を取つて押へて首筋かゝんとひらめかす白刃の去りとは鈍かりしか類先少しかすりて、薄手の疵に狼藉の呼聲あたりに高く、今はこれまでとや逃げ足いつ方に向ひしか、たちまち霞とかげを消して誰れとも分らず成ける、明日は新聞に見出しの文字とと〳〵しく、ある黨派の壯士なるべし、何々倶樂部の誰れとやら嫌疑のかゝりて其筋に引かれぬといふもあれば終ひには何物の業とも知れで一月の後には風説のあともなく成りぬ、疵は猶さら半月の療治に可惜男の直も下がらず、よし痕は殘るとも向ひ疵とてほこられんか可笑し、才子の君、利口の君萬々歳の世に又もや逭りそこねて身は日陰者の此世にありとも天地ひろからぬ直次郎はいかにしたる、川に沈みしか山に隱くれしか、もしくは心機一轉に人間に成しか、夫れより怪し

きは松川屋敷の末なり、此事ありて三月ばかりの後、門は立派に敷石のこわれも直りて、日毎に植木や大工の出入りもげきは主の替りしなるべし、されば佐助夫婦おらんも何處に行きたる、世間は廣し、汽車は國中に通ずる頃なれば。

(をはり)

大つごもり

(上)

井戸は車にて綱の長さ十二尋、勝手は北向きにて師走の空のから風ひゆう〳〵と吹ぬきの寒さ、お〻堪えがたと竈の前に火なぶりの一分は一時にのびて、割木ほどの事も大臺にして叱りとばさるゝ婢女の身つらや、はじめ受宿の老媼さまが言葉には御子様がたは男女六人、なれども常住家内にお出あそばすは御總領と末お二人、少し御新造は機嫌かいなれど、目色顔色を呑みこんで仕舞へば大した事もなく、結句おたてに乗る質なれば、御前の田様一つで半襟半がけ前垂の紐にも事は欠くまじ、御身代は町内第一にて、その代り吝き事も二とは下らねど、よき事には大旦那が甘い方ゆゑ、少しのほまちは無き事も有るまじ、厭やに成つたら私しの所まで端書一枚、こまかき事は入らず、他所の口を探せとならば足は惜しまじ、何れ泰公の秘傳は裏表と言ふて聞かされて、さても恐ろしき事を言ふ人と思へど、何も我が心一つで又この人のお世話には成るまじ、勤め大事に骨さへ折らば御氣に入らぬ事も無き筈と定めて、かゝる鬼の主をも持つ

ぞかし、目見えの濟みて三日の後、七歳になる嬢さま踊りのさらひに午後よりとある、其支度は朝湯にみがき上げてと霜氷る曉、あたゝかき寢床の中より御新造灰吹きをたゝきて、これこれと、此詞が目覺しの時計より胸にひゝきて、三百とは呼ばれもせず帶より先に襷がけの甲斐甲斐しく、井戸端に出れば月かげ流しに殘りて、肌を刺すやうな風の寒さに夢を忘れぬ、風呂は据風呂にて大きからねど、二つの手桶に溢るゝほど吸みて、十三は入れねば成らず、大汗に成りて運びけるうち、輪寶のすがりし曲み齒の水ばき下駄、前鼻緒のゆる〳〵に成りて、指を浮かさねば他愛の無きやう成し、その下駄にて重き物を持ちたれば足もと覺束なくて流し元の氷にすべり、あれと言ふ間もなく横にころべば井戸がはにて向ふ脛をたゝかに打ちて、可愛や雪はづかしき膚は紫の生々しくなりぬ、手桶をも其處に投出して一つは滿足成しが一つは底ぬけに成りけり、此桶の價なにほどか知らねど、身代これが爲につぶれるかの樣に御新造の額際に青筋おそろしく、朝飯のお給仕より睨まれて、其日一日物も仰せられず、一日おいてよりは箸の上げ下しに、此家の品は無代では出來ぬ、主の物とて粗末に思ふたら罰が當るぞえと明け暮れの談義、來る人毎は告げられて若き心には恥かしく、其後は物ごとに念を入れて、遂ひに麁想をせぬやうに成りぬ、世間に下女つかふ人も多けれど、山村ほど下女の替る家は有まじ、

月に二人は平常の事、三日四日に歸りしもあれは一夜居て逃出しもあらん、開闢以來を尋ぬたらば折る指に彼の内儀さまが袖口おもはるゝ、思へばお峯は辛棒もの、あれに酷く當たらば天罰たちどころに、此後は東京廣しといへども、山村の下女に成る物はあるまじ、感心なもの、美事の心がけと賞めるもあれば、第一容貌が申分なしだと、男は直きにこれを言ひけり。

秋より只一人の伯父が煩ひて、商賣の八百や店もいつとなく閉ぢて、同じ町ながら裏屋住居に成しよしは聞けど、六づかしき主を持つ身の給金を先きに貰へば此身は賣りたるも同じ事、見舞にと言ふ事も成らねば心ならねど、お使ひ先の一寸の間とても時計を目當にして幾足幾町と其志らべの苦るしさ、馳せ抜けても、とは思へど悪事千里といへば折角の辛棒を水泡にして、お暇ともならば彌々病人の伯父に心配をかけ、痩世帶に一日の厄介も氣の毒なり、其内にはと手紙ばかりを遣りて、身は此處に心ならずも日を送りける。師走の月は世間一昧物せわしき中を、と更に選らみて綾羅をかざり、一昨、日出そろひしと聞く某の芝居、狂言も折から面白き新物の、これを見のがしてはと娘共の騒ぐに、見物は十五日、珍らしく家内中との觸れに成けり、此お供を嬉しがるは平常のこと、父母なき後は唯一人の大切な人が、病ひの床に見舞ふ事もせで、物見遊山に歩くべき身ならず、御機嫌に違ひたらば夫れまでとして遊びの代りのお暇

を願ひしに流石は日頃の勤めぶりもあり、一日すぎての次の日、早く行きて早く歸れと、さりとは氣まゝの仰せに有難うぞんじますと言ひしは覺えで、頃ては車の上に小石川はまだかまだかと鈍かしがりぬ。

初音町といへば床しけれど、世をうぐひすの貧乏町ぞかし、正直安兵衛とて神は此頭に宿り給ふべき大藥鑑の額ぎはびかびかとして、これを目印に田町より菊坂あたりへかけて、茄子大根の御用をもつとめける、藩元手を折かへすなれば、折から直の安うて嵩のある物より外は棹なき舟に乘合の胡瓜、苞に松茸の初物などは持たで、八百安が物は何時も帳面につけた樣なと笑はるれど、愛顧は有がたきもの、曲りなりにも親子三人の口をぬらして、三之助とて八歳になるを五厘學校に通はするほどの義務もしけれど、世の秋つらし九月の末、俄かに風が身にしむといふ朝、神田に買出しの荷を我が家までかつぎ入れるを其まゝ、發熱についいて骨病みの出しやら、三月ごしの今日まで商ひは更なる事、段々に喰べへらして天秤まで賣る仕義になれば、表店の活計たちがたく、月五十錢の裏屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節が有らばとて引越しも無慘や車に乘するは病人ばかり、片手に足らぬ荷をからげて、同じ町の隅へと潛みぬ。お峯は車より下りて开處此處と尋ぬるうち、瓜紙風船などを軒につるして、子供を集めたる厭

菓子やの門に、もし三之助の交じりてかと覗けど、影も見えぬに落膽して思はず往來を見れば、我が居るよりは向ひのがはを痩ぎすの子供が藥瓶もちて行く後姿、三之助よりは丈も高く餘り痩せたる子と思へど、樣子の似たるにつか〳〵と驅け寄りて顏をのぞけば、やあ姉さん、あれ三ちやんで有つたか、さても好い處でと伴なはれて行に、酒やと芋やの奥深く、滯板がた〳〵と滯くらき裏に入れば、三之助は先へ驅けて、父さん、母さん、姉さんを連れて歸つたと門口より呼び立てぬ。

何お峰が來たかと安兵衞が起上れば、女房は内職の仕立物に餘念なかりし手をやめて、まあまあ是れは珍らしいと手を取らぬばかりに喜ばれ、見れば六疊一間に一間の戸棚只一つ、箪笥長持はもとより有るべき家ならねど、見し長火鉢のかげも無く、今戸燒の四角なるを同じ形の箱に入れて、これがそも〳〵此家の道具らしき物、聞けば米櫃も無きよし、さりとは悲しき成ゆき、師走の空に芝居みる人も有るをとお蜜はまづ涙ぐまれて、まづ〳〵風の寒きに寢てお出なされませ。と堅燒に似し滯淵圓を伯父の肩に着せて、さぞさぞ澤山の御苦勞なさりましたろ、伯母樣も何處やら痩せが見えまする、心配のあまり煩ふて下さりますな、夫れでも日增しに快い方で御座んすか、手紙で樣子は聞けど見れば氣にかゝりて、今日のお暇を待ちに待つて漸と

の事、何家などは何うでも宜こざります、伯父樣御全快にならば表店に出るも譯なき事なれば、一日も早く快く成つて下され、伯父樣に何ぞと存じたれど、道は遠し心は急く、車夫の足が何時より遲いやうに思はれて、御好物の飴屋が軒も見ばぐりました、此金は少々なれど私が小遣の殘り、麹町の御親類よりお客の有し時、その御隱居さま寸白のお起りなされてお苦しみの有しに、夜を徹してお腰をもみたれば、前垂でも買へとて下された、それや、これや、お家は堅けれど他處よりのお方が鼠負になされて、伯父さま喜んで下され、勤めにくゝも御座んせぬ、此巾着も半襟もみな頂き物、襟は質素なれば伯母さま悪けて下され、巾着は少し形を換へて三之助がお辨當の袋に丁度宜いやら、夫れでも學校へは行ますか、お清書が有らば姉にも見せてと夫れから夫れへ言ふ事長し。七歳のとしに父親得意場の藏普請に、足場を昇りて中ぬりの泥鰌を持ちながら、下なる奴に物いひつけんと振向く途端、暦に黒ぼしの佛滅とでも言ふ日で有しか、年來馴れたる足場をあやまりて、落たるも落たるも下は敷石に模樣がへの處ありて、堀おこして積みたてたる切角に頭腦ぶたゝか打ちつけたれば甲斐なし、哀れ四十二の前厄と人々後に恐ろしがりぬ、母は安兵衞が同胞なれば此處に引取られて、これも二年の後はやり風俄かに重く成りて亡せたれば、後は安兵衞夫婦を親として、十八の今日まで思はいふに及ばず、姉

さんと呼ばるれば三之助は弟のやうに可愛く、此處へ此處へと呼んで背を撫で顔を覗いて、さぞ父さんが病氣で淋しく愁らかろ、お正月も直きに來れば姉が何ぞ買つて上げますぞえ、母さんに無理をいふて困らせては成りませぬと敎ゆれば、困らせる處か、お峯聞いて呉れ、歳は八つなれど身躰も大きし力もある、我が察てからは稼ぎ人なしの費用は重なる、四苦八苦見かねたやら、表の鹽物やが野郎と一處に、蜆を買ひ出しては足の及ぶだけ擔ぎ廻り、野郎が八錢うれば十錢の商ひは必らずある、一つは天道さまが奴の孝行を見徹してか、兎なり角なり藥代は三が働き、お峯はめて遣つて呉れとて、父は蒲團をかぶりて涙に聲をあぱりぬ。學校は好きにも好きにも遂ひに世話をやかしたる事なく、朝めし喰べると馳け出して三時の退校に道草のいたづらじた事なく、自慢では無けれど先生さまにも褒め物の子を、貧乏なればこそ蜆を擔がせて、此寒空に小さな足に草鞋をはかせる親心、察して下されとて伯母も涙なり。お峯は三之助を抱き志めて、さてもさても世間に無類の孝行、大がらとても八歳は八歳、天秤肩にして痛みはせぬか、足に草鞋くひは出來ぬかや、堪忍して下され、今日よりは私も家に歸りて伯父樣の介抱活計の助けもしまする、知らぬ事とて今朝までも釣瓶の繩の氷を愁らがつたは勿躰ない、學校ざかりの年に蜆を擔がせて姉が長い着物きて居らりようか、伯父さま暇を取つて下され、

私は最早奉公はよしまするとて取亂して泣きぬ。三之助はをとなしく、ほろりほろりと涙のこぼれるを、見せじとうつ向きたる肩のあたり、針目あらはに衣破れて、此肩に擔ぐか見る目も愁らし、安兵衛はお峯が暇を取らんと言ふに夫れは以ての外、志しは嬉しけれど歸りてからが女の働き、夫れのみか御主人へは給金の前借もあり、それ〳〵と言ふて歸られる物では無し、初奉公が肝腎、辛棒がならで戻つたと思はれても成らねば、お主大事に勤めて呉れ、我が病氣も長くは有るまじ、少しよくば氣の張弓、引つゝいて商ひもなる道理、あゝ今半月の今歳が過れば新年は好き事も來たるべし、何事も辛棒〳〵、三之助も辛棒して呉れ、お峯も辛棒して呉れとて涙を納めぬ。珍らしき客に馳走は出來ぬど好物の今川燒、里芋の煮ころがしなど、澤山たべろよと言ふ言葉が嬉し、苦勞はかけまじと思へど見す見す大晦日に迫りたる家の難義、胸に落への病は殞にあらねどそも〳〵床に就きたる時、田町の高利かしより三月まばりとて十圓かりし、一四五拾錢は天利とて手に入りしは八圓半、九月の末よりなれば此月は何うでも約束の期限なれど、此中にて何となるべきぞ、領を合せて談合の妻は人仕事に指先より血を出して日に拾錢の稼ぎも成らず、三之助に聞かするとも甲斐なし、お峯が主は白金の蛩町に貸長屋の百軒も持ちて、あがり物ばかりに常綺羅美々しく、我れ一度お峯への用事ありて門まで行しが、

千兩にては出來まじき土藏の普請、羨やましき富貴と見たりし、その主人に一年の馴染、氣に入りの幸公人が少々の無心を聞かぬとは申されまじ、此月末に皆かへを泣きつきて、をどりの一兩二分を此處に拂へば又三月の延期にはなる、斯くいはゝ欲に似たれど、大道餅買ふてなり三ケ日の雜煮に箸を持せずば出世前の三之助に親のある甲斐もなし、晦日までに金二兩、言ひにくゝ共この才覺たのみ度よしを言ひ出しけるに、お鍔ばらく思案して、よろしう御座んす慥かに受合ひました、むづかしくばお給金の前借にしてなり願ひましよ、見る目と家内とは違ひて何處にも金錢の塀は明きにくけれど、多くでは無し夫れだけで此處の始末がつくなれば、理由を聞いて厭やは仰せらるまじ、夫れにつけても首尾そこなうては成らねば、今日は私は歸ります、又宿下りは春永、その頃には皆々うち寄つて笑ひたきもの、とて此金を受合ける。

（下）

金は何として越す、三之助を貰ひにやろかとあれば、ほんに夫れで御座んす、常日さへあるに大晦日といふては私の身に障はあるまじ、道の遠きに可憐さうなれど三ちやんを頼みます、晝前のうちに必らず必らず支度はして置まするとて、首尾よく受合ひてお峰は歸りぬ。

石之助とて山村の總領息子、母の違ふに父親の愛も薄く、これを養子に出して家督は妹娘の中にとの相談、十年の昔しより耳に挾みて面白からず、今の世に勘當のならぬこそをかしけれ、思ひのまゝに遊びて母が泣きをと父親の事は忘れて、十五の春より不了簡をはじめぬ、男振にがみありて利發らしき眼ざし、色は黑けれど好き樣子とて四隣の娘どもが風說も聞えけれど、唯亂暴一途に品川へも足は向くれど騷ぎは其座限り、夜中に車を飛ばして車町の破落戸がもとをたゝき起し、それ酒かへ肴と、紙入れの底をはたきて無理を徹すが道樂なりけり、到底これに相續は石油藏へ火を入れるやうな物、身代烟りと成りて消え殘る我等何とせん、あとの兄弟も不憫と母親、父に諫言の絶間なく、さりとて此放蕩子を養子にと申受る人此世にはあるまじ、とかくは有金の何ほどを分けて、若隱居の別戸籍にと內々の相談は極まりたれど、本人うわの空に聞流して手に乘らず、分配金は一萬、隱居扶持月々おこして、遊興に關を据へず、父上なくならば親代りの我れ、兄上と捧げて寵の神の松一本も我が託宣を聞く心ならば、いかにもいかにも別戸の御主人に成りて、此家の爲には働かぬが勝手、それ宜しくば仰せの通りに成りましよと、何うでも嫌やがらせを言ひて困らせける。去歲にくらべて長屋もふえたり、所得は倍にと世間の口より我が家の樣子を知りて、をかしやをかしや、其やうに延ばして誰が物にする

氣ぞ、火事は燈明皿よりも出る物ぞかし、總領と名のる火の玉がころがるとは知らぬか、やがて卷きあげて貴樣たちに好き正月をさせるぞと、伊皿子あたりの貧乏人を喜ばして、大晦日を當てに大呑みの場所もさだめぬ。

それ兄樣のお歸りと言へば、妹ども怕がりて觸れ物のやうに障るものなく、何事も言ふなりの通るに一段と我がまゝをつのらして、炬燵に兩足、醉ざめの水を水をと狠藉これに止めをさしぬ、憎くしと思へど流石に義理は愁らき物かや、母親かげの毒舌をかくして風引かぬやうに小抱卷何くれと枕まで宛がひて、明日の支度のむしり田作、人手にかけては粗末になる物と聞えよがしの經濟を枕もとに見せらせぬ。正午も近づけばお墓は伯父への約束こゝろもと無く、御新造が御機嫌を見はからふに暇も無ければ、僅かの手すきに賬りの手拭ひを丸めて、此ほどより廻ひましたる事、折からお忙がしき時心なきやうなれど、今日の畫る過ぎにと先方へ約束のきびしき金とやら、お助けの廻はれますれば伯父の仕合せ私の惠び、いついつまでも御恩に着まするとて手をすりて賴みける、最初いひ出し時にやふやながら結局は宜しと有し言葉を賴みに、又の機嫌むつかしければ五月蠅いひては却りて如何と今日までも我慢しけれど、約束は今日と言ふ大晦日のひる前、忘れてか何とも仰せの無き心ともなさ、我には身に迫りし大事と言

ひにくきを我慢して斯くと申ける。御新造は驚きたるやうの惘れ顏して、夫れはまあ何の事やら、成ほどお前が伯父さんの病氣、つゝいて借金の話しも聞ましたが、今が今私しの宅から立換へようとは言はなかつた筈、それはお前が何その聞違へ、私は毛頭も覺えの無き事ど、これが此人の十八番とはてもさても情なし。

花紅葉うるはしく仕立し娘たちが春着の小袖、襟をそろへて袂を重ねて、眺めつ眺めさせて喜ばんものを、邪魔ものゝ兄が見る目うるさし、早く出てゆけ疾く去ねと思ふ思ひは口にこそ出さね、もち前の癇癪したる堪えがたく、智識の坊さまが目に御覽じたらば、炎につゝまれて身は黑烟りに心は狂亂の折ふし、言ふ事もいふ事、金は禮樂そかし、現在うけ合ひしは我れに覺えあれど何の夫れを厭ふ事かは、大方お前が聞ちがへと立きりて、烟草輪にふき私は知らぬと澤しけり。

えゝ大金でもある事か、金なら二圓、志かも口づから承知して置きながら十日とたゝぬに電ろくはなさるまじ、あれ彼の懸け硯の引出しにも、これは手つかずの分ど一ト束、十か二十か悉皆とは言はず唯二枚にて伯父が喜び伯母が笑顏、三之助に雜煮のはしも取らさるゝと言はれしを思ふにが、何うでも欲しきは彼の金ぞ、恨めしきは御新造とお峰は口惜しさに物も言はれず、

常々をとなしき身は理屈づめにやり込る術もなくて、すご〳〵と勝手に立てば正午の號砲の音たかく、かゝる折ふし殊更胸にひゝくものなり。

お母さまに直樣お出下さるやう、今朝よりのお苦るしみに、潮時は午後、初產なれば旦那とり止めなくお騷ぎなされて、お老人なき家なれば混雜お話しにならず、今が今お出でをとて、生死の分目といふ初產に、西應寺の娘がもとより近ひの車、これは大晦日とて遠慮のならぬ物なり、家のうちには金もあり、放蕩どのが寢ては居る、心は二つ、分けられぬ身なれば恩愛の重きに引かれて、車には乘りけれど、かゝる時氣樂の其人が心根にくゝ、今日あたり沖釣りでも無き物をと、太公望がはり合ひなき人をつく〳〵と恨みて御新造いでられぬ。

行きちがへに三之助、此處と聞きたる白銀臺町、相違なく尋ねあてゝ、我が身のみすぼらしきに姉の肩身を思ひやりて、勝手口より怕々のぞけば、誰れぞ來しかと竈の前に泣き伏したるお峰が、涙をかくして見出せば此子、おゝ宜く來たとも言はれぬ仕義を何とせん、姉さま道入つても叱られはしませぬか、約束の物は貰つて行かれますか、旦那や御新造に宜くお禮を申て來いと父さんが言ひましたと、仔細を知らねば喜び顏つらや、まづ〳〵待つて下され、少し用もあればと馳せ行きて內外を見廻せば、嬢さまがたは庭に出て追羽子に餘念なく、小僧どのはまだお使ひより歸らず、お針は二階にて志かも製なれば仔細なし、若旦那はと見ればお居間の炬燵に今ぞ夢の真最中、拜みまする神さま佛さま、私は悪人になりまする、成りたうは無けれど成らねば成りませぬ、罰をお當てなさらば私一人、遣ふても伯父や伯母は知らぬ事なればお免しなさりませ、勿躰なけれど此金ぬすませて下されと、かねて見置きし硯の引出しより、束のうちを唯二枚、つかみし後は夢とも現とも知らず、三之助に渡して歸したる始終を見し人なしと思へるは愚かや。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

その日も暮れ近く旦那つりより惠比須がほして歸らるれば、御新造も續いて、安產の喜びに送りの車夫にまで愛想よく、今宵を仕舞へば又見舞ひまする、明日は早くに妹共の誰れなりとも一人は必らず手傳はすると言ふて下され、さてさて御苦勞と蠟燭代などを遣りて、やれ忙がしや誰れぞ眼な身躰を片身かりたき物、お釜小松菜はゆでゝ置いたか、數の子は洗つたか、大旦那はお歸りに成つたか、若旦那はと、これは小聲に、まだと聞いて額に皺を寄せぬ。

石之助其夜はをとなしく、新年は明日よりの三ケ日なりとも、我が家にて祝ふべき筈ながら御存じの締りなし、堅くるしき挨拶も面倒、意見も實は聞あきたり、親類の顏に美くし

きも無ければ見たしと思ふ念もなく、裏屋の友達がもとに今宵約束も御座れば、一先お暇として何れ春永に頂戴の數々は願ひまする、折からお目出度矢先、お歳暮には何ほど下さりますかと、朝より覗込みて父の歸りを待ちしは此金なり、子は三界の首械といへど、まこと放蕩を子に持つ親ばかり不幸なるは無し、切られる縁の血筋といへば有るほどの悪戯を盡して瓦解の曉に落こむは此淵、知らぬと言ひても世間のゆるさねば、家の名をしく我が顔はづかしきに惜しき倉庫をも開くぞかし、それを見込みて石之助、今宵を期限の借金が御座る、人の受けに立ちて判を爲たるもあれば、花見のむしろに狂風一陣、破落戸仲間に遣る物を遣らねば此納まりむづかしく、我れは詮方なげれどお名前に申わけなしなどゝ、つまりは此金の欲しと聞えぬ。母、は大方かゝる事と今朝よりの懸念うたがひなく、幾金とれたるか、ぬるき旦那どのゝ處置はがゆしと思へど、我れも口にては勝がたき石之助の辯に、お峯を泣かせし今朝とは變りて父が顔色いかにとばかり、折々見やる尻目おそろし、父は靜かに金庫の間へ立ちしが頓て五十圓束一つ持ち來て、これは貴樣に遣るではなし、まだ縁づかぬ妹どもが不憫、姉が其人の顔にもかゝる、此山村は代々堅氣一方に正直律義を眞向にして、悪い風説を立てられた事も無き筈を、天魔の生れがはりか貴樣といふ悪者の出來て、無き餘りの無分別に人の懐でも覗うやうにならば

恥は我が一代にとゝまらず、重しといふとも身代は二の次、親兄弟に恥を見するな、貴樣にいふとも甲斐は無けれど尋常ならば山村の若旦那とて、入らぬ世間に悪評もうけず、我が代りの年禮に少しの勞をも助くる筈を、六十に近き親に泣きを見するは罰あたりで無きか、子供の時には本の少しものぞいた奴、何故これが分りをらぬ、さあ行け、歸れ、何處へでも歸れ、此家に恥は見するなとて父は奥深く這入りて、金は石之助が懐中に入りぬ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お母樣御機嫌よう好い新年をお迎ひなされませ、左樣ならば參りますと、暇乞わざとうやうやしく、お翠下駄を直せ、お立關からお歸りでは無いお出かけだぞと圖分〳〵しく大手を振りて、行先は何處、父が涕は一夜の騒ぎに夢とやならん、持つまじきは放蕩息子、持つまじきは放蕩を仕立る繼母ぞかし。鹽花こそふられ跡は一まづ掃き出して、若旦那退散のよろこび、金は惜しけれど見る目も憎ければ家に居らぬは上々なり、何うすれば彼のやうに圖太くなられるか、あの子を生んだ母さんの顔が見たい、と御新造例に依つて毒舌をみがきぬ。お峯は此出來事も何として耳に入るべき、犯したる罪の恐ろしさに、我れか、人か、先刻の仕業はと今更夢路を辿りて、おもへば此事あらはれずして濟むべきや、萬が中なる一枚とても數ふれば目の前なる

を、廂ひの高に相應の員數手近の處になく成しとあらば、我れにしても疑ひは何處に向くべき、調べられなば何とせん、何といはん、言ひ抜けんは罪深し、白狀せば伯父が上にもかゝる、我が罪は覺悟の上なれど物がたき伯父樣にまで濡れ衣を着せて、干されぬは貧乏のならひかゝる事もする物と人の言ひはせぬか、悲しや何としたらよかろ、伯父樣に疵のつかぬやう、我身が頓死する法は無きかと目は御新造が起居にまたがひて、心はかけ硯のもとにさまよひぬ。

大勘定とて此夜あるほどの金をまとめて封印の事あり、御新造それ〳〵と思ひ出して、懸け硯に、先程屋根やの太郎に貸付のもどり彼金が二十御座りました、お睦お睦、かけ硯を此處へと奥の間より呼ばれて、最早此時わが命は無き物、大旦那が御目通りにて始めよりの事を申、御新造が無情そのまゝに言ふてのけ、術もなし法もなし正直は我身の守り、逃げもせず隠られもせず、慾かきらねど盗みましたと白狀はしましよ、伯父樣同腹で無きだけを何處までも陳て、聞かれずば甲斐なし其場で舌かみ切つて死んだなら、命にかへて嘘とは思しめすまじ、それはど度胸すわれど奥の間へ行く心は屠處の羊なり。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

お睦が引出したるは唯二枚、殘りは十八あるべき筈を、いかにしけん束のまゝ見えずとて底を

かへして振へども甲斐なし、怪しきは落散し紙切れにいつ認めしか受取一通。

（引出しの分も拜借致し候　石之助）

さては放蕩かと人々顔を見合せてお睦が詮議は無かりき、孝の餘德は我れ知らず石之助の罪に成りしか、いや〳〵知りて序に冠りし罪かも知れず、さらば石之助はお睦が守り本尊なるべし、後の事まりたや。

うもれ木

第一回

描き出だすや一穂の筆さきに、五百羅漢十六善神、空に樓閣をかまへ、思ひを迴廊にめぐらし、三寸の香爐五寸の花瓶に、大和人物漢人物、元祿風の雅なるもあれば、神代樣うづたかく、武者に鎧のおどしを工夫し、殿上人に裝束の模樣を撰らみ、或は滯書きに華麗をつくす花鳥風月、さては楚を極むる高山流水、意の趣く處景色とゝのひて、瀟淡よそほひなす彩色の妙、砂子打ちを樂と見る素人目に、あつと驚歎さるゝほど、我れ自身おもしろからず、筆さしおきて屢々なげく斯道の衰頽、あはれ薩摩といへば鰹節さへ幅のきく世に、さりとは地に落ちたり我が錦欄陶器、おもひ起す天保の昔し、苗代川の陶工朴正官、其地に錦樣の工みなきを歎じ、歳十六の少年の身に、奮ひ起す勇氣千万丈、奉行を說き藩廳に請ひ、壁野に二人の敎授をむかへて、相傳法受の苦を盡くしつ、猶心膽をねる幾春秋、安政のはじめ田の浦の陶場に、燒着畜窯の良結果を奏するまで、刻苦艱難いくばくぞや、夫れが流れに浴する身の、美術奬勵の今日うま

れ合はせながら、此處東京の地にばかり二百に餘る畜工のうち、天晴道の奥を極めて、萬里海外の背眼玉に、日本固有の技藝の妙、見せつけくれんの腸もつものなく、手に筆は取り習らへど、心は小利小欲のかたまり、美とは何ぞ儲け口か、乃至吉原洲崎のちりからたつぱう、品川にも又捨てられぬ代物ありと、口三味線の筆拍子に、なぐり書きしての自慢顏、兎角は金の世の中に、優でゝ座るの妙で、侯のと言ふ處が、結局は仕切り直段の上に有ること、問屋うけの宜き物一致あり難しとは、そも何方より出る詞ぞ、されば こそ賣國の奸商どもに左右されて、又も直下げ又も直下げと、さらでもの痩せ腕ねぢられながら、無明の夢まだ覺めもせず、是れでは合はぬの割仕事に、時間を厭ひ費用を減じて、十を以て一に更ふる粗畜濫筆、まだ昨日今日絵の具壺に据りて、替古は居ねふりの白雲頭を、張りこかして手傳はする淵がき腰がきの模樣、霰砂子みだれ砂子の亂れ書きに、美といふ字は拭ひさる繪のぐ雜巾の汚れ同樣、さりとは雪がれぬ恥ならずや、此儘ならば今十年と指をらぬ間に、今戸燒の隣りに坐をしめて、荒もの屋の店先に、砂まみれに成らんも知れた物でなし、是れほどのこと氣のつかぬ、痴漢ばかりある筈なけれど、時の勢ひは出水の堤、切れかけたも同じこと、我等ふせぎはとんと不得手、先づは高見で見物が當世ぞと、頬杖つきて宙腰の、ふら〳〵とせし了簡には自己々々が不熱心を、

地震雷鳴おなじ並みに心得て、天だ天だと途方途轍もなき八つ當り、的になる天道さま氣の毒なり、然りながら夫れも道理、身は蜻蛉洲幾十万の頭かずに加はりて、竈の烟の立居にまで、かしこき大御心なやませ奉る、辱なさ心得もせず、大日本帝國の名譽といふ事、摩みくちやにして掃だめの隅に、投げ出す樣な罰あらずが、其處等あたりに珍らしからぬ世の中、憤るほど管なるべし、さりとも我れは我が觀念あり、握り初めたる筆の因果、よし狂といはゝ言へ、愚と笑はゝ笑へ、千萬の黄金つんで來るとも換へぬ心を腕にみがきて、輕薄浮佻を才子と呼ぶ明治の代に、愚直の價どれほどのもの、熱心の結果はいかに、斯道の眞は那邊にあるか、よし人目には何とも見よ、我が心滿足するほどの物つくり出して、我れ入江穎三變物の名を、陶器歴史に殘さんずもの、口惜しや赤貧の身の、空しく志しを抱ひて幾年間、此まゝならば胸中の奇計、何に向つて何時描くべき、恨みは是れぞ是れ骨までの恨みぞと、取りしむる右の腕手首ぶる〳〵と顫へて、煮えよ腸、熱涙のみ込みつゝ悲憤の聲は現はされど、誰れいふとなく慷慨先生と仇名して、酒席の噂はづれぬ代り、柴のと叩くもの稀々なれば、友なく弟子なく女房なく、お蝶とよぶ妹相手にして、此處高輪の如來寺前に、夕顔垣にからみ蚊やり火軒にけふる詫住居、遊團扇に緑のある暮しをなしけり。

第一回

散る木の葉にすら、笑みぞあまると聞く十六七を、貧にくるしめば月も花も皆なみだの種、同じほどの少娘が、流行の帶に新形染の浴衣きて、姿どこやら嬋やかに、能く見ればよくもなき顔だちも、三割どくの白粉ぬりくり、幾度じれたる癖直しの、お蔭にふくらむ髮付きたぼ付き、天晴れ美人と招牌うつて、摺れ違ひに薫る香水の追風まで、ぱッとせし扮粧の夕詣で、何を願ひぞ、神さま嘸やお困りの連中に、願みられて我が形はづると無けれど、快よからねば洗ひざらしの浴衣の肩、我れ知らず窄めて小走りするお蝶、並らぶ緑日の小間もの店に目もくれず、そゝぐは一心兄の上ばかり、願ひは富貴でなく榮華でなし、我が形この上の襤褸に、よしや細の帶しめよとまゝ、我れ生涯に來べき運、あらば兄様の身にゆづりて、腕の光りの世に現はるるやう、みがく心の滿足されるやう、二つには同じ畜工の侮り顔する奴を、兄さまの前に兩手つかせたく、佛壇のお二た方に、お位牌の箔つけて欲しきがそも〳〵の願ひ、手内職の手巾問屋に納むる足を其まゝ、靈驗あらたかなりと人もいふ、白金の清正公に日參の、こむる心を兄には告げねど、聞かば畜筆なげ出して、藝に親切の志、我れまだ其方に及ばずとや言はん、下

向はことに家のことに氣に成りて、心も足もいそぐ道の、とある小路に夥しき人だち、喧嘩か物どりか何にもせよ、側杖うたれぬやうと除けて通る、多くの人の袖のまたを、洩れて聞こゆる涙ごゑ、ふつと耳に止まりて我しらず差のぞけば、憐れや五十あまりの老女、貧にも限りのなきものかな、我れに比べて今一倍あさましき有樣、むかしは由緒ある人が皺める眉目どこか品もあるを、不憫や是れが商賣の、何燒かといふ銅の板、うち渡せし小屋臺のかげに頭すりつけて繰りかへす詫ごと、相手は三十計の毘むしやくしやと、見るからが憎く氣な奴、大形の浴衣胸あらはに着て、力足ふみ立てつ耳も聾よと喚き立るは、何れ金が敵の世の中、元來は懇意づくの、生ながらに顏赤め合ひしなかでもあるまじきに、始めは伏し拜みて受たる恩、返へすことの成らぬは心がらならず、此社會に落入りし身の右左不如意にて、約束せしこと約束のやうにもならねば、我れと恥ぢて心ならぬ留守も遣ひ、果ては言ひ度くなき嘘に、一月を延ばし十五日を過ぐせど、其揚句さて何とも成らず、つまりつまりては烏羽玉のやみの夜、家ぬしの垣の外に兩手合はせて拜みながら、不義理不名譽の欠落もすめり、さても此老女その類ひと覺しく、四邊はづかしくや小聲の言譯、且つは涙ながらの詞とて、首尾全くは聞えぬ物の、取り集めて察すれば、娘にやあらん杖はしらの子、煩ひて居るかの樣子、夫れ本復さへなさば又

つくべき方もあり、今暫時の間まちて給はれと、あはれ腸ちぎり盡くす悲しげな聲、聞くお蝶は涙もろの女の身、ましてや同じ情くみて知らぬ事もなければ、何の人事と聞き過ぎられず、さりとは彼の男の聞譯なさ、百圓のかたに網笠なれど此屋臺おこせといふ、夫取られては私しと娘、今日から喰べる事が成りませぬお慈悲と合す手を、あれ打ちをつた、憎くい奴にくい奴、自分は手前はさして困る樣子も無く、大々しい身躰つきの病ひ氣も無ささうなに、あの老人のまかも病人抱へて、困苦さとその察しも無きは鬼か夜叉か、有らば彼の横つら金で張つて、美事老女救つてやり度きもの、夫れ處ではなき身、此財布の底はたけばとて、何に成る物でなし、口惜しや可愛やと、お蝶身もだえする程殘念がり、黒山と立つ人じろり眺めて、切めて一人は此中に憐れと見る人ありさうな物と、歎息する一刹那、お蝶の肩さき摺るほどにして、猶躊躇もなくずつと出し男、何ものと思ふまもなく、猛りたつ鬼男の前、振あぐる手の肘を止めて、輕くふくむ微笑の色、まづ氣を呑まれて衆目のそゝぐ身姿は如何に、黒絽の羽織に白地の浴衣、態とならぬ金ぐさり角帶の端かすかに見せて、温和の風姿か優美の相か、言はれぬ處に愛敬もある廿八九の若紳士、老女の方顧みさま詞づき叮嚀に、私し通りすがりの身、來歷は何か知らねど、高が女なり老人に失禮はあり勝ち、あれ御覽ぜよあの通り詫ても居ること、往來は其う

ちにも人の目口うるさきに、洋刃の厄介も御身分から如何や、何と私しに、此處の花もたせては下さらぬかと、背柳のいと優しく出れば、はて扨他人の入らぬ口出し、詫や詞ですむほどなら、我等今頃は手を引く筈なり、濟まぬ次第きゝたしとならば聞かせもせん、我等二た月三が月、雨露志のがせた事もある大恩人、その上に彼奴めが口車に乗せられて、五圓といふ大金貸したは此方も商賣づく、五一の利足はよしや天地が逆さまにもなれ、一人子の病人死にもせよ、待つてやる約束もなければ、負けてやる覺えもなし、夫れに何ぞや泣ごとの數々、地獄の顔も方圓のあるもの、利足の形にも不足なれど、何一つでも取るが取り徳、この代物引取つて行かんといふは、餘り無理でも無きつもりと、鼻で笑ふ髭づら憎くし、若き男はから〳〵と高笑ひして、何ぞと思ひしに金ですむ事なりしか、さりとては譯もなし、入らぬ他人と言はるれど、何れ四海の内輪同志、金は我れ立て換へんと、紙入れ探ぐつて五圓札一枚一圓一顆、是れではまだ〳〵御不足ならんが、内實持ち合せは是れ限りなり、何と雨露しのがせるほどの大恩人さま、了簡しては遣はされぬかと、飽まで柔和は粧ひながら、否なと言はゝあの純白の拳何處に揮つて、あの髭男微塵になるも知れがたしと、芝居氣のある見物が叫き可笑し、彼の男は搔きさる樣に、金懐中にねぢ込んで、取り出す證書幾通、幾多の人の涙の種を印刷にせし文言名當て、あれか是れかと探がし出して、よしか慥に渡しましたぞ不足を言はゝまた〳〵なれど、取らぬには增し是れで算用ずみとすれば、老婆めは大した儲けもの、好い親分見付け出して是れから利の出ぬ金借りらるゝやら、人事ながら慈善家の末が案じられると、冷笑て拂ふ裝の塵、禮も返さず耻ぢもせず人かき分けてのさりのさり、行くての大地裂けもせず、跌づく石の無きも不審し、若き男は老女が陳ぶる禮よくも聞かず、何の〳〵是式のこと、有つたればこそ役にも立つたれ、無くば我れと其方樣と何づれ替らぬ難義の淵、浮き沈みは浮世の常よ、お禮は其方樣大分限になられし時、此方より御催促に出るまでは、お預けのことお預けのこと、はて名告をする程聞こえても居らぬ名、先づ夫れもご免なされと、取すがる袖引はなして、優然と去る後ろ影、光明赫灼として輝くとぞ拜まれぬ。

第三回

歳十三の曉より、繪筆とり初めて十六年、一心斯の道に入江籟三、富貴を浮雲の空しと見れど、猶風前の塵一つ、名譽を願ふ心拂ひがたく、三寸の胸中慾火つねに燃えて、高く掛るべき心鋭くもるといふは是れのみなり、さればとて世に媚び人に媚ること、生をかへぬ限りならぬ

質、我れより頭下ぐること、金輪奈落いやといふ一點ばりに、頑物の名高くなるほど、我慢と意地は滿身に行わたりて、入れられぬ世と彌々うしろ向きに成る心、見をれ此腕なにが住か、一飛得意の曉にはと、人も聞かぬ大言はきて、纔かに熱腸を冷やす物の、扨も諸道のさまたげと言ふ、貧より外に伴侶のなき身、其得意の曉いつとか待たん、彌勒の出世と並らべ立て甲乙の無き物よと思ふに、口惜しの念胸をさして、瞼の合はぬ夜半も多かり、寐ぬに明けたる或る朝、おく庭草の露を見て亡師のことふッと思ひ出し、俄かに寺參り仕度なり、垣根の夏菊無造作に折りとつて、お蝶が暫時と止むるも聞かず、朝飯まへに家を出けり、寺は伊皿子の臺町なれば左までには遠くも非ず、泉岳寺わきの生垣青々とせし中を過ぎて、打水すゞしく箒木目のたつ細道を、がらりざらりと百足下駄に力を入れて、纏はる片裾うるさしと、捲くり上ぐるや空脚あらはに、何の見得もなく、身は小男の面ざし醜くからねど、色黑々と骨だちて、高き鼻しまりし口、眼ざしきろりと青く凄く、沈鬱の症何處か淋しく、紺蔭の古手に白兵見の姿、懷中に建白書相應なれど、右手に持つ夏菊の花の色、流石にやさしき處も見えけり、心こつて見る目には、映るものも映る物も皆その色、紅づくりの格子戸まへに、米澤數寄屋の肌つき美くしき人、黑繻子の帶腰つきすつきりとして、芙蓉の面に淡彩の工合、楊柳の髪に根がけ

の好み、扨も美かな扨も美かな、此美にすさむ心がけを我が陶畨の上に移して、共に協力の友を得たしと、茫然自失ながめ入ればあれ渺氣味の悪るき人と、逃こまれて我れながら、取りとめ無き考へ馬鹿らしく、振むきもせず又五六歩、三歳ばかりの男の子のちよろ〳〵と馳せ出しが袖なし浴衣の模樣は何、籬に菊の崩し形か、夫れよ今度の香爐にあの書き廻しも面白かるべし、注文は龍田川とか、何の我が腕で我が書くに、入らぬ遠慮究竟くさし、先師の言付より外は他人の意見いれたこと無き頑三、身貧に迫つて意を曲ぐるなど嫌やな事なり、さりながら我れ頑物の兄故に、世の人並みのこともせず、米味噌醤油に追ひ遣はるゝお蝶、思へば兄風も吹かされねど、成り行と諦らめて居て呉れる樣子、夫れも夫なり、時運めぐらば何時かは花も咲くものよ、衡門に黑ぬり車出入させて、奥樣と尊めらるゝやうに成るも不思議はなし、嗚呼その衡門よりは、天晴れの人物えらびて添はせたきものと、何がなしに案じてふッと仰げば、今も想像の衡門に、篠原辰雄といかめしき表札、扨も立派の住居かな、主人公はどんな人、身分はいかに、愛國の志しある人ならば、日本固有の美術の不振、我が畨工疲弊の情、說かば談合の膝にもと、夢知らぬ人に望みを屬す、狂氣の沙汰に心もつかず、彼れを思ひ是を思ひ、何時とは無しに坂も登りぬ、寺門くゞり入れど坊僧どの寐坊にや、まだ看經の聲もなく、自然

の寂寞境に、あさ風さつと松に吹いて、身にしみる心地何とも言へず、本堂をめぐりて裏手の墓處へと、手桶の弁らぶ閼伽非のもとを過ぎる時、入江様まばしと呼止める聲、少し覺えの有と顧見れば、つか〳〵と馳せ寄つて、物言はず大地に兩手を突く男、あやしや何者と呆れて立つ、足もとに身を縮めて、お見忘れか但し人外の私、お詞も下されまじとか、正路潔白の君に對して、合はすべき面貌もなく、言ふ詞出處もなき失策、後悔しぬきし改心の今日、我が田へ水の辨解ではなし、懺悔に滅ぼしたき罪のあらまし、聞いて給はる人外になき身、相弟子のよしみ昔なじみ、君を見かけてのお頼みと、頭も上げず詫り入る躰、領足美事に耳うらに二つ弁ぶ黒子、夫なり姿とそ變りたれ彼奴新次め、先師が殊に寵愛にて、行々は養子にもと骨折られしを、生地注文にと多分の金引出して、其まゝの行方知れず、師の臨終にも有り合さぬ人非人、今頃此處らを彷徨こと憎くし、何の相弟子失禮至極と、生來の癖目尻に現はれて、言ふことと宜くは耳にも入れず、聞き度なしお黙りなされ、相弟子ならば兄弟分、言ふ事あり咎むる事あり責むる事あり、さりながらお前様と我れ何でもなし、他人も他人見ず知らず、入江頼三潔白を尊ぶ身の、友とも仰せらるゝな、中々の耳ざはりなり、其處退きて給はれ、露をさながら志しの手向けの花、萎るゝも口惜しければと、詞少なに行き過ぎる袂、あわたゝしく先づ

と控へて、御尤ながら恨めしきお詞、責め給へ咎め給へ、罪と知つて苦るしき身の上、御折檻の筈にも逢はゝ、却つて身の本懐なるを、捨てゝ顧見ぬ他人向きの仰せ、昔しの入江様、今日の入江様、お人替りしか、お心二つか、我今までの目遊か、君を先師の形見とみて、改心の實も謝罪の情も、君に寄つて現はし度き願ひ、さりとは畜餅のお詞かなと、半いはさず振かへる頼三、だまれと一と聲鬱憂の氣のこりたる餘り、物あらば當らん破裂の勢ひ、唇ぶる〳〵と顔へて生來の訥辯いよ〳〵訥に、汝れ新次人非人、恩志らず義理知らず道志らず、汝れが罪の身を責むるは知らず、我を批難するか、我を批難するか、我頼三昔しも今も、正義を立て公道を踏んで、一歩の過ち覺えなき身、どこの何處に何の缺點、言へ聞かん言へ聞かんと、詰め寄る眼尻きりきりと釣つて、汝不忠不義の奴も、先師寵愛の餘りには、世に其罪を包まれて、知る者は師と我ばかり、我れ一と度言はゞと定めて十年近く、此口開かねばこそ汝れ安穏に、月日の光り拜むは誰が庇護、頼まれず共折檻の筈此處にあり、墓前へ手向けん志しの、此花で打つに不思議もなし、打手は頼三精神は先師、口惜しくば身にしみよ骨にしみよと續け打ち、手に持つ菊花なげつけて、白眼つむる眼の内に感じ來れる新次が躰、昔しながらの美顔今一層の品を備なへて、あはれ好男子身じろきもせず、瞼にあぶるゝ後悔の涙、眉宇に滿つ慚愧の狀、此人先師の

愛せし人、我れに謝罪と思ひ込みし人、憎くむが本義か、捨つるが道か、と許迷つて判断の胸うやむやに成る時、静かに頭を上げて言ひ出る一通り、聞けば誤りたり我れ短慮軽忽の處為、此人の罪罪ならず、とる處岐路に落し不幸の身と、先づ憐みの情より聞けば、私し元來私欲に非らず、小を捨てゝ大に付く國利國益の策、立てしといふが抑々の破滅にて、思へば了簡が若かりしなり、腕を組みての考へと手を下ろしての實驗とは、冠履の相違雲泥の差別、人は我より利口にて、世は思ふまゝならぬ物と、つくづく歎息するにつけて、正義は人間の至寶といふこと漸々に發明し、才ばしりたる考へ身を離れしは、彌々無一物の曉がた、爾來幾年志しを磨きて、遠國他國に流浪の結果、不思議に人らしく世に言はれて、少しは名をも知らるゝ境界、今歳めづらしく歸京の錦、心に飾つて拜顔と樂しみし、師君は此處草陰苔下の人、松風に袂をぬぼつて幾朝くむ閼伽井の水の影見ぬ人に殘念は増りて、一と層君のこと懐かしく、墓はしかりし昨日今日、打たるゝも嬉しく罵らるゝも嬉しく、眞の兄弟に逢ふ心地と、保ちかねてこぼす涙一滴、見る〳〵頼三感歎して、大地につく手まづ上げ給へと扶け起して、知らざりし今までの失禮、知りての後悔、打ち割りし意中に物のなきは見え給ふべし、いざ御墓前に中直りせん、心おく事かと光風霽月、引いて立つ手に恨みも殘らず、取なせば是れも先師の導き、

ありし朋友なり相弟子なり、君も訪ひ給へ、お前様も來て御覽ぜよ、お住居は何處ぞ、此處よりは遠からぬ如來寺前に、引結ぶ庵の草深き處が夫、偖は目鼻の我が宿も此坂下、篠原と呼ぶが當時の性なり、さりとは奇遇よ辰雄殿とは君の事か。

第四回

月に恨み風に憤り、天下を悪魔の巣窟と見て、黒暗々の中に彷徨し頼三、何處ともなく一點の光り幽かに見えて、前途の企望漸々に大きく成りぬ、以前の新次、今の篠原辰雄と呼ぶ男、有し職人時代には、負けぬ氣象の人受けよからず、師匠の愛の夥たゝしきほど、憎くむ人さま〳〵の説を搆へ、傲慢と罵り狡猾と嘲りて、交際する者稀なるを、頼三例の弱きもの助けたく、弟の様に最負せしが、恩は二代の親も同じ、師匠の金持逃するほどの奴、師匠も我れも目違ひと諦らめて、恕ひ恥ぢを世に現はさじと、包み通せし七八年目、何處ぞで悪人の仲間入、今頃は何に成りてと、折ふしの思ひ出種、流石に忘れぬ處もありしに、思ひきや今日の身分、變りも變りし立派の紳士に成りて、爾かも執る主義の高潔さ、話し合ふほど頼母しさ増りて、墓參歸りの半日を篠原のもとに説きつ説かれつ、辰雄今日までの經歴につきても、善事と悪事

を洩さず藏さず、篠原と呼ぶ今の家、何某地方の金滿家なりし事、其處に住み込の最初より、次第に氣に入られて、一人娘に聟養子と成りたること、其身戸主と成りて二年とたゝぬ間に、親女房とも引づゝきて病死せし不幸さ、扨その幾万の財産指のさしてなく、我が自由になすも愁らく、家につきての緣類にゆづりて、身退きたき願ひも、世の人さらに聞き入れてくれず、其まゝ安座逸居の身、我が位置たかまるに付けて沸き來る企望のさまざま、及ばぬと知つて捨られぬが是れも癖にや、社會の爲の東奔西走、此處東京に計畫ありて、出京の昨日今日、生中此方彼方に名を呼ばれて、稱へらるゝ身汗あゆる心地、昔しを思へば大恩の師に、よしや理由は何にもせよ、重々の不始末もあるを、素知らぬ顏に靑天を歩行くさへ、日月の手前恐ろしく、世を欺くに似て心安からず、手を置かぬ胸夢おどろきて、人知らぬ罪中々にくるしかりきと、腹ある限り告白して、屑よしとする樣子、表面をつくろひて底にごる、輕薄者流を厭ふ目には、宜くも返りし本善の善、稀なる入よと感じられて、過ぎし過失は美玉のくもり、爾かも拭ひ去つて見るに、却つて光りは勝る心地、籟三走きりに憎くからず成りぬ、中々物語り盡きもせぬに、交際ひろき人のならひ、訪問者陸續とうるさく、何と入江樣、人氣なき閑靜な處にて、一日ゆるりと御高說承りたし、君は何時もお暇かと問はれて、はて扨貧者に餘裕はなし、氣樂な

事いひ給ふな、人氣なき處と言はゝ、我れ詫住居の閑靜さ、裏の車井に釣瓶くる音か、表に子守り歌きこえる位のもの、此處よりは遂ひ开處なり、何時ぞは來て御覽ぜよ、麥めし焚かせて望蜀汁位の御馳走はすべしと無造作の詞、さりとは浦山しきかな、世の事聞かず人に交はらず、何事の憂きも宿らねば、胸中いつも清しかるべく、凡界俗境遠く離れて、取る筆一つに樂みを走る御身分、我れ雲泥の相違と歎息する辰雄、籟三引きとりて、何の浦山しき身分か、筆心にまかせず業世と合はず、我れと埋もるゝ身のはては、首陽か汨羅か底知らずの境界、さりとは世の中あても無しと笑つて、遠慮なき昔し語りに、胸も開らく障子の外に出れば、廊下いく曲りか廣々とせし住居、實に人の身は水の流れと、物言はず顧みれば莞爾と送る辰雄の姿、嗚呼人物と心にほめて、下婢が直す百足下駄、是れ特色の怖る躰なく、喜色洋々門内を出しが、歸宅の後もお蝶相手に此物がたり、平常は蛇蝎と忌み嫌ふ世の人、兄さまの褒め者とはどんな人、お蝶見たしと思はねど、喜ぶ兄に我も嬉しく、一日ありて二日目の夕がた、軒ばの稷に日ぐらしの鳴き出る頃、手仕事叮嚀に取片づけ、家の廻り奇麗に掃除して、打水いそがしき門口に、入江樣はと音なはれて、誰君と振かへる襁すがたを、扨も美形と見るは辰雄、お蝶はッと心付て、俄にさすや双頰の紅ゐ、色は何の色我れ知らず、見しは清正公の彼の時の彼のお人、

何として我家へはと、騷だつ胸に是れよりや知る戀。

第五回

床のもとの籠馬かたさせと鳴いて、都大路に秋見ゆる八月の末、宮城の南三田のほとりに、人家二三十戸買ひつぶして、新たに工事をいそぐは何、押たてし杭の面に、博愛醫院建築地と墨ぐろに記るして、積み立つる煉瓦の土臺に、きやりの聲の賑はしきと共、四方に聞えわたる、篠原辰雄、憂世のうきを憂きと捨てずして、吉野紙の人情あさましゝと、孤身奮ひ起す愛世濟民の法、我れ微力不肖の身の、仆れて止まば休まんのみ、今日細民困窮のあり樣、見るに腸たえずやある、知らずや錦衣九重の人、埋火のもとに花を咲かせて、面白しと見る雪の日は、節婦こゞえて涙こぼるべく、大厦高樓に岐阜提燈ともしつらねて、風をまつ納涼の夜は、蛟遐火のもとに孝子泣くめり、中に憐れは疾病の災ひ、名醫門にあり。良藥ちかきに有つて、爾かも求め難く得がたき身、天命ならず定業ならず、救はるべき命見す〳〵の殘念さ、妻の身子の身いくばくぞや、人生れながらに惡意なけれど、迫まりては德不德取捨の猶豫なく、天を恨み地を恨み、世範これより亂れて國家の末いと危ふし、是れを救ふこと仁にありと、我れ先づ資產

を擲つて、一着手を救生の急なるに起し、一方は富國利民の策を講じ、一方は貴顯紳商の門に、協力贊助を求むること切なるに、德孤ならず何某の殿某の長官、意氣投じ所論合つて、甲より乙に美聲を傳へれば、德義を一つの名譽と心得る輩、何となしに雷同して、世上の評判赫と高く、見ぬ人聞かぬ人名を慕ひ、天晴れ仁者と知らぬ者なくなりぬ、其行ひ其詞見るにつけ聞くにつけ、交るにつけ睦つむにつけ、籟三次第に暮はしく尊とく、口碑れ他人に扶助は仰がじと定めし、我慢の角は此人の前に折れて、鬱悶の心志のびがたく、我業疲弊不振の物語りより、斯道挽回の志し一日の休む間なけれど、實をいはゝ勢力なき身の聞き入れて呉れてもなく、生中說くこと嗤笑ひに成りて、はては後ろ指さゝるゝこと口惜し、さりながら夫も道理、我れ此道に入たちて十六年、まだ一と度の共進會に名を揭げたることもなく、我れ自由の筆貧ゆゑには縛ばられねど、中々の直行にくまれて、問屋うけ宜からねば、注文は廉價粗物の外もなく、事心と合せず筆なにとして揮はるべき、不滿々々の塊まりは、何の世の中あき盲目ども、是れ相應と投げ出しものにして、意匠もちひず鍛れん馬鹿らしく、品物の面てよごしてやれば、我が血涙を呑みし粗物も、彼れ衣食の爲にする粗物も、見る目に何の變りなく、口ほどもなき駄物師と嘲けられて、我が名いよ〳〵地に落ちたり、季煉月鍛の筆、經營慘澹の意匠、心

に有つて物に描かず、我れ男子の身の精神一到、猶こと成らぬ腑甲斐なさ、世人明なきか我れもし惑へるか、誰れに寄つて語り合さん術なく、冥々の内に重ねし年幾年、君一と度びは斯道の流れに立ちし人、汲み知り給ふ事もあるべし、我が爲の名案下し給へと、打明かす意中、辰雄おきりに歎じて止まず、げに宜くも合へる物かな、我が國家を見る心その外に出る事なし、德義の廢頽人情の腐敗、是れを愛ひ彼れを歎けど、道に立つ人大方は、濁流汚瀑に身を投じて、爾かも汚れを知らぬ輩、味方少なく仇は多し、さりながら捨てぬ處に物は成り立ちて、二人三人の正義の士に、知られ初めし昨日今日の事業、憚り多けれど是れ手本とも御覽じて、入れられぬ世を捨て給はず、腕かぎりの品物こしらへて見給はずや、其資金は我れ受けもたん、此事廉直の君が心に屑しと思さぬか知らず、夫れは君一身の小事のみ、幾多の畸工の睡りを覺まして、國益の一助たゆたふ處か、吾邦特有の石陶器、價廉といへど品は英佛伊に及ばず、獨り薩州陶器のみは、土質釉料他邦に類なく、天晴れ名譽の品なるを、惜しや畸工に氣慨なく、問屋に一の精神なく、今日の成行くちをしの思ひ、我れも多年の腕中にありし、不思議に心の合するも自からの時機なるべし、外づし給ふなと熱心に力を添ふれば、穎三感涙に眶ぬれて、何分にもと生れて始めての詞、辰雄その後は聞かず言はさず、事一切此處に此處にと胸を打ち

けり、

日數隔たつること幾日、三田の工事の喧ましきと共、斯道畸工の耳そば立ること沸き來たりぬ、如來寺門前草ふかき處、埋もれものゝ慷慨先生、三年鳴かず飛ばずの技倆、現はさんとする風說、立つや我れより高き人、くじき度きが此輩の常、陰に陽に批評たくましくすれど、後ろだて確かなる身の、却りては心可笑しく靜かに須がきの筆を下ろしぬ、生地は素より沈着官が精製の細塑陶、撰らみは穎三かねての好み、三尺の細口にして、蟄附龍耳の花瓶一對、百花これより亂れ咲いて、粲たる金色みるは幾月の後、心米來に先づ馳すれば人物景色眼前に浮かんで、我れならず莞爾と笑む穎三、王侯貴人なんの物かは、世塵遠く身を離れて、凌風駕雲の仙に入る心地、經つ日覺えず明けぬ暮れぬ。

第六回

恩に感じ行ひに服して、我れは神とも敬とぶ人の、彼れより心に垣を結はず、睦つれらるゝ事勿躰なく嬉しく篠原といふ名知らず聞かずの最初、身にあまし一事漸々に形づくりて、馴れゆく月日の深きほど、可憐の胸やみに成りぬ、お蝶あくまで優しき姿、萩の下露もろげに見え

て立てし心は現はさねど、思ひ込まば火水の中も、よしや命は假の世と定めて、二つの道は踏ぬ氣象、我身卑賤の敬へもなきに、君樣世上に敬まはるゝお身、成るまじき願ひと我れを叱かりて、扨ていよ〳〵捨てがたく、染みし思ひの是れを友に、我身一生一人ずみと、憐れの觀念さすがに勦るゞは、折ふし耳にする世の評判、宜しと言はれて悦ぶは格別、何某子爵最愛の娘、是是彼の人にと申込みの噂、聞く胸なにか轟いて、朧々兄に問へば、大丈夫と笑つて退けられぬ、されど流石に氣に成りてや、其つぎの夜に訪はれし時、籟三その事いひ出して、實かと問へば、虚言ではなし、舊大名の幾万石とか、聞くばかりも耳うるさく斷り言ひしも五度か六度未だに仲人殿むだ足に參らるゝ事可笑しと許、辰雄心に止めぬ樣子、夫れは何故のお斷り君もまだ年若の、是れより獨身にも居られまじ、望み好みの有るは知らず、大方ならば極められたが宜からんにと、籟三心あつて言へば、我れ獨身にて終らんとも思はねど、華族の聟に成る願ひなく、姫君樣女房にもたくなし、香花茶の湯に規則どほりの容儀とゝのひて、お役目の學問少々ばかり、何に成る物でなし、世路の困難ふんでも見ず、一人立ちの交際もならぬ樣な、木偶のぼう的の神さま持ち込れて、親の光りに頭さぐるなど、嫌な事なり、我れ望みは身分でなく親でなし、其人自身の精心一つ、行ひ正しく志し美事ならば、今でもお世話ねがひ度もの

と、鮮かな詞、籟三片頬ゑみしてお蝶をかへり見ぬ、此處に來て遊ぶ時の辰雄、世に高名の人とも無く、さながら家人の打とけ物がたり、只愉かしく睦ましく、友か親族か猶一段、籟三たしかの望み出來て、或る時お蝶にほのめかせば、欲くはへて勝手元に逃けしが、其頃よりお蝶いよ〳〵身の行ひつゝしみて、德を修むる事專一と心がけ、衾木綿着のいやしきは恥ぢねど、詞づかひ立ふる舞、家の内の經濟より始めて、世の交際人づかひと、細かに顧みれば未だ身に整はぬ事ばかり、茂げきが中に戀といふ怪しのもの、折々の波むねに起して、飽かれまじ厭はれまじ喜こばれ度し愛されたし、何とせば永世不滅の愛を得て、我れも君樣も完全の世の過ぐさるべきと、欲は次第に高まりて、さま〳〵の想像わき來たれば、逢ふに嬉しき物がたりの、一裏は如何にと枝葉を疑がひ、我れと我れを嘆げき身を責めて、一心の半は辰雄のもの、辰雄ありての習怒哀樂、善も悪も黒白も辰雄が指のさし次第、戀の山口くらく成りぬ、籟三局外にて立つ身の、迷ひを捨てゝ見る目には、辰雄の愛の度妹に下らず、彼れも眞情是れも眞情、取ならぶる好一對とこゝろ嬉しく、二人長閑に物がたるを聞けば、百花の園に双蝶の舞ふ心地、春風その座に吹渡つて我れも蕩然の樂しみ限りなく、右も左も喜びの中は、心障らず意氣昂々、取る筆いさんで畫圖うごき、唐草模樣割模樣、淵書き腰がき地つぶしの工夫、濃彩淡彩畢生の